リレー小説「キミとの文化祭」

ゆうかた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リレー小説「キミとの文化祭」

【Ｎコード】
Ｎ７０６６Ｋ

【作者名】
ゆうかた

【あらすじ】
鉛筆ヶ浜高校に通う津久江日月（つくえひつき）は、同じクラスの女子・筆ヶ崎瑞香（みずか）に恋をしていた。
はたして、津久江日月は文化祭の準備を通し、想いを寄せる筆ヶ崎瑞香に告白することが出来るのだろうか？
文化祭を舞台にした恋愛のリレー小説！

1話「踏み出した一歩」（前書き）

この作品は、以下の４名の作者によるリレー小説です。

水馬、ｙａｓｕ１９８０、チョコメロン、姫井星光

１話の執筆者：水馬

（敬称略）

1話「踏み出した一歩」

僕は、筆ヶ崎（ふでがさき）さんが好きだ。
筆ヶ崎瑞香（ふでがさきみずか）さん。
僕と同じ、鉛筆ヶ浜（えんぴつがはま）高校に通う二年三組の生徒。
整った顔立ち、黒のストレートでセミロングヘア。
スラッとした抜群のスタイルは、女子から羨（うらや）まれ、男子を虜（とりこ）にする。
ただ、僕は筆ヶ崎さんの外面だけではなく、内面も好きなんだ。
優しくて、包容力があって、明るく元気なところに魅力を感じている。

筆ヶ崎さんが好きな僕は、夏休みが終わるとともにある決心をした。
それは、筆ヶ崎さんに告白すること！
結果はともかく、僕の“筆ヶ崎さんが好き”という想い秘めたままにしておけば、人生一度の青春を無駄に過ごしてしまうことになる。
しかし、僕は筆ヶ崎さんとあまり絡むことがない。
だから、まずは、筆ヶ崎さんとお近づきになる必要があるんだけど――。

「よし、みんな！　今日は、文化祭の実行委員を決めるぞ！」
夏休みが明け、二週間ほど経ったある日、六時間目のホームルームで、二年三組担任の御手洗（みたらい）先生は元気にそんなことを言った。

それに対し、クラス全体の反応は「めんどくせぇ」とか「乗り気しないねぇ」のように、あまりやる気がないように感じられた。

「二年生というのは、中弛(なかだる)みの時期だからな。こういう行事で後輩にいいところを見せてやろうじゃないか！」

いつもジャージ姿の担任・御手洗(みたらい)先生は、いわゆる熱血教師というやつで、たまに生徒から鬱陶(うっとう)しがられることもある。

「みんな、やる気なさそうだが・・・・・・ま、本格的な準備が始まれば、意外とやる気が出るもんさ！」

確かにそういうことはあるかもしれない。

普段は不良っぽい生徒や、あまり周囲と絡まない生徒も、こういうイベント事では案外、率先して取り組むものだ。

実際、僕も去年の文化祭で、準備が楽しくて仕方なかった。

「さて、実行委員をやりたいと立候補する元気なやつはいないか？」

教壇に立ち、クラス全体を見渡す御手洗先生。

生徒を見るその瞳は、やる気と熱血の炎で燃えているように思えた。

「はい、先生」

「お、筆ヶ崎！　実行委員やるか？」

「えぇ、ぜひやりたいです」

「よし！　先生もフォローするぞ！」

御手洗先生は『実行委員　筆ヶ崎瑞香』と大きな字で黒板に書いた。

とても豪快な字。
やはり、体育教科を教えている先生なだけのことはある。
「じゃあ、筆ヶ崎一人じゃ大変だろうから、もう一人！　男子から誰かいないか？」
い、今か！？
今しかないじゃないか、僕！
このチャンスを逃したら、きっと、筆ヶ崎さんとお近づきになる機会はないし、僕自身をアピールすることも出来ないかもしれない。
「は、はい！」
「おぉ、津久江（つくえ）もやるか！？」
「や、やります！」
「よーし、頑張れよ！　協力するからな！」
僕の名前である『津久江日月（つくえひつき）』を、またまた大きな字で黒板に書いた御手洗先生は、とてもいい笑顔でクラス全体を眺めた。
「よし、じゃあ、みんな！　実行委員は筆ヶ崎と津久江に賛成なら拍手してくれ」
御手洗先生の言葉と同時に、クラス全体に拍手をした。
どうやら、みんな満場一致で決まりらしい。
でも、もしかしたら、『実行委員は面倒くさいから、決まって良かった』みたいなことを思っている人もいるのかもしれない。
ただ、今の僕にそんなことはどうでもよかった。
今は、筆ヶ崎さんと一緒に実行委員の仕事が出来るというだけで幸せなんだ。

「それじゃ、津久江と筆ヶ崎！　今日から早速、催(もよお)し物について話し合ってみてくれ。資料や書類は教卓に置いておくからな」

御手洗先生が話し終ると同時に授業終了を知らせるチャイムが鳴った。

『今日はこれにて解散！』と先生は元気に言って教室を出ていくと、生徒たちも帰り支度や、部活へ行く準備を始めた。

「津久江(つくえ)くん、みんなが帰るまで待つわよ」

「う、うん」

待つこと三十分。

二年三組のクラスに残っているのは僕と、筆ヶ崎さんだけになった。

筆ヶ崎さんは、早速、机を二つ向かい合わせ、席に着き、文化祭に資料や提出用紙を広げた。

「筆ヶ崎さん、進んで立候補していたけど、何かやりたいことってあるの？」

「私、お化け屋敷をやりたいのよ。こう見えても、怖いもの好きだからさ」

「なるほど、お化け屋敷か」

怖いものが好きとは、筆ヶ崎の以外な一面を知れた気がする。

やはり、実行委員になって正解だったかもしれない。

よし、もっと会話で筆ヶ崎さんのことを知って、もっと僕自身を

アピールしていこう。

「えっと、これは生徒会へ提出する用紙――」

「いいよ、私が書く。津久江くんは私の指示に従って動いてくれればいいから」

「え、でも、全て任せるわけには」

「いいのよ！　私が指示するって言っているでしょ！」

あれ・・・・・・怒られた。

まさか、僕は筆ヶ崎さんを怒らせてしまったのか？

だとすると、それってかなり僕への好感度が下がってしまうんじゃ・・・・・・。

「さてと・・・・・・ん、津久江くん、なんで落ち込んでいるのよ」

そうだ、ここで落ち込んじゃいけない。

好感度を出来るだけ上げる努力をしなければ！

僕は恋愛のイロハをあまり知らないけど、きっと、恋愛の初歩は好感度アップを狙うべきだと思う！

「ふ、筆ヶ崎さん！」

「ん、何？」

「その提出用紙、僕に書きま・・・・・・いや、書かせてください！」

腕を組み、そっぽを向いた筆ヶ崎さん。

そして、チラッと僕の方を見て――。

「べ、別に、私一人でも書けるけど、そこまで書きたいって言うなら、書かせてあげてもいいわよ」

「あ、ありがとう・・・・・・」

あれ、こういうの何て言うんだっけ？

確か、“ツンデレ”かな。

以前、アニメやインターネットに精通している僕の友達から、“ツンデレ”について教わっていたけど、もしかして、今の筆ヶ崎さんみたいなことを“ツンデレ”と言うのだろうか。

「あの、筆ヶ崎さんって・・・・・・ツンデレ？」

「ん、何よ、それ？　ツンドラ気候？」

「あ、やっぱ、何でもないです・・・・・・」

「さぁ、頑張るわよ、津久江くん。私たちで最叫（さいきょう）のお化け屋敷を考えるのよ！」

最も叫ぶ――“最叫”のお化け屋敷って・・・・・・。

筆ヶ崎さん、一体どれだけ怖いもの好きなんだろうか。

まぁ、たとえ、ツンデレで怖いものが大好きな筆ヶ崎さんであろうと、僕は彼女のことが好きだ。

今日、僕が踏み出した一歩は、きっと大きいはず。

だから、このチャンスを無駄にしないように、僕は頑張っていかなくちゃいけない。

目指すは、筆ヶ崎さんへの恋を成就させることだ。

頑張れ、僕！

負けるな、津久江日月（つくえひつき）！

1話「踏み出した一歩」（後書き）

どうでしたでしょうか。

ぜひ、この作品に関わっている方の作品も、

ご覧になってみてください。

2話「二人きりの放課後」（前書き）

この作品は、以下の４名の作者によるリレー小説です。

水馬、ｙａｓｕ１９８０、チョコメロン、姫井星光

２話の執筆者：ｙａｓｕ１９８０

（敬称略）

2話「二人きりの放課後」

放課後の教室に二人きりなんて、夢にまで見たシチュエーションじゃないか。
しかし、ツンデレなのかどうかは置いといて、ホントかわいいよなぁ。

「私の顔に何か付いてるの？」
筆ヶ崎（ふでがさき）さんが目を細めて言った。
うわぁ、つい、まじまじと筆ヶ崎さんの顔をみつめてしまった。とっさに、

「顔にご、ごはん粒がついて…」

それを聞いて口の辺りを撫でる筆ヶ崎さん。

「…ないよね、ははは」

ああ、なんかとってもカッコ悪い。

「わけわかんない」

筆ヶ崎さんは呆れた口調で言った。
つづけて、
「とにかく、最叫を目指すため、本物のお化け屋敷に行ってワザを盗まなくちゃね。明日の土曜空いてる？」
「あ、うん」
「ドリームランドに調査に行くわよ。いい、１０時に駅で待ち合わ

せ。遅れないでよ」

うーん。なかなか強引だけど、これは凄いチャンスじゃないか。

「じゃあ明日」

そういうと筆ヶ崎さんは資料を手に取り教室を出て行った。

2話「二人きりの放課後」（後書き）

どうでしたでしょうか。

ぜひ、この作品に関わっている方の作品も、

ご覧になってみてください。

3話「姉弟の関係」（前書き）

この作品は、以下の４名の作者によるリレー小説です。

水馬、ｙａｓｕ１９８０、チョコメロン、姫井星光

３話の執筆者：チョコメロン

（敬称略）

3話「姉弟の関係」

筆ヶ崎さんが教室を去るのを確認して、一人ガッツポーズをする。
（よっしゃあああぁあぁぁぁ！　これって調査という名のデートだよね？）
夢にまで見た筆ヶ崎さんとのデー・・・・・・っと調査、いいとこ見せて高感度アップだ。
教室の鍵を持って職員室に入る。

「失礼します」
「おう津久江、何ニヤニヤしてんだ？　教室で何かいいことでもあったのか？」
「あっ御手洗先生。いや何もないですよ」

分かっていても顔に出てしまう。まさかあの筆ヶ崎さんと一緒に遊園地に行けるなんて、この津久江　日月人生十七年もう一生の悔いなし！
おっとまだ本当の目標は達成してなかったんだ。

「お前教室で筆ヶ崎と二人きりだったんだろ？　・・・・・・お前まさか」
「先生！　なに言っているんですか！？」

まったくいくら体育教師だからって、言って良いことと悪いことぐらいは区別してもらいたいものだ。
ちなみにここは職員室だ、他の先生方もいらっしゃるのに先生には羞恥心というものが全く感じられない。
それが逆に生徒に受けてはいるところでもあるのだが。

「失礼しました」

教室の鍵を返し、自分の家に帰る。

帰り道。

普通に歩こうとしてもやはり顔はニヤけて、足はステップをし、頭の中では筆ヶ崎さんとの遊園地での数々のシチュエーションが、幾度となく浮かんでは消え、浮かんでは消えの無限ループが行われていた。

気がつけば家の前で僕は立ち止まっていた。

「ヒツ？　何やっているの？」

後ろから僕を呼ぶ声がする。聞いたことのある声が僕を一気に現実に引き戻す。

嗚呼筆ヶ崎さん、嗚呼筆ヶ崎さん。

「姉ちゃん！？　いつの間に」

「いつの間にって…ついさっきだけど。なに独り言ブツブツ呟いているの？　変態かあんたは、こんなのが弟だとは、神様どうしてなの？」

「悪かったな。できの悪い弟で」

バイト帰りという我が姉。

最近は三つ目となるパン屋のバイトを始めたらしい、堅実で真面目高校時代は生徒会長に自ら立候補をし、学校に津久江旋風を巻き起こした人物でもあった。

数々の伝説を残して、今現在は大学に通っている。

今まで日曜は姉にとって休日だったのだが、つい最近自分のための時間と言いながらパン屋のバイトを始め、日曜すらもバイトを始めた。

あなたは休むということを知らないのですか？　と聞きたくなるような人物である。

「ボーッと突っ立ってないで早く入る！　早く入る！」

後ろから肩を掴まれ、グイグイと押される。

「そういえば車ないよね？」

「またあのアホ親父か」

家の電気もついてないみたいだし、おそらく父母両方いないのだろう。

玄関には鍵が掛かっている。

ポストの後ろ側の小さい箱の中に、予備鍵がありそれを使い家に入る。

「ヒツ、元の所に戻しなさいよ」

予備鍵を持ったまま家に入った僕を後ろから言われたので、僕は姉ちゃんの方を向いた。

「姉ちゃん投げるよー」

左手で投げた鍵は姉の顔面向かって飛んでいく。

「ナイスサウスポー」

姉は普通に受け取り、鍵を元の場所に戻す。

「ただいまー」

室内は真っ暗で、とても静かだ。

「まったくあの親はどこに行ったのかねぇ。ヒツ、適当に料理作ってー」

ソファーにそのままダイブ。これが家での姉ちゃんの姿である。
僕の高校で津久江旋風を巻き起こし、伝説の生徒会長と呼ばれた我が姉だが家(オフ)では、ここまでかというほどのめんどくさがり屋なのである。
料理・洗濯・掃除などその他の家事は全て僕が任されてある。

「姉ちゃんも花嫁修業じゃないけど、料理ぐらいは作ったらどうなんだよー。そんなんじゃお嫁にいけないぞー」
「誰が嫁になんか行くもんか！　そっちから嫁(とつ)ぎに来るんじゃぁ。婿じゃ婿ぉー。料理とかお前、姉をナメたら大変な目にあうぞ！」

姉ちゃんが言うには自分が作る手料理を食べた人は、あまりの美味しさに涙腺崩壊らしい。
涙ボロボロで食べられる料理も、冷めておいしくなくなるらしいから作らないだけらしい。
その割に姉が料理を作っている姿というものを見たことがない。

「せめて顔ぐらいは拭けよ。化粧が大変なことになるのと、ソファーが汚れるから」
「やっぱ・・・・・・ていうか、指摘ばっかりうるさいよ、この筆(ふで)ケ崎(がさき)ＬＯＶＥ(ラブ)男(お)くん」

ダッシュで洗面所に向かう姉をしり目に、僕はテーブルに目を向ける。一枚の置手紙がある。

「さて、今回はどこに逃げたんだ」

家に誰もいないということは、時々あることだ。
だからもう慣れてしまったことではある。
何が起こっているのかは、この置手紙が物語っているだろう。

『フランスに行ってきます』

文字的には母が書いたのだろう。
その一言を見て、次は電話を見る。
電話の留守電の過去の履歴を見ると、今日のお昼に二件の電話がかかってきている。
それを再生する。

「一件目です――父さんだ、いいか我が娘、息子よ。俺は今大変な境地にある。仕事を休んで街をぶらついていたら、とても綺麗な女性をつけてナンパしていたところを運悪く母さんに見つかった。しかも父さんが三人の女性と一緒に食事をしていたところも見ていたらしい、奴は俺の胸ポケットの中に盗聴器を仕掛けていて会話の内容もモロばれだった――。今日午後十二時二十三分です」

「二件目です――引き続き父さんだ、あいつは本気だ。まさか今日の夜の話事まで筒抜けだった。どこから持ち出して来たのか知らんが、どこかの軍隊が使うようなマシンガンを持って襲ってきている。畜生あいつが最近何かの免許を取ったって言っていたのはこのことだったのか！　とりあえず父さんは身の安全のためにフランスに逃げる。別に日本の女性に飽きた訳じゃないぞ。父さんは日本の女性も大好――。今日午後十二時二十五分です」

ということらしい。
簡単に言うと、父さんがナンパして母さんに見つかって、今追われているということらしい。
前回は富士の樹海に身ごもると言って、二週間いなかった。

「今回は母さんずいぶん本気らしいわね」
「ははは、気絶で済めばいいけど」

顔も洗ってきた姉が俺にもたれてくる。

「お腹減ったよぉ。姉ちゃんもう限界・・・・・」
「あーもう分かったから、今から作るから。離れて。重いし。それと胸が当たる」
「重いとは失礼なー。そしてこの胸はここから先とても大きな武器になるのを、童貞君には分からんのだろう」

ああ、自分最高と謳っている姉がいるのが怖い。もう慣れたけどね。
冷蔵庫にある材料で、パパっと料理を作る。

「その匂いはカツ丼か！」
「そだよ」
「さすが弟！　私の好きなものを知っているとは、血の繋がっているだけのことはあるな」

テーブルで力尽きている姉が、ザオリクを誰かに唱えられたかのように一気に元気を取り戻す。
姉ちゃんはカツ丼が好きだ。
最近知ったことなのだがこういうときにカツ丼を食べさせると、大人しくなる。

「何食ってるの！？　それ僕のでしょ」
「かまわんでしょ。減るものじゃないし」
「減っているじゃん、一切れ減っているよ」

細かいことはいいんだよ、と言いながら自分のカツ丼を持ってくる。

「大将！　つゆだくで！」
「それ牛丼とかに使うんじゃないの？」
「牛丼もカツ丼も一緒でしょ、さっさとかけろ、ほら。たくさんかけろ！　ぶっかけ」
「ちょぉい。それ以上は言うな」

ここは大人しく姉のワガママを素直に実行するのと、面倒くさくないというのも知った。

「いただきまぁす！」

二人合わせて、食品に感謝しできたてのを食べる。
姉はカツ丼を食べるときはその長い髪の毛を、後ろで束ねて食べる特徴がある。

「ところで弟よ」
「何だ、姉ちゃん」
「おかわりは？」
「そんなものない」
「なんでじゃー！！」

椅子を前後に動かしながら、ねだる。
姉ちゃん何歳だよ。

「ないものはない、欲しかったら自分で作れ。作って泣けばいいじゃないか」
「気にくわん。あっ筆ヶ崎さん」
「へ！？」
「スキあり」

僕が目線を変えた瞬間に、姉は腕を伸ばし僕のカツを取り上げる。

「人のカツを取るなー。返せよー」
「へへーん。よそ見しているのが悪いんだろこれだから初心者は、チェリーボーイ君は困る」
「何が困るんだよ」

僕としたことがしてやられた、最後に食べようと残しておいた最後の一番大きな一切れを、完全に姉に持っていかれた。
若干涙目になりつつも、お茶を飲みほす。

「さてと、片づけるか」
「弟よ、挨拶を忘れている」
「ごちそうさまでしたー」

僕達、津久江家では挨拶に厳しい。ご飯を食べるときのいただきます。終わったときのごちそうさま。
行ってきます、ただいま、おはようございます、おやすみなさい。
人とのいい関係を築くには、挨拶が大切ということらしい。
他の人から見れば変なことかもしれないけど、これは家訓のうちの一つにもなっている。

「私の分も頼んだ弟よ」
「どっか行くの？」
「あいあむすりーぴぃー」
「お風呂は？」
「起きたら入る。おやすみー」

腹をかきながら、結んでいた髪をほどき、自分の部屋に行く。
僕も早く寝ないと、明日は遅れるわけにはいかないからね。
二人分の食器を洗い、風呂に向かう。

3話「姉弟の関係」（後書き）

どうでしたでしょうか。

ぜひ、この作品に関わっている方の作品も、

ご覧になってみてください。

４話「ＤＲＥＡＭ　ＬＡＮＤに行こう」（前書き）

この作品は、以下の４名の作者によるリレー小説です。

水馬、ｙａｓｕ１９８０、チョコメロン、姫井星光

４話の執筆者：姫井星光

（敬称略）

4話「DREAM　LANDに行こう」

僕と筆ヶ崎さんは電車に揺られていた。
向かう先は、ドリームランド。
夢の園。
色恋に飢える男共にとって、まさに夢の領域。
そのドリームランドに、僕と筆ヶ崎さんは向かっている。
ドリームランドに向かう高校生男女二人組――
なんて素晴らしい形容の仕方なのだろうか。
まあ、それは疑いようもない事実と言えば事実なのだろうけれど、
僕の心境がやや複雑なものとなっているのは、僕と彼女のモチベーションの違いのせいなのだろうと思う。
僕はというと、今朝ベッドを起きた瞬間から「やっほーい！　デートだ、デートだー」というかなり浮足立ったテンションであった。
傍若無人な姉の妨害を掻い潜りつつ、愛おしい筆ヶ崎さんが待つ駅へ生肉に群がる猛獣のごとく向かったわけだが……。
一方の筆ヶ崎さんはというと、

「言っとくけど、道中でも中でも私にひっつかないでよね」

と冷ややかに僕を突き放し、決して今回のドリームランドがデートだとかそんな対象のイベントではないのだと圧してきたのだ。
電車の座席関係に関しても、その互いの醸す「気持ち」に生じている差がよく見てとれた。
本来なら、僕のすぐ隣に筆ヶ崎さん。ちょっと手を伸ばせば彼女の身体のどこの部位にも触れられそうな――そんな風に座わせて頂きたかったのだけれど。
残念ながら今彼女は僕の向い側の席。正確にいうと、斜向かい。
とことん、僕と距離を置きたいらしい。

ひっつかないで、とは言われたものの、はたしてどのくらいの距離までが筆ヶ崎さんの許容範囲なのか、僕には皆目見当がつかなかった。

「さあ、行きましょうか」
「ああ」

ドリームランド最寄の駅に到着して、僕よりも早くプラットホームに足を付けた筆ヶ崎さん。
その様があまりにもいそいそとしていて愛らしかったので、僕は思わずにやついてしまった。

「どうしたの？　そんな嬉しそうな顔をしちゃって」
「え、えっと……いやその、ついにこの日がきたか、って思って」

はっ。
しまった、つい気が緩んで本音が漏れてしまった。

「うん。確かに。そう、ついに来たかって感じよね」
「え！？」

感慨深そうに目を細め、深く頷く筆ヶ崎さん。
ちょっと待って。
筆ヶ崎さんもそんな風に思っていたのか！？
つまり、それって僕のことを……。

「ドリームランドって近場だから、どうしても一人で行きにくいのよね。ほら。園内を一人でふらふら歩いているところをさ、知り合

いに見られるのって恥ずかしいじゃない？」
「……へ？」
「お化け屋敷がリニューアルされても、それって中々酷な話なのよ。嫌がらせレヴェルよ、ホント。だから、今回機会が出来て……そう、超ウレシイって感じ？」

ズゴーッ！

「そ、そういうことか……」
「そういう、って。それ以外に何かある？」

いえ。
とんでもございません。
一人で勝手に図々しい勘違いをしてしまってすいませんでした。

「ははは……。じゃあ、行こうか」
「そうね。さっさと行きましょ。ぼさっとしてると、お化け屋敷が逃げてしまうわ」

今年で一番苦々しい苦笑を浮かべる僕と、嬉しそうな表情（かお）をしている筆ヶ崎（ふでがさき）さん。
向かう先、過ごす先は一緒だというのに、面白いほどのモチベーションの違い。テンションの差。
ともあれ、本番はここからだ。
まだまだアピールのタイミングは残されているのだ。
お化け屋敷内で、か弱い悲鳴を上げる彼女を、優しく抱きしめる――。
そんなことだって、もしかしたら……。
てか、

「あ、筆ヶ崎（ふでがさき）さん。　何もそんなに急がなくても、お化け屋敷は逃げたりしないかと」
「うっさいわね！　分かってるわよ、そんなこと！　例えよ、例え。あんたってさ、小学生！？」

あんたってさ、小学生――。
揚げ足を取った僕に、屈託のない笑顔でそう返した筆ヶ崎（ふでがさき）さん。
とても眩しく目も眩むような笑顔。
それは、それはとても幸せそうな――。

４話「ＤＲＥＡＭ　ＬＡＮＤに行こう」（後書き）

どうでしたでしょうか。

ぜひ、この作品に関わっている方の作品も、

ご覧になってみてください。

5話「いざ、お化け屋敷へ」（前書き）

この作品は、以下の４名の作者によるリレー小説です。

水馬、ｙａｓｕ１９８０、チョコメロン、姫井星光

５話の執筆者：水馬

（敬称略）

5話「いざ、お化け屋敷へ」

ドリームランドは、日本国内においての知名度は結構高いほうらしい。

世界的に有名なキャラクターの某遊園地には敵わないが、豊富なアトラクションやクオリティの高さから、日本の有名な遊園地となっているそうだ。

筆ヶ崎（ふでがさき）さんは、僕と入場ゲートへ向かうまでの間に、そんなことを教えてくれた。

「津久江（つくえ）くんは、ドリームランドに来たことある？」

「小さいときに何度か来たけど、最近は全然来ていないなぁ」

「ふ～ん、じゃあ、お化け屋敷に入ったことは？」

「ないねぇ」

あれ！？

普段、筆ヶ崎さんとあまり喋る機会のない僕が、こんなにも会話が続いているなんて、凄すぎる！

それに、筆ヶ崎さんの私服も初めて見た。

いやぁ、実行委員になって良かったなぁ～。

「どうしたのよ？　また、嬉しそうな顔をして」

「え、い、いや……幸せだなぁ、と思って」

「そう、良かったわね」

筆ヶ崎さんは、いつものブレザーにチェック柄のスカート姿という学校指定の制服ではなく、今日はスカートの下にスパッツを穿き、袖にフリルのついたカットソーを着ている。

残暑はまだ続いているため、筆ヶ崎さんは色白な肌を結構露出させているが、きっと紫外線対策などはバッチリなのだろう。
それに比べて、僕はジーンズにパーカーという地味な服装……。
あぁ、もう少し良い服を着てくれれば良かったかも、と今になって後悔している。

「そういえば、津久江くんは、ホラーものに耐性ある？」
「ん～……たぶん、人並み程度じゃないかと」
「じゃあ、ドリームランドのお化け屋敷を知らない津久江くんに、これをあげるわ」

そう言うと、『ドリームランド　インフォメーション』と書かれた冊子を差し出した。
僕は、それを受け取り、歩きながら読み進めていく。
どうやら、ドリームランドのパンフレットのようだ。
アトラクションがある場所や、詳細説明、食事からお土産についても、しっかりと明記されている。

「一応、説明しておくけど、ここのお化け屋敷は二種類あるのよ」
「二種類？　上級者向け、初心者向けみたいなかんじかな」
「中級者はどこへ行ったのよ。　そういう種類じゃなく、内容が全く異なるのよ」

内容が異なる？
驚かすだけの内容か、トラウマになる内容か、みたいな？

「ホラーものって、洋風モノと和風モノがあるのは知っている？」
「あぁ、知っているよ」
「その二種類が、ここにはあるのよね。両方とも、超上級者向けだけど」

洋風ホラー、和風ホラー。
ホラー映画でも、その雰囲気は表立って出ている。
洋風ホラーは、“ビクっ”とするようなもの。
和風ホラーは、“じっくり”と怖がらせ、ジワジワと人間に恐怖を与えていく感じ。
要は、大きなダメージを一度で与えるか、小さなダメージを継続的に与えるか、ということだろう。

その二種類が、超上級者向けという形で、ドリームランドにあるそうだ、筆ヶ崎さん曰く。

「もしかしたら、津久江くん、死んじゃうかもしれないけど、頑張ってゴールしてね」
「え……は、はい……」

死ぬほどの恐さって……。
恋愛に困難は付き物だと聞くけど、まさか死ぬ可能性まであるなんて聞いてない。
だけど、筆ヶ崎さんに告白するまでは死ぬわけにはいかないんだ。

「まぁ、そんなわけで、着いたわよ」
「ぁ……」

血塗られた看板や建物。
周囲は薄暗く、この近くだけ雑木林に囲まれている。
前を見れば、死ぬほどヤバいお化け屋敷が二つ。
後ろを見れば、面白そうなアトラクションや子供の楽しそうな声が聞こえ。
再び、前を見ると、恐怖の塊と言わんばかりのオーラを放つ建物、

誰かの絶叫が嫌でも耳に入ってしまう。

「ねぇ、筆ヶ崎さん。ここって、まだ、ドリームランドの敷地内だよね？」

「なに言っているのよ、そうに決まっているでしょ」

そうか、一応、ここも夢の園なんだ。

個人的には、ドリームランドではなく、バッドドリームランド――つまり、悪夢の園だよ。

「さて、これから中へ入るわけだけど、津久江くんはどっちから行きたい？」

どっちから……。

洋モノか、和モノか。

建物の外観を見る限りでは、洋館は洋モノホラー、日本家屋は和モノホラーだろう。

それぞれ二階建て。

恐怖という点では、どちらも同じような雰囲気を醸し出してはいるけど、『継続的に恐怖に陥れる』か、『大きな恐怖を断片的に与えられる』のどちらかを選ぶのであれば、僕は後者を選ぼう。

「洋館ね。じゃあ、早速入りましょ」

「え、まだ心の準備が……」

筆ヶ崎さんは聞く耳持たず、すたすたと洋館の入口らしき、古びた木製扉の前へ歩いて行った。

聞く耳持たず、というより、目の前にあるお化け屋敷に興奮して、周囲の声が聞こえていないのかもしれない。

二人きりのお化け屋敷。

“二人きり”という部分は非常に嬉しいのだが、“お化け屋敷”というシチュエーションがどう作用するのか……。

「さ、どんな恐怖が待っているのか、楽しみねぇ」

「そ、そう、そうですねぇ」

緊張して口籠ってしまった。

ちなみに、今現在の緊張は、筆ヶ崎さんと一緒ということに対してのドキドキの方がやや強めだ。

この後、この緊張の度合いがどう変わっていくのだろうか。

「あれ……真っ暗じゃないんだね」

「真っ暗なお化け屋敷なんて、ただ足元悪くて、怪我させるだけでしょ。最先端のお化け屋敷は暗くなくても恐怖に陥(おとしい)れてくれるのよ」

なるほど。

真っ暗で、懐中電灯を持って進んでいくお化け屋敷というのが、僕の中での勝手なイメージ。

固定概念だった。

「ふむ…・・・やっぱり、単純な通路構成は取り入れるべきね」

なんて、冷静なんだろうか、筆ヶ崎さんは。

怯えることなく、がんがん突き進む姿を見ていると、とても勇ましく思えてくる。

僕なんて、筆ヶ崎さんの後ろにくっつき、辺りをきょろきょろ見渡しているというのに――――。

トントン、と誰かが僕の肩を後ろから叩いた。
ここで、冷静さを失っていなければ、振り返ることを躊躇(ためら)うのだろうけれど、僕は思わず振り返ってしまった。

「グオオォォォッ！！」
「っ！？」

僕の背後にいたのは、ゾンビの群れだった。
細長い通路がゾンビで溢れかえっている状況。

「そっか、やっぱり不意打ちという点は、洋モノの特徴なのかもしれないわね。あと、多数で攻めるというのもありかもしれないわ」

驚く様子はなく、メモ帳に書きこんでいる筆ヶ崎さん。
僕は、あまりの恐怖に声すら出ず、硬直しているというのに……。

「さ、次行くわよ、津久江(つくえ)くん」
「……はい」

くっ、このままお化け屋敷に負けていていいのか、津久江日月(つくえひつき)！
少しは、筆ヶ崎さんにいいところを見せなくてはいけないんだ。
だから、こんな程度で硬直しているようじゃダメ――。

「ひぃっ！？」
「やはり、勢いは大事ね。　それに、複数人で驚かす場合は、コンビネーションも大事と……」

くそっ、この程度で声を上げるようじゃ、筆ヶ崎さんにカッコいいところは――。

「うおぉっ！？」
「接近によって、急激な威圧感を与えるのも手法の一つね」
だ、か、ら！
これぐらいで、怯えていてはいけな――。
「うおわぁっ！」
「無言による圧力もあるようね……って、津久江くん、私の腕にしがみ付かないでよ」
「あ、ご、ごめん……」
思わずしがみ付いてしまった……。
でも、僕がビビって、くっついてしまっただけだから、厭(いや)らしい気持ちは全くない。
ただ、このシチュエーションが逆だったら良かったのになぁ、という残念な気持ちはある。
「あ～、面白かった～！」
両手を上げ、元気良く外へ出た筆ヶ崎さん。
一方、僕はとてもげっそりとした状態で、洋館の出口から外へ数歩進み、地面にしゃがんだ。
「どうだった、津久江くん」
「さ、最後の西洋の怪物大集合は……もう無理……」
「やっぱり、ドラキュラやフランケンシュタインなどは使いたいわよねぇ」
笑顔でそんなことを言っている筆ヶ崎はすごく素敵だ。

筆ヶ崎さんの存在は、今の僕をとても癒してくれる。
洋館での恐怖が、次々と筆ヶ崎さんのことで上書きされていく。

「さて、次は和モノお化け屋敷ね！」
「え、休憩は……？」
「この高揚感のまま、次へ行きたいのよね。じゃあ、津久江くんは休んでる？」

休みたいのは山々だが、そんなことしたら、筆ヶ崎さんとの大事な、貴重な時間を無駄にしてしまう。
ここは、勇気を出して、お化け屋敷に挑むしかない！
先程のような、情けない姿は見せてたまるか。

「よし、行こうよ、筆ヶ崎さん！」
「その勢いよ、津久江くん」

僕は先陣切って、日本家屋へ特攻していく。
土間（どま）や高めの上がり框（がまち）など、今の日本にも残っている住宅形態だ。
正面にある障子戸を勢い開け、中へ入っていくと。

「ちょっと、津久江くん。そんなに急いでどうしたの？　ゆっくり進むことでお化け屋敷の楽しみが味わえるというのにさ」
「そ、そうなんだ……」

僕と筆ヶ崎さんは、六畳ほどの和室の中央で立ち止まっていると——。

「うぅっ……うぅぅっ……」

隣の部屋から、女性がすすり泣いている声が聞こえた。

もう、これは嫌な予感しかしないんだけど、その声が聞こえる方の襖(ふすま)しか開かない……。
多分、他の襖や障子戸は、壁に装飾をしただけのダミーなのだろう。

「これよ、これ！　この、じわじわくる感じが和モノの素晴らしさよね」

筆ヶ崎さんのテンションは上がる一方のようだが、僕のテンションとモチベーションは依然降下を続けている。
このまま、限界に達したらどうなるんだろう。

「さ、津久江くん、襖(ふすま)を開けてみてよ」
「あ、僕が開けるの……？」
「うん、私だと驚かないと思うし、津久江くんが驚く様子を見たいのよね。やっぱり、第三者視点は必要だろうからさ」

僕は実験体ですか。
まぁ、筆ヶ崎さんの頼みだから、聞かないわけにはいかない。
そういうわけで、僕は、恐る恐る襖を開けていく。

「……ん？」

ワァッ！と、洋館のときのように驚かせてくるのかと思ったけど、そういうことはなかった。
襖を開けた先は、四畳くらいの小さな部屋で、そこの真ん中に着物を着た長い黒髪の女性が座っていた。

「……えっと……これはどうすれば」
「声、かけてみれば？」

「やっぱ、声かけなきゃダメかぁ……」
僕は、ゆっくりとその女性に近づき、「大丈夫ですか？」と小さな声で尋ねると――。
「……あたしの顔がないの」
勢いよく、こちらを振り返った女性の顔には、何もなかった。
目も、鼻も、口も、眉も、何もない。
のっぺらぼうだった。
「っ……！」
「どう、和モノも怖いでしょ？」
「う、うん……」
「さ、どんどん進むわよ！　和モノの良さも改めて調査しないとね」
この後も、僕を先頭に、日本家屋内を進んでいく。
筆ヶ崎さんは、後ろで僕を見張って……いや、きっと見守ってくれていただろう。
和モノの特性と、筆ヶ崎さんの前を進むということもあり、和モノお化け屋敷では、多分間抜けな姿は見せていないはずだ。
そんなわけで、どうにか、日本家屋も出口に辿り着いた。
「いやぁ、楽しかったねぇ～」
「そ、そうですね……いい参考になりまし、いてっ」
チクッ、とした痛みが右手に走った。
見てみると、右手の人差指に切り傷が出来ている。
もしかして、日本家屋内のどこかで切ってしまったのかもしれない。

傷は深くないものの、血が出て来ている。

「どうしたのよ、それ」

「たぶん、お化け屋敷のどこかで切ったのだろうけど。だ、大丈夫だよ、心配しないで」

「ダメよ、傷一つでも、甘く見ない方がいいわよ」

筆ヶ崎さんはそう言うと、ブランド物のバックから絆創膏(ばんそうこう)を一枚取り出し、目線を反らしながら僕に差し出した。

「これ、早く貼りなさい」

「あ、ありがとう」

絆創膏には花柄の可愛らしい模様がついている。

やっぱり、筆ヶ崎さんは優しいなぁ。

「筆ヶ崎さん、優しいんですね」

「べ、べつにそんなんじゃないわよ。　ただ、偶然持っていただけだから」

「そ、そんなに大きな声出さなくても、聞こえるから」

ぷいっ、とそっぽを向く筆ヶ崎さん。

あ、ツンデレだよね、これ。

でも、何だか、こういうのも悪くないよなぁ。

「そうだ、筆ヶ崎さん。この後はどうするの？　もう解散？」

「そうねぇ、せっかくだし、遊んでいってもいいわね」

お化け屋敷の調査はつい先ほど終わった。

ということは、あとはデートに出来る！？

やばい、かなり下がったテンションが、急上昇してきた！

「調査したことは、すぐまとめておいた方がいいからね」

「そうね、とりあえず、お腹が空いたわ。津久江くん、お昼ご飯にしない？」

き、きた！

二人っきりでの食事！

こ、これは、もうデート以外の何ものでもないじゃないか！

「じゃあ、筆ヶ崎さん、どこでお昼食べようか」

「そうね、手軽に済ませるならファーストフードでいいんじゃない？」

「なら、この近くにあるハンバーガーショップかな」

「そう、早速行くわよ」

僕は筆ヶ崎さんの横に並び、ハンバーガーショップへ向かう。

傍から見れば、もしかしたら、僕と筆ヶ崎さんは、彼氏彼女の関係に見られているのかもしれない。

そう思うと、胸は高鳴り、テンションが最高潮になりそうだ。

今の時刻は、正午の少し前くらい。

午後の空いた時間が出来れば、筆ヶ崎さんと遊ぶことが出来るかもしれない。

よーし、こうなったら筆ヶ崎さんと、とことん仲良くなってやる！

「筆ヶ崎さんって、本当にホラー好きなんだね」

「そうね、小さい頃からずっと好きなのよねぇ」

そうそう、こんな感じで、話題を盛り上げて、好印象を与えていこう。

筆ヶ崎さんの笑顔も見られるし、僕への好感度も上がるだろうし、一石二鳥じゃないか。

5話「いざ、お化け屋敷へ」（後書き）

どうでしたでしょうか。

ぜひ、この作品に関わっている方の作品も、

ご覧になってみてください。

６話「彼女の秘密」（前書き）

この作品は、以下の４名の作者によるリレー小説です。

水馬、ｙａｓｕ１９８０、チョコメロン、姫井星光

６話の執筆者：ｙａｓｕ１９８０

（敬称略）

6話「彼女の秘密」

僕はツインチーズバーガーセット、筆ヶ崎さんはファミリーバーガーセットを頼んだ。
「何に乗ろうかなあ」僕は何の意味もなしにそう言った。
「ここに、人気アトラクションベスト１０ってのが載ってるわね。それを乗れるだけ乗っていけばいいんじゃない？」パンフレットをひらひらさせている。
「そうだね」なんかすごくいい感じだ。

僕らは食事をおえるとアトラクションのハシゴをした。ジェットコースターに始まり、メリーゴランド、コーヒーカップ、ジェットコースターその2、占いの館、と、楽しい時間が過ぎて行ったところで、辺りも暗くなってきた。
「暗くなったわね」売店で買ってきたソフトクリームを舐めながら筆ヶ崎さんが言った。
「そうだね。そろそろ帰ろうか」ホントはもっといっしょにいたかったけれども、反論するわけにもいかない。

僕らはドリームランドを出た。そういえばこんなことを思い出した。
「そういえば、こんなことを思い出したんだけどさ。ドリームランドの東側って旧道が通っていて、そこにちょうどトンネルがあるんだけど」筆ヶ崎さんを見る。腕時計なんかを見ている様子だと、僕の話にあまり興味がなさそうだ。
「そこのトンネルに『でる』らしいんだ」
「なによそんなの、よくありがちな話ね」
「でも、この前テレビで心霊スポット特集やっていたとき、ここ取

り上げられていたよ」
「だからなによ」
あれ？　てっきり、こういう話には食いついてくると思っていたんだけれど、あてが外れたかな？　なんとなく筆ヶ崎さんをみつめていると、
「わたしがビビってると思ってるんでしょう？　わかったわよ、行ってみましょうそのトンネルに」筆ヶ崎さんが若干挙動不審に見えたのは気の所為か？
僕らは旧道に向かって歩き始めた。そりゃ、僕も怖いけど、さっきはカッコ悪かったから、汚名返上のチャンスでもある。歩くにつれ、だんだんと道は寂しくなっていった。

「ここがそうだと思う」寂しくなる道の延長線上に大きな、古いトンネルが姿を現した。
「ちょっと、ここにホントに入るの？」あれ？　なんだかお化け屋敷ではお化けもジャガイモのように傍観していた彼女がすこし声を震わせている。やっぱり、怖がっている？
「行ってみよう」人間不思議なものだ。片方が弱っているともう片方はやたら強気になれる。
筆ヶ崎さんって誰かに作られた『お化け屋敷』やホラー映画みたいなものには耐性があるのだろうけど、リアル心霊スポットはからっきしダメだったりして。とにかく中に入ってみる。
「ちょっと！　おいてかないでよ！」
あれ？　筆ヶ崎さん近い？　今日一日中一緒にいたけど、こんなに近いのは初めてだ、すこし荒くなった呼吸まできこえる。
「たぶん何も出ないと思うよ」とは言いながらも、この四方から圧迫されそうな張りつめた空気は、ただものじゃない。僕はまた奥に進む。と、ポーンと何かの転がるような音がした。
「えっ！なに！？」
ここで奇跡が起こった。僕の左腕になにやらあったかく柔らかいも

のが押し付けられたのだ。つまり、筆ヶ崎さんが僕に抱きついてきたのであった。
「なんでもないよ」そう言って筆ヶ崎さんを見るとまるで小動物のように震えていた。と、僕を突き放して、
「もう帰る」
「えっ？　でもまだ半分も来てないよ」
僕の言葉など聞きもしないで、入り口に速足で向かっている。
やっぱりリアル心霊スポットはダメらしい。カッコ悪いところを見せたわけじゃないけど、筆ヶ崎さんの秘密を知ってしまったことは自分でもどう処理していいものか分らなかった。

道もだんだん賑やかになってきて、駅の改札まで来た。と、突然、
「絶対誰にも言っちゃ駄目だからね」すごい剣幕だ。
「な、なにを？」
「すっとぼけないでよね。その、私が……に弱いこと」さいごが聞き取れない。
「何に弱いこと？」
「だから、リアル心霊スポットに弱いこと！！」やっぱりそうか？
「とにかくぺらぺらしゃべったりしたら、ただじゃおかないわよ」
一体何をされるのか、若干の興味もある。
「わかってるよ。そんなこと言わないよ」
すると、筆ヶ崎さんは小指を出した。指切りとは古風だなあ、うれしいけれど。…しかし、急にその小指をしまって代わりに、
「絶対だからね」と、怒り気味に言って、もう出発する電車に乗るべくさっさと改札をくぐってしまった。
…一緒に帰るつもりはないんだ。まあ、怒らせてしまったし、しかたがないか。

家に帰る道中、きょうのデート（？）は失敗したなとつくづく思った。それでも左腕の感触を思い出してなんかいるあたり、自分はし

ょうがない奴だ、などと思えてきた。

6話「彼女の秘密」（後書き）

どうでしたでしょうか。

ぜひ、この作品に関わっている方の作品も、

ご覧になってみてください。

7話「(、　・ω・)　・・・」(前書き)

この作品は、以下の４名の作者によるリレー小説です。

水馬、ｙａｓｕ１９８０、チョコメロン、姫井星光

７話の執筆者：チョコメロン

（敬称略）

7話「(、　・ω・)　・・・」

筆ヶ崎(ふでがさき)さんと別れて、家に帰る。
早く帰らないと、姉ちゃんが何を言うか分からない。
「あの人腹減ると何するか分からないからな」
自分で料理を作ればいいのに、なぜか弟の、僕の帰宅を待つ。それを律義と受け取るか、料理を作るのが面倒くさがり屋と受け取るかは自由だけど、早く家に帰らんことには大変なことになりそうだ。
前は僕の部屋で暴れまわっていたからねー。
夜の静かな町をジョギングしながら、駆け抜ける。十三分ぐらいで自宅が見えてくる。
家は一階部分が明るくなっており、姉が先に帰宅しているのが分かる。
玄関のドアに手をかけ、家に入る。
「姉ちゃんただいまー」
靴を脱ぎながら、姉に呼び掛ける。するとリビングのほうから何かが走ってくる音が聞こえる。
「姉ちゃん廊下は走ったら駄目だって、小学生のとき習わなかっ」
「清めじゃー」
僕の言葉を軽くシカトして姉は何かを投げてくる。
「ぶはっ、いきなり何を！」
「ダマレー」
さらに何か分からない物質を投げてくる。砂！？　いや違うもっと何かミネラル的な。
「何これ？　ショッペ！　塩！？」
「聖なる乙女領域に土足で入るな、この悪霊ぉ」
「実の弟に向かって悪霊はないだろって塩投げんな、地味に痛いか

ら服の中に入って気持ち悪いから」
それでも姉ちゃんは僕に塩を投げてくる。ひとまず外に出る。
「一体何なんだよ」
服の中に入った塩を取り掃(はら)いながら、なんで塩を投げてくるのかを考える。

意味が分からん。新手(あらて)のいじめか？　僕も何か投げてやる。
そこらへんに落ちている、小さい石を片手に装備して右手で玄関のドアを開く。
「！？」
おかしすぎる、僕の目が逝っているのだろうか。玄関のドアを開けた先には、目の前には巫女の服を着た姉の姿がある。しかも何気に似合っている。そんなことはどうでもよくて、しかもセットも良く分からないものに変わっている。ロウソクや石の周りにしめ縄みたいなのを巻いたものとかがセットされている。
「何これ？」
「そこに座れ」
「へ？」
「座れと言っているのが分からんのかー」
塩を投げながら怒ってくる、これはこれで以外とシュールだ。ガミガミ言われるのが鬱陶(うっとう)しいので、言われたと通りに正座する。
「ちょっと待ってろ。今から、十秒足らずで覚えた神楽の舞いを見せてやる」
「意味が分からん」
僕の言葉を完全に聞き入れない姉。
「いかん途中から思い出せん」
「おーい姉ちゃん」
「よしだったら、あの有名な魏志倭人伝にも記されていた卑弥呼の

鬼道で何とかしてやるから待ってろ」
「おーい」
「これをこうして、ああして」
「話聞けよおおぉぉ！」
「D・A・M・A・R・E」
「もう我慢ならん」
戦争だー戦闘だー！　手に持っていた小石を姉目がけて投げる。
しかし姉ちゃんはヒョイっと体を横に曲げ回避する。そしてそのままこの狭い玄関へ飛んでくる。
「石とか投げんなぁぁ！　当たったら危ないだろうがー」
「問答無用で塩を投げてきたやつが言うことかよ」
「タイトン・ホールド！」
「絞め技じゃん！？」
一瞬のうちに首に腕を回され、締められる。これ以外と苦しいから！！
「もういいだろう」
汚れたものを見るような眼で僕を見捨て、振り向きざまにさらに塩を投げつけてくる。
これ完全にいじめだよね？　訴えていいよね？
これが僕の姉ちゃんである。腹減ったら何をするか分からない、これが姉である。認めたくないけど姉である。血の繋がった姉である。
「はぁ…意味が分からん」
塩を再度掃い、台所に向かう。もちろんテーブルには先程意味のわからない行動を起こした姉の姿が。今日はいつも以上に疲れているようだ。
「弟よ、手を洗え」
「へいへい」
「今日の夕飯はまだかー」
「今作っているよ」
「時間はー後何分でできるんだー」

「カップラーメンじゃないんだからな、そうだなチャーハンでも作るか」
「三分間だけ待ってや」
「それはまずい」
卵をかき混ぜながら、フライパンが熱せられるのを待つ。
「姉ちゃんさー」
「ん？　なんじゃらほい」
「いやもっと女らしい言葉使えよ。そんなことはどうでもよくて、なんで塩投げたの？」
「お前今日どっかの心霊スポット的なところに行っただろう」
「質問に答えろよ。まぁ行ったけど」
おそらく筆ヶ崎さんと行ったところのことを言っているんだろう。
「お前に悪霊が付いていた」
「は？」
「だから清めただけだ」
「何で悪霊とか分かるの？」
「姉ちゃんの霊感なめんなよ、守護霊から自縛霊そして怨霊とかいろいろ見えるからな。姉ちゃんの周りにはイケメンの守護霊がたくさんいるからな」
何かに抱きつくようなポーズをとる。しかしすぐにテーブルにうつ伏せになる。そして直後グゥ～という音が聞こえる。
「今の聞いたか？　姉ちゃんの腹の中では深刻な資源枯渇中だ、さっさと資源よこしやがれ」
「それが女性いう言葉か」
ご飯を炒め終わり、お皿に盛る。
「できたよ」
「いただきまぁーす」
皿まで食べようかという勢いで、チャーハンを食べていく。おそらくおかわりを期待しているだろうから、しっかりと作っておいた。
「おかわりならあっちにある」

「さすが弟」
「僕の分も残しておいてよー」
「そんなものはない！　全て私のものだ！」
フライパンごと自分の席に持ってくる姉。この人の胃袋を一回解剖してみたいと思ったのは今ので何回目なのだろうか。僕だって高校生だ、食べざかりの時期でもある、のにだ、姉ちゃんは僕の倍ぐらい食べる。なのに、太らない。体系は変わらない、いや変わらないわけではない、胸は進化しているのかも。
「なにジロジロ人の胸見てんだ変態。それともなにか、巫女服の姉にたいして何か萌え的なイメージを抱いてんのか？　あーいやだねー、こういう変態を持つ弟がいるっていうのは。姉ちゃんいつ性に飢えた弟に襲われるのか心配だー」
「食事中」
「おっとすまん。遊園地に行っても手すらつなげない残念な弟を持っていると想像してしまうと、つい口がすべった」
「遊園地いたのかよ」
「いやぁ一日だけのバイトがあって給料は少なかったが、私がどこにいたか分からんだろう」
誇らしげに胸を張る姉。確かにどこにいたのか分からない、清掃員にでもなっていたのだろうか、でも姉ちゃんみたいな髪の長い人なんていなかったし。
「分からんようだな」
「分かるわけないだろう」
「いやぁお前のビビり方と言ったら、ビデオにでも録画しておくべきだったな」
どこにいたのか全く分からない。考えているうちに、姉ちゃんはフライパンの中も食べきり食器を洗いにかかっている。今日は珍しく姉ちゃんが食器を洗っている。
「姉ちゃんが洗うなんてめずらしっ」
「のっぺらぼうー」

泡で顔面を隠し、いかにも今日のお化け屋敷に……

「まさか！」

「はい。お休みー」

7話「(、　・ω・)　・・・」（後書き）

どうでしたでしょうか。

ぜひ、この作品に関わっている方の作品も、

ご覧になってみてください。

８話「遠回りルート」（前書き）

この作品は、以下の４名の作者によるリレー小説です。

水馬、ｙａｓｕ１９８０、チョコメロン、姫井星光

８話の執筆者：姫井星光

（敬称略）

8話「遠回りルート」

頭が、痛い。
加えて鉛のように重い。
何故か――それは言うまでもなく、頭のネジのぶっ飛んだ馬鹿姉のせいである。

「はい、お休みー」

泡まみれの顔面が特徴的なその妖怪。
ときには顔面のパーツを紛失してしまうこともあるのだろう。
ときには、ね。
そんでもって、またあるときは、津久江（つくえ）家の長女、か……。

「……お休み～、じゃねぇよ。ふざけるな」
「ふざけてなんかない。一端の妖怪アルバイターだぞ、姉ちゃんは。いつだって大マジだ」
「そうか、大マジか……」

ならば許そうか――？

「あえて聞くけれど、偶然、だよな？」
「ぁあ？　ああ、うん。偶然、偶然、超偶然」

ぁあ？　って、なんだ？　その裏返ったような返事は。
心なしか、普段の強かな表情に微かな揺れが生じたような気がするが。

「……」
「弟よ。なんだ、その微妙な視線は？　まさか、疑っているのか？　この私を」
「……（コクリ）」
「嘘だろ？　血の繋がった姉貴だぞ？　唯一の姉弟なのだぞ？　それを、そんな簡単に疑うっていうのか！？」
「……（コクリ）」
「ウ、ウソダドンドコドーン！！」

これはまたコアなネタを放り込んできたな、我が姉よ。
よかろう。
その心意気に免じて、今日のところは見逃してやろう。

「分かった、分かった。信じるよ姉ちゃん。しかし、しかしだな、もう僕の親交関係にはなるだけ首突っ込まないでくれ」
「え？　交遊関係じゃなく？」
「う、うるさい。揚げ足とるな」
「てか、首突っ込むな、って言われてもなー。私全然首突っ込んでないけど？」

勝手にビビってたのあんたじゃん、と泡の顔面のままで姉は吐き捨てる。

「……あ、後さ、絶対筆ヶ崎（ふでがさき）さんには会うなよな」

とことん釘を刺しておかないとおかなければ、何をしでかすか分からん姉ちゃんだ。
いくら弟でも、姉の責任は負えないときだってある。

「へ～イ」

姉ちゃんは渋々といった感じで、軽く敬礼のポーズを取った。
やけに気のない返事だ。

「僕、ちゃんと言ったからな」

僕はそう残してキッチンを後にした。
とにかく今日は早くベッドに就きたかった。

「はあ……。筆ヶ崎さん……」

布団を被りつつ、僕は数時間前に筆ヶ崎（ふでがさき）さんと交わした約束と、彼女のやわらかい身体の感触を思い出していた。
我ながらアンニュイな溜息。
本当、僕というのは調子のいいやつだ。

「あ、っと……。筆ヶ崎さん、おはよう」

たまたま、本当にたまたま朝の通学路で筆ヶ崎さんに遭遇した。
一日振りの再会だ。
筆ヶ崎さんと過ごした至福の土曜日。
昨日一日延々と脳内でリピートした。
また筆ヶ崎さんに会いたい――
僕の脳ミソは鳥並みか、と自分で思うほど彼女のことばかりを考えていた。
てか、何で僕は筆ヶ崎さんにメルアドを訊かなかったのだろう。
訊けなかった、のではなく。訊かなかった――

正確に言うと、あまりにも興奮しすぎて訊くことを忘れていたのだけれど。
ともかく、僕は愚か者である。
しかし、この月曜の朝早々に筆ヶ崎さんに出会えたのはこのうえなくラッキーでハッピーなことなのだ。
僕はしゃにむに、筆ヶ崎さんに明るい声をかけた。

「あれ……？　おーい！」

横断歩道の向こうで筆ヶ崎さんは呼び声に気付いたのか、辺りに視線を回している。

「こっちこっちー」

僕は筆ヶ崎さんの方に手を振りながら走った。

「津久江君……？」
「なんで疑問形！？」

筆ヶ崎さんは能面のように表情を変えないまま、首を傾げている。
嫌な冗談だな……。

「あのさ、土曜日……悪かったよ。あんなところに誘って」
「別に、気にしていないわ」
「筆ヶ崎さん……」
「約束……ちゃんと守ってくれるならね」
「え。筆ヶ崎さんはリアルな心霊スポット及び現象……ウッ！」

言い終える前に、筆ヶ崎さんの裏拳が僕の鳩尾を襲った。
思わず僕はよろめいて、呻いた。

痛い……！
てか、呼吸が……死ぬっ。
「私の前でも禁句」
「……ごふぇ、ごふぇっ。うっ、ご、ごめん」
「分かればよろしい」
僕が深く首を縦に振るのを確認すると、筆ヶ崎さんはすたすたと早歩きで進んでいった。
「ちょ、ちょっと待って！　今日、色々考えないといけないよね？　お化け屋敷――どんな方向性でいくのかさ」
筆ヶ崎さんを追いかけながら、僕は提案する。
「昼休み？　放課後？　……いつ話し合う？」
「そうね」
「うわっ、と」
筆ヶ崎さんが急に止まったものだから、僕は危うくぶつかりそうになった。
筆ヶ崎さんの背中に。
……惜しかったよ。
「早速考えなければならないわね」
「うん」
「あ、でも安心して。津久江君には苦労させないから。もうだいたいの構想は出来ているの。……あ、訂正。津久江君の出る幕はない、だったわ。ともかく、大船に乗ったつもりで任せておいて。肩書だけの実行委員でも、誰も咎めたりしないと思うし」

「ちょっと待って！」

真顔で恐ろしいことを言う筆ヶ崎さん。

そんな殺生な……。

僕のメンツが一ミリたりとも立たないじゃないか……！

「僕も協力させてくれよ。てか、二人で協力するものだろう？　本来は」

「じゃあ、私が何々をどこそこで買ってこいっていったら、二つ返事で買ってきてくれる？」

「もちろん」

「人魂になれっていったら、笑顔で人魂になってくれる？」

「もちろん！」

って、ええ！？

魂をこの身体から離脱させろと？

えっと……。僕にそんな上等芸ができるかな……。

「で、出来るだけ頑張ってみるよ」

「じゃあ、よろしく」

どうやら僕は関門を突破したらしい。

なによりだ。

「よし。そうと決まればぼちぼちと……あれ？　てかさ、クラスの皆に提案しなきゃいけなくない？」

「え？　別にそんなのいいじゃない。水面下で計画をおして行って、集団作業の段階になったとき声かければ」

「それは、ダメだって。まずは皆から賛成貰わないと。大ブーイング食らうよ？」

「うーん」
「多分、皆お化け屋敷に賛成してくれると思うから、とりあえず表立たそう」
「……そうね。分かった。でもそれは津久江君に任せるから」
「うん。僕がやるよ」
ということで僕は皆に、出し物はお化け屋敷でいくぞ、という旨を伝える役目を担うことになった。

「お化け屋敷、やりたいと思います」
やはり、と言うべきか僕がそう発表すると、クラスは騒然となった。
「面白そう」とか「楽しそう」とか、賛同の声は本当に極少数で、大半は「面倒くさい」とか「意味分かんない」とか「くだらない」だとかの批判である。
「メイド喫茶がいい」とか「クレープ、クレープ」とかの異端者もぼちぼちと。
メイド喫茶とか、一体どんなラブコメ物語の話数稼ぎのイベントなんだよ。ここはごく普通の、本当の意味で普通の一高校だぞ。アホか。
後、クレープとか、そんなちまちましたもの作ってられるか。僕の頭が爆発してしまうわ。
僕にはお化け屋敷という意見を曲げる気など一切ないので、
「大まかな方向性とか、出展場所は実行委員で決めたいと思うので、皆さんはちょっと待っててください。随時報告しますので。あ、取

り入れたいこととか、お化け屋敷に関しては譲れないポリシーとかがある、なんて人がいたならば、いつでも意見をお寄せください」

とだけ残し、すぐに掃けた。

放課後の貴重な時間だったため、皆の都合を考慮してのことだ。長々と不満を漏らすだけの時間ほど、無駄な時間はないからな。

まあ、文化祭一週間前だとかになれば各々の都合など考慮している暇はなくなるのだろうけど。

「津久江君」

「うん。取りあえず、皆が帰るまで待とうか」

廊下でつっ立っていると、教室から出てきた筆ヶ崎さんが歩み寄ってきた。

「……待たなくていいわ。今日は私の家で話しましょう」

「え？」

「資料がたくさんあるから、都合がいいのよ」

「え、でも……いいの？」

「何が、いいの？　よ。変な気起さないでよね」

ぶっ、ぶへらほやひぃえぇひゃぁああっ！！

僕の中で何かが爆発した。

「学校なんかでだらだらと意味もない談義を交わすより、よっぽど効率が良いの」

建設的なの、と語尾を窄める筆ヶ崎さん。

「ぼ、僕……。は、はい。お邪魔させてもらいます」

まさか。
まさか、こんな……。
超最高っ！
僕は高まる胸と踊る心臓を心配しつつ、玄関へと向かう筆ヶ崎さんの後につい歩く。
ああ。なんて頼もしい背中なのだろう。

「はい。地図」
「お、ありがとう。って、何？　どこの地図？」
靴箱から靴を取り出したところで、筆ヶ崎さんが紙切れを渡してきた。

「私の家の」
「え……どういうこと？」
「私の後はついて来ないで、自力でいらっしゃい。それ、遠回りルートだから」

な、何ですとっ！？
つまりは二人並んで帰りたくない、ってことなのか？

「そ、そんな……」
「じゃ、そういうことだから」
「待って、筆ヶ崎さ……ん」

何故か後を追えなかった。
身体に動けと命令を出しても、足はうんともすんとも返答してくれなかったのだ。
硬直する僕を尻目に、筆ヶ崎さんはそそくさと学校を後にしたの

だった。

「ねぇ、君？　もしかして、これから向かうのは筆ヶ崎瑞香ちゃんのお家かな？」

不意に後ろから声がした。

「えっと……」

振り返るとそこには三年生らしい女子が立っていた。

左胸に付けた名札がオレンジ色だったから、僕はその女子を三年生だと判断した。

ちなみに僕ら二年の色は青だ。

名札には「奥条」とある。おくじょう、だろうか。

「どなたですか？」

「あ、ごめんごめん初対面だったよね。えっと、あたしは三年の奥条教子。瑞香ちゃんとは昔からのお友達なんだよ」

やや茶色味がかったショートヘアと、短めに履いたスカートから伸びるスラリとした足が印象的な彼女は、爽やかな笑みを浮かべてそう名乗った。

「今、傍で見てたんだ。というか、聞いてたんだ。聞き耳立てて」

盗み聞きゴメン、と胸のあたりで手を合わせる奥条……先輩。

「あ、いえ。別に構いませんよ。大した会話していなかったし」

てか、むしろ恥ずかしさを通り越して無様だ。
遠回りルートが載せられた地図を渡された場面だよ。見苦しいじゃないか。

「そっか。うん、まあともかくあれだよ。良かったら、あたしが連れてってあげようか？」
「え？」
「あたし瑞香ちゃん家のすぐ上に住んでるんだよ。だから、余裕で連れてってあげるよ？」

ということは、筆ヶ崎さんの自宅はマンションとか、アパートだとかだろうか。
うん？
待てよ、筆ヶ崎さんからもらった地図は道なりしか記されてないぞ。部屋の番号なんて一切書かれていない……。
それを踏まえれば、とてもありがたい奥条先輩の申し出だった。
確実に筆ヶ崎さんの家に行ける。
そして、簡単に筆ヶ崎さんに追いつくかもしれないし。更には、筆ヶ崎さんの友達が一緒とあらば、雰囲気だって素晴らしいものになるかも……。

「ぜ、ぜひお願いします」
僕は二つ返事で、奥条先輩からの申し出を受けることにした。

「うわぁ、すごい遠回りだねこのルート」

奥条先輩は手渡した例の地図に視線を落とすと、苦笑いで目を細めた。

「あはは、十分くらい短縮出来ちゃうよ」

「マジっすか……？」

「うん。マジ、マジ」

朗らかそうな人だ。

筆ヶ崎さんにこんな良友がいたなんて。まったく知らなかった。

「いやぁ～。でも、本当に驚いたな～。瑞香ちゃんが男の友達を家に招くなんて」

僕を先導しながら、奥条先輩はそう笑う。

「あたしの記憶がただしければ、小学校以来だな～。新鮮だ、新鮮。……何かさ、文化祭の実行委員をやる話はこないだ聞いたんだけどね。まさか、相方にこんな好男子がいたなんて。予想外だったよ」

「あはは」

好男子、ねぇ。

もう既に僕は奥条先輩からかなりの評価を得ているらしい。

「もしかして、アレかい？　コレなのかい」

そう言って、奥条先輩は僕の顔の前で小指を立てた。

「ま、ま、まさか！　そんな感じじゃないですよ！」

むしろ、出来ればそんな感じの関係を望みたいところなのだけど。

「ふぅん」

「本当ですからね？」

「まあ、深くは聞かないことにしておこう」

僕のたじろぐ姿に、破顔する奥条先輩。

「と、取りあえず、先を急ぎましょうよ」

僕は奥条先輩を急かした。

「あっはー。元気なやつだな、君は」

先走る僕の後ろで「おーい。そっちじゃないぞー」と奥条先輩は朗らかに笑った。

奥条先輩。

第一印象はスマイル・ガール。元気で朗らかな人だ。

ああ。筆ヶ崎さんもこれくらい笑顔を見せてくれたらいいのに。

8話「遠回りルート」（後書き）

どうでしたでしょうか。

ぜひ、この作品に関わっている方の作品も、

ご覧になってみてください。

9話「筆ヶ崎さんの部屋で」　（挿絵付）（前書き）

この作品は、以下の４名の作者によるリレー小説です。

水馬、ｙａｓｕ１９８０、チョコメロン、姫井星光

９話の執筆者：水馬

（敬称略）

9話「筆ヶ崎さんの部屋で」　（挿絵付）

僕は、奥条(おくじょう)先輩に案内され、『メゾン・ド・ペンシル』というマンションにやってきた。
外観はとてもお洒落で、階数の異なる複数棟が入居者専用の公園を囲むようにして立ち並んでいる。
こういうのは、コートハウスというのだろうか。
パッと見、結構高級そうに見える。

「さ、こっちだよ」

奥条先輩に案内されるがまま、僕は自動ドアを通り、エントランスへ。
エントランス中央には小さめの噴水があり、観葉植物が植わっている。
その奥に、二基のエレベーター。
僕たちはその左のエレベーターに乗り込むと、先輩は三階のボタンを押した。

「そっかぁ、年頃の男子が女子の部屋に招かれて……ふふふっ」
「先輩……何、想像しているんですか……」

今の奥条先輩のスマイルは、朗(ほが)らかで元気な“正”の笑顔ではなく、“負”の笑顔な気がする。

チーンッ！と、目的階に到着したことを知らせる高い音が、エレベーターという密室空間内に響いた。

「そういえば、津久江くんのクラスは、文化祭に何するの？」

「あ、お化け屋敷です」
「ふぅ〜ん、なるほどねぇ。やっぱり、瑞香ちゃんらしい催し物ね」
うんうん、と頷きながら、通路を進む先輩。
僕は、奥条先輩の後ろをしっかりとついていく。
「やっぱり、先輩は知っているんですか？　筆ヶ崎さんが怖い物好きとか……“アレ”のこと…とか」
「勿論。それぐらい知ってるよ、昔からの友達だからね」
“昔からの友達”とは、どれくらいの時からの友達なんだろう。
やはり、そこは、幼馴染の関係なのかな。
「着いたよ、ここが瑞香ちゃんの家。筆ヶ崎家ね」
ドアの覗き穴の上に『５０１』と書かれた金属プレート、壁にはカメラ付きのインターホンがついており、『ＦＵＤＥＧＡＳＡＫＩ』というローマ字の表札。
「どうぞ、津久江くん」
「あ、僕が押すんですね……」
そりゃ、そうだよね。
奥条先輩はあくまで、案内してくれただけなんだ。
筆ヶ崎さんの家に用事があるのは僕だ。
「すぅ〜……はぁ〜……」
一度、大きく深呼吸をし、呼吸を整える。

あの筆ヶ崎さんのお宅にお邪魔するんだ。
今、とてつもなく緊張している。
震える指で、インターホンのボタンを押した。

ピンポーン！

ドアの奥から、チャイムの鳴る音が微かに聞こえた。
すると――――。

『はい、筆ヶ崎です』
「ぼ、僕、津久江という者ですが――――」
『あ、津久江くん。随分、来るのが早いわね。裏技でも使った？』

……確かに、先輩に案内してもらったのは裏技かもしれない。
どうしよう、筆ヶ崎さん、怒るだろうか。
『自力でいらっしゃい』と言っていたし、これは明らかに僕だけの力で辿り着いてはいないよなぁ。

ガチャ……。
ドアがゆっくりと開き、私服姿の筆ヶ崎さんが現れた。
黒のタックトップに、体育で使うハーフパンツを穿いている。
セミロングの黒髪は、紐かゴムで束ねているようで、項（うなじ）がやや見えたり、見えなかったり。

「やっほぉ、瑞香ちゃん！」

僕の後ろから元気良く飛び出した奥条先輩。
あぁ、やっぱり、この人は隠れるようなことはしないみたいだ。
もう、ここは正直に打ち明けよう……先輩に案内してもらったことを。

「教子（きょうこ）……案内したのね？」
「だって、部屋番号教えず、それに、こんな遠回りなルートの地図まで渡して。津久江くん、来れないでしょ？」
「教子って、随分と親切なのね」
「そういう瑞香ちゃんは、イジワルなところ、あるよねぇ」

うわ、何だこれ。
二人のオーラが怖い。
決して、睨みあっているというわけではないんだけど、二人の目がマジだ。
でも、喧嘩するほど仲がいいのかもしれない。
これがそもそも喧嘩なのか分からないけどね。

「ま、愛情表現の裏返しってことよね、イジワルをするのはさ」

ポンッ、と奥条先輩は僕の肩を叩き、すたすたとエレベーターへと向かって行く。
が、途中で振り返り、

「そういうわけだから、二人とも、仲良くね～」

そう言って、奥条先輩は小さく手を振った後、エレベーターに乗り、上階へと上がっていった。
その間、終始笑顔。
さすが、スマイル・ガール。

「津久江くん、突っ立ってないで、入りなさいよ」
「あ、うん。お邪魔します」

僕はドアを閉め、玄関に入る。
玄関から真っ直ぐ廊下が伸びており、その途中に、いくつか扉がある。
筆ヶ崎さんはその扉のうち、左側の玄関に一番近い扉を開けた。
「こっちよ、津久江くん」
僕は、脱いだ靴をきちんと揃え、筆ヶ崎さんのもとへ行く。
そして、部屋へ入ると――――。
「自由に座っていいわよ」
「う、うん」
こ、こ、ここって、筆ヶ崎さんの部屋!?
ベージュ色のカーテン、薄い水色のカーペット。
整理整頓された勉強机や本棚。
ベッドにはいくつかぬいぐるみが置いてあり、とても女の子らしい部屋だ。
「座らないの？」
筆ヶ崎さんは、部屋の中央に置かれた小さめのテーブルの近くに座りながら、こちらを見ている……。
その視線に耐えきれず、僕は何を思ったか、筆ヶ崎さんがいつも寝ているベッドに思わず座ってしまった。
「さて、始めるわよ。まず、これを見て」
筆ヶ崎さんはテーブルの上に、数枚の紙を置いた。
僕はそれを見るため、ベッドから立ち上がり、普通に床に座る。

出来ることなら、もう少し座っていても良かったのかもしれないが、それはさすがに僕が耐えきれなくなりそうだったので、諦めた。

「ん、『お化け屋敷について』……えぇーと、これって、筆ヶ崎さんが作ったの？」

「うん、そうよ。土日にパソコンを使って書いてみたわ。まぁ、読んでみてよ」

読み進めていくと、結構いろいろなことが書かれていた。

お化け屋敷の方向性・スタイル。

驚かす仕掛けや要素。

およそ必要になるだろう材料と、それにかかる費用の目安。

それに、一部の生徒の役割分担も決まっていた。

「す、すごい……こんな短期間でここまで出来るなんて……」

「ま、私のホラーへの愛情がこれで分かったでしょ？」

「さ、さすがだよ、筆ヶ崎さん！」

リアルホラーが苦手、ということは口には出さなかったが、筆ヶ崎さんの文化祭へのやる気が、この数枚の紙から十分な程、伝わってくる。

そんな筆ヶ崎さんに比べて、僕は、一体何が出来ているんだろう。

実行委員が僕と筆ヶ崎さんに決まった金曜から振り返っても、僕が行なった仕事は、生徒会提出用の書類を書くことと、お化け屋敷で実験体になったことぐらいじゃないか？

ここはもっと、筆ヶ崎さんの力となれるように頑張らなければならないと思う。

そうすれば、必然的に僕への好感度も上がるんじゃないだろうか。

「ふ、筆ヶ崎さん！」

「ん、なに？」
「方向性のところだけど、和風と洋風の融合したホラーなんてどうかな？」
「あ、それはいいわね、斬新なアイデアかも」
笑顔を浮かべる筆ヶ崎さん。
お、これは好感触？
もっと、僕自身の考えているアイデアも提案していこう。

「うへぇ……終わったぁ……」
「お疲れ様、津久江くん」
筆ヶ崎さんが用意した、和モノホラー、洋モノホラーに関する膨大な資料を読み解き、それをアイデアとして取り入れ、時には変換して組み込む作業は、とても骨が折れた。
でも、その分、今感じている達成感はとても心地よい。
しかし、まだ課題はたくさん残っている。
クラスメイトの役割分担や、材料費、お化け役の練習などなどだ。
だから、今日だけじゃさすがに、全ては決まらないし、今後の話し合いもこまめにしていく必要がある。
「それじゃ、私、飲み物をとってくるわ」
「あ、ありがとう」
部屋を出ていく筆ヶ崎さん。
僕はベッドに寄りかかり、身体の力を抜く。

すると、ベッドの方から漂ってくる良い香り。

「……っ！」

ゴクリ。

思わず、唾液を呑み込んでしまった。

この良い香りは、間違いなく筆ヶ崎さんの……。

ガチャ。

「牛乳でいい？」

「う、うん！」

僕は慌てて態勢を元に戻し、テーブルの上を片付けた。

筆ヶ崎さんは、牛乳の入ったコップをテーブルの上に並べて置いた。

「結構捗(はかど)ったわね」

「そうだね、意味もない談義はなかったし」

「この調子なら、早めに準備に取り掛かれるかもしれないわ」

筆ヶ崎さんは、タックトップの首元を指先で掴み、ぱたぱたと前後に動かし、内部の熱い空気を外に排出させていた。

それを見て、ドキッとしない男がどこにいようか。

異性の、それもタンクトップという両腕が完全に露出している服で、そんなパタパタされたら……。

いつしか、筆ヶ崎さんの胸部や、腋(わき)に僕の目線はいってしまっている。

「問題は、やる気ない人に、どうやってやる気を出させるかよねぇ」

「そ、そ、そうだね」

僕の頭は、ほぼオーバーヒートに近い状態になっていた。
そこで、急いで牛乳を飲む。
冷却……冷却……。
コップを口元から離すと――――。

「ぷふっ……くくくっ……ふふっ……！」

何やら、筆ヶ崎さんの様子がおかしい。
どうしたのだろうか？
何だか、笑いを堪えているような……。

「え、筆ヶ崎さん、どうしたの？」
「くくっ……あっはっははは！！」

大声で笑い始めた筆ヶ崎さん。
僕を見て、涙目で笑い転げている。
どうやら、僕に笑う要素があるらしい。
でも、その要素が何なのだろう……。

「えっと……」
「く、口……あっはっはははは！！」

筆ヶ崎さんはお腹を抑えながら立ち上がり、勉強机の上にあった手鏡を僕に差し出してきた。
僕は、それを受け取って、顔を見てみると――――。

「あ……」
「くくっ……白髭、あははっはははは！」

僕の口元には、牛乳が付いており、それが白い髭のようになっていた。
なるほど。
筆ヶ崎さんは、白い髭のついた僕を見て、ここまで大笑いしていたのか。
ようやく解決したよ、そういうことだったのか――――。

「って、いくら何でも、笑い過ぎでしょ、筆ヶ崎さん！」
「だ、だって、面白いんだもん、あっはっははははは～！！」

筆ヶ崎さんって、笑い上戸なのか？
それにしても、筆ヶ崎さんがここまで笑っているのは初めて見た。
きっと、素で大笑いしているのだろう。
あまり絡みのなかった僕の前で、ここまで大笑いするというのは、もしかすると、少し距離が縮まっているのかもしれない。
これは仲が深まった証拠と捉えてもいいだろう。

「はぁ……はぁ……あぁ、お腹痛い……」
「筆ヶ崎さん、笑い過ぎ……」
「ご、ごめん、津久江くん。だって、津久江くんの顔が面白くて…くくっ……」
「あ～、思い出し笑いやめてよ～」

筆ヶ崎さんから、家に来ないかと誘われた時は、本当に緊張して、脈打つスピードがかなり速くなっていた。
けれど、二人きりでの話し合いを進めるうちに、緊張は解け、いい感じに作業を進めることが出来た。
それに、筆ヶ崎さんの新たな一面を見ることが出来たし、親密度も高まった気がする。

「あ、もう六時」
「時間経つの早いわね」
「そういえば、筆ヶ崎さん。家族の方は？」
「両親はいつも深夜帰宅。兄がいるけど、今日はバイトね」

なるほど、両親共働きというやつか。
我が家の、フランスへ逃げた父さんと、その父さんを追う母さんとは、大違いだ。

「さてと、僕、そろそろお暇(いとま)しようかな」
「出来れば、夕飯ごちそうしてあげたかったけど、もうすぐお兄ちゃん帰って来ちゃうし」

え、筆ヶ崎さんの手料理！？
ぜ、ぜひとも食べたい！
でも、我が家には、あまりの美味しさに涙腺崩壊する料理を作る姉ちゃんがいるからな。
また、腹の中の資源が枯渇したとか言って、さっさと夕飯作れみたいに催促してくるのだろうから、ここは帰宅せざる得ない。

「それじゃ、また明日」
「うん、夜道には気をつけて、津久江くん」

僕は玄関で、筆ヶ崎さんとさよならの挨拶を交わし、筆ヶ崎家を後にした。
自宅に着くまで、にやにやとしながら帰ったのは言うまでもない。

>	>
i	i
5	5
9	9
0	0
3	1
—	—
9	9
6	6
3	3
<	<

9話「筆ヶ崎さんの部屋で」（挿絵付）（後書き）

どうでしたでしょうか。

ぜひ、この作品に関わっている方の作品も、

ご覧になってみてください。

１０話「悲しい推測」（前書き）

この作品は、以下の４名の作者によるリレー小説です。

水馬、ｙａｓｕ１９８０、チョコメロン、姫井星光

１０話の執筆者：ｙａｓｕ１９８０

（敬称略）

１０話「悲しい推測」

自宅への帰り道はなにぶん知らない道だったので、けっこう迷ってしまった。残暑厳しいなか、家に着いたころにはかなり汗ばんでしまい、そそくさと湯船につかることにしよう。
ちょっと前、我が家もオール電化にしたので、自動給湯されたお湯はとても気持ちがよかった。おもわず“あーぁ”と、大きく伸びをした。
ぼーっと考える。
最近、僕の中の筆ヶ崎さん像は変わってきた。前は、『優しくて、包容力があって、明るく元気』な子だと、ただの思い込みをしていたのだけれど、今は、筆ヶ崎さんという女の子が、僕の想像力では形容しきれないほど色々な要素を持っているということを実感できた。
リアル筆ヶ崎さんは想像と同じなところもあれば、違うところもあった。本当にほんとうの彼女のことが好きなのだろうか？でも、やっぱり好きに決まっている。そうじゃなきゃ、部屋に招待されてあんなにもテンションが上がるわけない。ひとつ確信できることは、恋するのに理屈なんてないということだ。もっと彼女のことが知りたいと漠然と思った。

風呂から上がると、ちょうど姉ちゃんが帰ってきたところだった。手にはコンビニ弁当をぶら下げている。すると、大きな声で、
「コラお前！！風呂に入ったな！私が弁当を買ってきてやったというのに！」
「そうだけど」
「家訓その３８、私より先に風呂に入ってはならない！」
「そんなのあったのか？」
「その３９、私より後に入ってもいけない！」

「それじゃ入れないじゃないかよ！」
「家訓その１２９、私に口答えしたら校庭１０００周！！」
「校庭ってどこの？…それに１０００周って殺す気かよ！！」
「さあ、走ってこい。それが終わるころにはお前はオリンピックにも出られる肺活量を授かるだろう！！」
ああ、つきあってられない。早く部屋に行こう。
「逃げるか！！おぬしそれでも侍か？」
「ただの高校生です」
「あっ！また口答えしたな、合計２０００周！！」

姉ちゃんがごちゃごちゃ騒いでいるが無視だ。部屋に入ると、耳栓代わりにｉ　ｐｏｄを聞いた。

それにしても、今日はいい一日だったなあ。なにせ筆ヶ崎さんの部屋に行ったんだ。でもなぜだろう？確かに僕は草食系男子というやつなのだろうけれども、両親が共働きで不在なのに、部屋に上げるなんて？なにかあるのかなあ？何か……。

筆ヶ崎さんは『学校なんかでだらだらと意味もない談義を交わすより、よっぽど効率が良いの』って言ってたけれど、“意味もない談義”なんて、筆ヶ崎さんはしないだろうに。
『資料がたくさんあるから、都合がいいのよ』とも言っていたなあ。でもあのノートパソコンを学校に持ってくれば、だいたい事足りただろう。
つまり、学校でもやれたわけだ。というか、学校でやらないことのほうがどう考えても不自然だ。学校でやらなかった訳とは何だろうか？それに、奥条さんと偶然出会わせなければ、筆ヶ崎さんのマンションにたどり着けなかったろう…とすると、はなから僕を家に呼ぶつもりはなかったんじゃないかな？お化け屋敷の草案はすでに完成していたから、実際、僕はいてもいなくても同じだったんじゃな

いだろうか？そんな推測をすると、“偶然たどりついて”はしゃいでいた自分が悲しく思える。
僕は鼻の頭をポリポリ掻いた。すると、ひとつの考えが浮かんできた。
筆ヶ崎さんは『放課後の学校』が怖かったんじゃないか？いや、いくらなんでも小学生じゃないんだし…。でも、学校って心霊スポットといえば心霊スポットだよなあ。どこの学校にも七不思議なんてのがあるしなあ。

と、ドーンという音に驚いた。お化け？
「オイ！！さっきから呼んでるのに無視してくれるとはまったくもってオリンピック日本代表失格だ！！」
姉ちゃんがドアを勝手に開けて、仁王立ちしていた。
「音楽聴いてたから聞こえなかった」
「ほれ、コンビニ弁当だ。代金５００万円を明日までに用意しとくのだぞ」
「５００万円か高いなあ、明日までに払えるかなあ…って５００円て書いてあるだろう！」
「おお、ノリツッコミを習得していたとは、さすが我が弟。褒めてつかわす、その弁当はただでくれてやる。喜べ」そう言うと、姉ちゃんはリビングのほうに戻って行った。
「弁当はありがたいけど…はあ、ホントつかれる姉ちゃんだ」
「なんか言ったか―！！」リビングで姉ちゃんが吠えた――地獄耳。

弁当を食べながら、中断された思考をもどす。
お化け屋敷をやることについても『別にそんなのいいじゃない。水面下で計画をおして行って、集団作業の段階になったとき声かければ』という発言があったなあ。それは“放課後たった二人だけで寂しく作業をするつもりはない”ということを意味するんじゃないか？
どうあれ『放課後の学校』が怖いのかどうかの真相は明日以降、筆

ヶ崎さんが次の打ち合わせをどこでやるというかによって決まるのかもしれない。

弁当で満腹感を得たことと、普段使わない頭を使ったことで、かなりの睡魔がやってきた。

１０話「悲しい推測」（後書き）

どうでしたでしょうか。

ぜひ、この作品に関わっている方の作品も、

ご覧になってみてください。

１１話「親友だけど、恋の敵！？」（前書き）

この作品は、以下の４名の作者によるリレー小説です。

水馬、ｙａｓｕ１９８０、チョコメロン、姫井星光

１１話の執筆者：チョコメロン

（敬称略）

11話「親友だけど、恋の敵！？」

「ヒツ。起きて、もう朝だよ」
僕を呼び起こす声がする、そして僕をヒツと呼ぶのは姉ちゃんだけだ
「ん？　あぁでもこんな早くに起きなくても…まだ六時だし」
「早く起きてよぉ」
なんだ、今日の姉ちゃんはいつもと雰囲気が違うというかむしろ変だ、違和感を覚えると言ってもいい。
「分かったから。そんなに急かすなって」
布団から顔を起こし、目をこする。空には光り輝く太陽が。目の前には白い砂浜。
「砂浜！？」
「……ツックン」
「ツックン？」
あまり聞きなれない呼び方をするのは、僕の愛しの彼女筆ヶ崎さんの姿。しかもビキニ姿である。
「ふっ筆ヶ崎さん！？」
「私ね、別に文化祭とか、お化け屋敷とかどうでもよくなってきちゃった♪　今はただツックンと一緒に居たいの」
顔を赤く染めながら、こちらに一歩近づいてくる。
なんだこのシュチュエーション。砂浜には僕の寝ているベットがあって、しかもどっかの無人島っぽい雰囲気を醸し出す背景の山、俺を起こしてくれた姉ちゃんはどこかに消えて、今ここに居るのは高校生の男女一人ずつ。しかも僕もなぜか水着を着用してる。
「ちょっと小さかったかしら」
胸のあたりの大きさを気にしながら、筆ヶ崎さんはさらに
「でも、ツックンなら……見られても…いいよ」
「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ；@：「」！？」
爆弾発言頂きました。え？　なにこれもう完全に両思いでしょこれ。

もう好きって言ってるようなもんじゃないか。僕も筆ヶ崎さんも実は結構なシャイで、自分から言い出せなかっただけなのか。
「ツックン。海で遊ぼうよ、ほら早く」
「まっ、待ってよ、筆ヶ崎さん」
「もう筆ヶ崎なんて名字で言わないで……し…下の名前で…呼んで？」
筆ヶ崎さんを下の名前で呼ぶなんて、初めてじゃないか？
「み・・瑞香・・さん」
「呼び捨てで言ってよ」
「み・・瑞香」
僕が言葉を発した後、ゆっくりとだが視界が薄らいできた。一ミリの曇りもないその眩しい笑顔も、どんどん薄（うっす）らと、まるで幻想のように。
「…お…ろ」
・・・・・・・・・・・
・・・・・・・
・・
「何回お前を呼んだら目を覚ますんじゃゃー。とっとと起きろ＊＊＊＊」
(女性として有るまじき発言を行ったため、文字化することができませんでしたｂｙ作者)
「うげっアバラが」
木刀で僕の呼吸器官を叩く姉。何という起こし方、寝こみを襲うとはこのことか。
「せっかく姉が萌え萌えボイスで起こしてやろうとしたのに、シカトとは何ということだ。これだから軍曹はいつまでたっても軍曹なんだ」
しばらく呼吸困難で悶えてると、姉ちゃんはさらに僕の上に乗ってサソリ固めの体勢に入る。

「何とか言ったらどうなんだ、そんなモヤシくんでは第三次うんとか戦争で生き残れんぞ日月軍曹」
「いつ…戦争がお、起こ、こるんだ」
「ここは日本だ日本語で話さんかいいいいい」
空気が吸えなくて、言葉が発せないのにその発言は無理難題というものだ。しかもサソリ固めが結構効いてきている。痛い痛い痛い！いつも思う、姉ちゃんはなぜいつもテンションがこんなにハイなのか。朝も夜も、昼は分からないけど、おそらく昼はこれ以上にハイテンションなんだろう。
「お前が起きて飯を作らないから、私が直々に来てやったっていうのになんて態度だ」
「いだだだだ、ギブギブギブ」
「発音がなってないぞ、日月軍曹ｇｉｖｅ　ｕｐ　プリーズコールミー　ｇｉｖｅ　ｕｐ」
「なんでそこだけ日本語なんだよ」
「まぁそんだけ元気があるなら、申し分ないな。お前の手料理を食べれないのはとても残念だが、私は大学に行かなければならない。次私の朝ごはんがないという禁忌を犯したならば、これをネットの海に流しまくる予定だから覚悟しとけ」
そういってどこから持ち出したか分からない、ビデオカメラを投げてくる。再生ボタンを押してみろということなのだろう。ためしに再生ボタンを押してみる
＞＞再生＞＞
僕の部屋が映ってる。おそらくこれを撮影してるのは姉ちゃん何だろう、にしても何という腕前手ぶれをしていない。最近のカメラは手ぶれを補正しているからなのだろうか、無茶苦茶すごい。
「おっと動きだした」
映像は、僕の寝顔を映している。ここまでは至って普通のオヤスミタイム中だ。
「ヒッ。起きて、もう朝だよ」

ん？　なんだもう一度

<<巻き戻し<<

>>再生>>

「ヒッ。起きて、もう朝だよ」

！？

なん・・だ・・と。何だ今の発言は明らかに姉の声だった。声変えてたけど。そして小さく「フッ」っと呟く声が聞こえた。策略か！

　姉の策略に引っ掛かったのか！

さらに再生は続く画面に映っている僕は、ムスゥとして布団の中に潜る。

「早く起きてよぉ」

ちょっちょっちょっと待て、姉ちゃん何やってんの！？

この先ってもしかして・・・。

「筆ヶ崎さんグフフフ…」

うあぁ、気持ち悪。自分気持ち悪。

自分の寝言とその顔を見て、真っ先に口にしてしまった。思うだけじゃなくて本能的に言葉を発してしまった。素直な気持ちの表れだろう。さすがにこんなのをネットの海にポイされたら大変だ、姉ちゃんならやりかねないのと同時に今度こそしっかりと起きようと思ったのはいうまでもない。

＝＝停止＝＝

――――削除実行――

さて、心と体に多少の傷を負いながらも僕は学校に行く準備を始める。昨日はどすこい睡魔に襲われて、全く何も手をつけてないとい

う感じだ。
「早く準備しないと、遅れるぞ」
鞄の中に教科書を詰め込み、台所に向かう。
食事もコンビニで済ませるようにして、家を出る。
「いってきまーす」
誰もいない家に向かっていうのはちょっと寂しいけど、これが我が家のルール、家訓である。
「父さん達はいつになったら帰ってくるんだろうか」
文化祭までにはぜひ帰ってきてほしいものだけど、場所が外国だからね。母さん今回は本気っぽかったし、こんな親を持つといろいろ考えるというものだ。
いつもの道を猛ダッシュで走っていく、風が気持ちいだとか、朝の日差しが眩しいとかそんなの一切思わなかった。ただ一刻も早く学校に行かなければ遅刻してしまう。
「おっ日月じゃ」
「おっすー」
「学校急いでいるっぽいな、なんなら俺の頼みを聞くっていう条件付きだったら、後ろ乗せてやってもいいぜ」
彼の名前は　中庭（なかにわ）　透（とおる）
小学生からの同級生であり、昔いろいろと馬鹿をやった親友でもある。おそらく今通っている高校の中で、僕の一番の理解者でもあり僕も彼の一番の理解者だと思っている。
成績は僕より多少劣っているけど、運動の才能がかなり長けている。おそらく三年生も歯が立たないだろう。長距離から短距離、幅跳びから高跳び・ボール投げまでほとんどのスポーツで、トップクラスの人間だ。性格が大雑把で自由、バカという言葉では一括りにできない人物である。
「頼んだ」

「了解した」
自転車の後ろに乗せてもらい、坂道を下る。ここで初めて風が気持ちいいだの、太陽がまぶしいだの思った。
「いやっほー。俺の自転車が風を切るゼー」
何というスピード、軽くそこの速度標識の制限を超えているだろう。
「おいこれ曲がれるのか、そこのカーブ」
「何とかなるでしょ」
百メートルほど先には、カーブがある。漫画でよくある目の前が滝だ！　的な感じに今ある。
「日月」
「分かってる」

「全力で飛びおりるぞ」

一、二の、三！
勢いよく自転車から飛び降りる、無人の自転車はガードレールにぶつかりそのまま道の下に飛んでいく。一方僕達は左右反対に飛びおりてゴロゴロと転がる。
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・
・・
「怪我ないか日月」
「全身がきしむようだ、透」
しばらく地面に倒れていると上から声が降ってくる。
「何してるの、二人とも？」
「あ・・あぁ・・筆ヶ崎さん」

「筆ヶ崎手を貸してくれ、体が痛くて死にそうだ」
「仕方ないわね」

くそぉ、透め。僕でさえ手をつないだことがないのに、いとも簡単に彼女の手を触ることが出来るなんて。なんと羨ましい奴。
「ほら、二人ともしっかりして」
僕にも手を差し伸べる。ついに手をつなげるイベントがきたあああ！
「ありがとう」
僕の手と彼女がつながろうとしている。後十センチ、二センチ。
ブワッ
不意に強風がくる。
そして彼女のスカートの下、綺麗な逆三角形。薄いピンクというのか、一瞬で色までしっかりとは区別はつかなかったが、ピンクっぽかった。
「うぐっ」
手を伸ばした僕の手をするりと回避し僕の顔面を蹴る。
鼻血は奇跡的に出てないようだったけど。鼻が痛い。
「さ、さっさと行くわよ」
顔が赤くなっていたのは気のせいだろう。
学校に行くまでにかなりボロボロになり、ここにきてすごい好感度が下がってしまった気がする。

その日の昼休み。
「なぁ、日月」
「どした？」
「今朝の事だけどな」
昼ごはんを食べてる時、横から透が呼んでくる。
「相談だったな、何の相談？」
「実は俺らしくない相談なんだが」
透らしくない相談？　運動のことか、スランプにでもなったのだろ

うか。
もしや家庭的な面も可能性としてはあるな。
「お前筆ヶ崎と付き合ってんのか？」
「いやそれはないよ」
これだけはハッキリと言える。個人的には付き合いたいなとは思ってるけど。
「何だ、いや最近筆ヶ崎と一緒に居るから、そういう関係なのかなって思って」
「お前、もしかして…」
「俺は筆ヶ崎の事が好きだ」
・・・・・・・・・
なっ、なんだって！？
今まで全然そんな雰囲気出てなかったのに。
「力を貸してくれるよな、日月」
目を見るからに、こいつは本気なんだなということがすごく分かる。
おそらく嘘ということはみじんも思って無いだろう。僕が親友だから、心を許せるからこいつはそのことを僕に伝えたんだろう。僕だったら到底無理だ。僕だって透の力になってやりたい。
だけど自分は伝えるって決めたんだ。
「あぁ。もちろん全力で支援させてもらう」
あーなんで僕はここで本音を言えないんだろうか。
おそらくここで「いや僕も筆ヶ崎さんの事が好きなんだ」とでも言っておけばよかったかもしれない。
「じゃあまたあとでな」
そう言うと昼休みの終了の鐘が鳴り、みんな五時間目の準備を始める。

放課後。透が筆ヶ崎さんのことを好きという衝撃事実のせいで、今日は筆ヶ崎さんとほとんど話すことが出来なかった。
「ちょっと具合が悪いから、今日はすぐ帰るね……」
「夏風邪でもひいた？」
「ん、ま、まぁ……そんな感じ……」
この程度の、軽い会話しか交わせなかった。
どこも寄り道せずに、真っすぐそのことだけを考えながら帰っていた。
とりあえず今日分かったのは、透が筆ヶ崎さんのことが好きということだ。
「なんでこんなときに、こんなこと分かったんだろう」
僕は落ち込んでいるのだろうか、残念がっているのだろうか。透の気持ちに対して僕はどう思っているんだろう。混乱しているのだろうか、整理がつかないまま家に帰る。

「ただいま…」
今日は珍しく姉が出迎えてこない。
「姉ちゃん？」
靴はある。しかし声がしない、いや・・・薄らと聞こえる、姉の声。
呪文？　何かブツブツ言ってるようにも聞こえる。
「居るなら電気ぐらい」
っ！
部屋にただよう酒の匂い。テレビの前の小さいテーブルにはビールの缶が六本ほど、飲みすぎじゃないかというぐらいグダグダしている。
「いつから飲んでんの？」
姉ちゃんは机に倒れていて、近くにはティシュがたくさん。
「もしかして…泣いてるのか？」

「う…うぅ…もう死ぬ…私は死ぬぞぉぉぉ」
「ちょっと待て、とりあえず落ち着けって。一体何があったんだ」
姉を泣かすほどの人物が、この世に居るのか！？
こんなに酔い下れて、お酒のせいだとは思わない。姉はこんなになるまで、グダグダにはならないし、そもそも姉ちゃんはそういう人ではない。
「私の何がい〝け〟な〝がった〟ん〝だぁ」
完全に声が鳴き声と、混ざってる。

二十分後――
姉の話をまとめると、こうだ。
彼氏に振られた
それが姉にとってすごいショックなことだったのだろう。
「寝てもう一回考え直すわ」
いつもの姉らしからぬ行動で、少々戸惑いを受けてしまった。
昨日に続き、今日は意味違う疲れが襲ってきた。
文化祭のこと、透のこと、筆ヶ崎さんのこと、そして姉ちゃんのこと。
早く風呂入って、寝た方がいいのかな…？

１１話「親友だけど、恋の敵！？」（後書き）

どうでしたでしょうか。

ぜひ、この作品に関わっている方の作品も、

ご覧になってみてください。

１２話「本当の気持ち」（前書き）

この作品は、以下の４名の作者によるリレー小説です。

水馬、ｙａｓｕ１９８０、チョコメロン、姫井星光

１２話の執筆者：姫井星光

（敬称略）

12話「本当の気持ち」

俺は筆ヶ崎のことが好きだ――

そんな、透（とおる）の告白。

僕は筆ヶ崎（ふでがさき）さんと彼とのパイプ役を担うことになった。

だって、断れるわけがないのだ。断れる理由は確かにあるのだけれど、そう簡単に彼を突き放すことは決してできない。

透は僕の大切な親友だ。

同時に、僕は彼の大切な親友だ。

親友の切実な想いを粉々に砕いていいはずがない。親友の切実な想いに背を向けていいはずがない。

けれど――

僕も彼女が大好きなんだ。

彼女のことを想うと、胸を引き裂くような――そんな切なさが僕の中で広がるのだ。どうしようもないほど好きなのだ。

透も僕にとっては大切な存在だけれど、それと同じように、僕の筆ヶ崎さんに対する想いも大切なものだ。

僕はどうすればいいのだろう。

筆ヶ崎さんと透。

どちらを「取る」べきなのだろうか。

――いや、どちらを「取る」だとか「捨てる」だとか、そんな問題ではないのかもしれない。

透に「お前に協力は出来ない。僕も彼女が好きなんだよ」と伝えても、僕と彼の関係に一ミリたりともひびは入らないと思う。

表面上は今まで通りの親友だろう。

ただ、やっぱりそれは気持ちの問題で、僕には僕で筆ヶ崎さんに関

して後ろめたさが残るし、彼は彼で少なからず嫉妬心が湧くだろう。逆に、彼が筆ヶ崎さんと想いを寄せあうことになったならば、まちがいなく僕は妬くし、苦しくなるのだ。
あちらが立てばこちらが立たずではないけれど、どちらかがどちらかに気を使わなければならない状況は免れない。
シビアもシビア。
とてもじゃないがこんなドラマのような状況は僕の手に負えそうもない。
ああ。
そんな風に妥協している時点で、僕よりも透の方が筆ヶ崎さんに相応しいのかもしれない。
やっぱり僕は――

「……ふむふむ、なるほどね。よーく分かった」
僕の話している間も、奥条先輩の顔から笑顔は絶やされることはなかった。
しかしそれは決して、愉快さからくる快活なものではなく、包み込むような優しいそれであった。
「僕は……僕はどうするべきでしょうか……」
甘えたつもりではなかった。
けれど、誰かに話を聞いて欲しかった。胸内を渦巻く、どうしようもないような感情の嵐を外界に解放してみたかった。
要は他人に励まされたかったのだ。
後押しが――良くも悪くも僕を前進させる後押しが欲しかった。

「でも、聞くべきじゃなかったかも、あたし。こちらから聞いておいて言うのもなんだけどね」

奥条先輩は優しい笑顔のまま言う。

「友達と好きなヒトが被っちゃうとか、そんなのは良くある話だけどね。よくある話だけど、返ってややこしい厄介なもんなんだよね」

あたし恋愛経験希薄だから、と奥条先輩ははにかんだ。

「ごめん。あたしには君の満足出来るハッピーな解決方法、考えられないかも」

「……いえ。話を聞いてくれただけで十分というか、とても楽になったというか」

ついこの間知り合ったばかりの上級生にこんな幼稚な話を聞かせてしまって、僕は何て無粋者なのだろうか。

聞いてもらうだけ聞いてもらっておいて、奥条先輩を困らせてしまった。

「こんな、青臭い話をわざわざ聞いていただいて。面目ないです」

昨日の透との一件がどうしても自己解決できず、僕は今日一日空回り気味だった。

何をやっても手につかずといった具合で、授業にも集中できず、魂の抜け殻のような風体で時間だけが裕々と流れていって……。

この昼休みは一人黄昏れようと屋上に繰り出してきたわけである。

それで、たまたま屋上に奥条先輩の姿があって、彼女が「津久江君じゃんか。一体全体どうしたの？」と気さくに声をかけてくれたの

で、僕は偽ることなく、ことを吐露したのだ。

「青臭いだなんて、そんな水臭いこと言わないでよ、津久江君。困っている後輩君を放ってなんかおけないよ」

「でも、逆に先輩を困らせてしまって……」

「いやいや」

自分でも思う。

今の僕は周囲の人が察知できるほどのネガティブオーラを放っていると。

「あのさ、ちょっと聞いていいかな？」

僕に背を向け屋上からの眺望に視線をやる奥条先輩。

「何ですか？」

「瑞香ちゃんのどこに惚れちゃったの？　後、君は仲庭君のどこが好きなの？」

「……え？」

「恥ずかしがんないで、ちゃんと答えてね。全部が好き、だなんて答えないでね。別にゲームみたく、あたしや二人の好感度に増減なんて発生しないからさ」

「えっと……」

ゲームみたくって……。

奥条先輩はきっぱりと釘を刺してきた。

けれど、僕はちゃんと答えを知っているし、分かり切っている。

「最初は、僕の思い込みからの一目惚れでした。筆ヶ崎さん、可愛いし、優しそうだったし……。実行委員で彼女と関わっていく中で、

僕の中で彼女のイメージはことごとく崩壊してしまったんですけど、それでもやっぱり僕は好きなんです」

これほどまでに女の子を好きになったことなんて、初めてだった。人を好きになるということが、これほどまでに自分の心を締め付けるものだなんて知らなかった。

筆ヶ崎さんのことを想えばどうしても胸は切なくなるし、苦しくなるし、痛くもなる。

だけれど、そんな苦痛と同じくらい――いや、むしろそれらよりも大きな幸せな感情が、隣り合わせになっているのである。

「僕は筆ヶ崎さんが筆ヶ崎さんだから――彼女が彼女だから、好きなんです」

僕の勝手なイメージでの筆ヶ崎さん。

現実の筆ヶ崎さん。

どちらが本物であるかなんて、些細な問題ではないのだ。

「瑞香ちゃんが瑞香ちゃんだから――？　フッ、フフフフ……フフ……フハハハハハハハハハハハハハハッ」

奥条先輩は豪快に笑った。

両手でお腹を押さえながら高らかに。太陽眩しい、空を仰ぎながら。

「……ンフフフ。ご、ごめんよう」

「あ、いえ……」

顔面の体温が異様に高騰していることを自覚しながら、僕はあたふためいた。

自分でも飛びぬけて意味の分からないことを言ってしまった、とすぐさま自覚した。
筆ヶ崎さんが筆ヶ崎さんだから、って、一体どういうことだよ……。
津久江日月の大馬鹿野郎っ！
「そっかぁー。何となくだけど、あたしにも分かるよ。てか、ごめんねホント。意地悪な質問しちゃって」
奥条先輩は目のあたりを腕で拭った。
「恋は盲目、じゃないけど、本人に『あの子のどこが好き？』っていうのはとことん無意味で無粋な質問だよね。……うん。よーく分かったよ。君が本気だってことがさ。仲庭君のことも瑞香ちゃんくらい大事に想っているでしょ？」
「はい」
「じゃあ、もうやることは一つじゃん」
「……」
僕がやるべきこと――
「自分の気持ちを偽るなんて、絶対だめだよ。あなた達の中で、誰か一人でも、自分と向き合うことをあきらめたりしたらさ――どうなるか、君なら分かるよね？」
僕は、奥条先輩のこれまでとは打って変わった威圧感というか、気迫に満ちた真剣な眼差しに生唾を呑んだ。
「全員が傷つくことになるんだよ――？」
「全員が……傷つく……」

「うん。もしさ、君が瑞香ちゃんを傷つけることがあったならそのときは、あたしが君に告って、無理やり恋人にしちゃうからね？」
「え？」

「津久江君。本当に好きな人はすぐ近くにいるのに、その人と分かりあえずに終わってしまう、ってすっごく辛いものなんだよ――」

空に浮く太陽に匹敵するくらいの眩しい笑顔を浮かべて放たれた屋上さんの言葉は、どういうわけか、僕の鼻孔を刺した。
気が付けば、僕の両目からは生温かい涙が零れていた。

僕は腹を括った。
奥条先輩に後押しをされた昼休みが終わっての、五・六時限目で覚悟を決めた。
透に伝えるのだ、僕自身の気持ちを。本当の想いを。
放課を告げるチャイムと同時に、隣の、そのまた隣のクラスへと僕は向かう。
筆ヶ崎さんとお化け屋敷の相談をしなければならないけど、思い立ったが吉日。奥条先輩の後押しもあり、今の僕なら何でも出来そうな気がした。
「ちょっと、津久江君どこへ行くの？」
廊下へ出ると、筆ヶ崎さんが声をかけてきた。

「あ、ちょっと用があるんだ。すぐ終わると思うから……教室で待っててよ」
「……何緊張してんの？　津久江君」
「えっ！？」
首を微かに傾げて、訝しげな表情の筆ヶ崎さん。
「き、きき緊張っ！？　そんな、こたぁないよ」
僕はつい素っ頓狂に声を裏返してしまった。
「変な、津久江君。じゃ、私待ってるわ。とっととその用事とやらを終わらせてよね」
「うん」
どうやら僕は緊張しているらしい。
筆ヶ崎さんに言われて、初めて気が付いた。確かに、胸が異様な高鳴りを見せているような気がする。

「透。ちょっと、話があるんだ」
幸い透のクラスはスカスカで、教室内に残っているのは透と数人の女子だけだった。
僕はずかずかと教室に入っていき、透の目の前に立った。
「お、日月。どうしたよ？」

透は困った素振りなど全く見せずに、荷物を鞄にしまい込む作業を止めて顔を上げた。

「ごめん。前置きはしないから」

「は？」

僕は不意打ちとも呼べるような、先制攻撃をしかけることにした。いや、正確に言うと、昨日の透のあの告白が先制攻撃になるであろうから、いわば捨て身の反撃になってしまうのだろうか。

ともかく、僕は深く静かに息を吸い込んで、気持ちを溜めるに溜めてから言った。

「実は僕も筆ヶ崎さんが好きだから」

「……は？」

言ったはいいものの、僕は透の顔を見れなかった。

恥ずかしいとか、後ろめたいだとか、そんなレヴェルを通り越して、この場から今すぐに離れたかった。

「だから僕は透に協力できない。じゃ、そういうことだから、お互い頑張ろうな」

とだけ残して、一目散に踵を返した。

勝利への逃亡だ。

この瞬間から、透は僕の親友という肩書に加え、恋敵という肩書を背負うことになった。それは僕も一緒のことで、僕は彼にとっての恋敵となったということ。

なってしまった、のではない。

なった、のだ。

やっぱり、気持ちを偽ってまで――自分の想いを押し殺すなんて無理だ。僕には我慢できない。
僕は走った。
筆ヶ崎さんが待つ教室へと。
そこまでして急ぐ距離ではないのだけれど、猛スピードで駆けた。
僕は筆ヶ崎さんを逃がしたくない。
僕は透に負けたくない――

「ふ、筆ヶ崎さんっ！」

飛び込むように教室に入って、僕は開口一番彼女の名前を呼んだ。
筆ヶ崎さんは僕の呼び声に驚いて、小さく跳ねあがった。

「な、何よ……？　用事、済んだの？」
「うん」
「じゃあ早く――」
「筆ヶ崎さん！　絶対に、絶対にお化け屋敷を成功させよう！！
今世紀最大のやつを作ろう。高校生のレヴェルを遥かに凌ぐような、そんなやつ作ろう。二人で、死ぬほど頑張ってさ」
「……今更何を言っているの？　津久江君」

そんなの当たり前じゃない、と強かに嘲る筆ヶ崎さん。

「もし、お化け屋敷が成功したら、一つだけ聞いてほしいことがあるんだ」
「聞いてほしいこと？」
「うん。聞いてほしいこと。要するに、お願い。どうかな？」
「……津久江君、今日のあなたは異常よ？　どうかした？」

どうもしない――のだと思う。

今日も、いたって普通の僕だ。
けれど、今までの僕より若干ハイではある、と注釈をつけておこう。

「でも、いいわ。考えておく……」

そう筆ヶ崎さんは咳払いをして、若干上目遣い気味に視線を寄こした。
瞬間、僕と筆ヶ崎さんの視線が重なった。
綺麗な、とても綺麗な彼女の目。
僕は魅入った。
もっと、彼女の――

「じゃ、じゃ、行くわよ」

先に目を逸らしたのは筆ヶ崎さんの方だった。
顔をほんのり赤らめているのは気のせいだろうか――けれど、彼女はプイと僕に背を向けてしまったので、あまりその様子は伺えなかった。

「行く、ってどこへ？」
「決まってるじゃない。私の家よ」

当然のことを言ったかのような口振りで、筆ヶ崎さんは答えた。
僕も「分かった」と二つ返事。
やっぱり――
やっぱり僕は筆ヶ崎さんが大好きだ。

１２話「本当の気持ち」（後書き）

どうでしたでしょうか。

ぜひ、この作品に関わっている方の作品も、

ご覧になってみてください。

１３話「優しさと忘れ物」（前書き）

この作品は、以下の４名の作者によるリレー小説です。

水馬、ｙａｓｕ１９８０、チョコメロン、姫井星光

１３話の執筆者：水馬

（敬称略）

13話「優しさと忘れ物」

二度目の訪問となった筆ヶ崎宅、筆ヶ崎さんの私室。
筆ヶ崎さんの部屋は、一昨日来たときと何も変化はなく、相変わらず整理整頓がきちんと成されている綺麗な状態だ。

「どうぞ、入って」
「あ、お邪魔します」

僕は、部屋に入っていく筆ヶ崎さんについていく。
二度目の訪問ではあるが、今回は前回と比べて、シチュエーションが違う。

まず、ここに来るまで、僕は筆ヶ崎さんと会話をしながら、並んで歩いて来たという点。
マンションの場所を既に僕が知っているからという理由で、今回は一緒に向かうことにしたそうだ。
次に、筆ヶ崎さんが制服姿ということ。
前回は私服だったが、今回は一緒にマンションへ向かったために、筆ヶ崎さんは夏服を着ている。
これらの小さな要素から推測していいのか分からないが、筆ヶ崎さんにとって僕は部屋に招いてもいい存在、なのか。
それとも、以前、僕が考えていた“リアルホラー”が嫌いだから“夜の学校”には残りたくないという理由で、家に招かれているのかもしれない。
まぁ、どちらにしろ、筆ヶ崎さんに直接聞かないことには、きちんと確かめる手立てはないんだけど。

「適当に座って」

「うん」

僕はカーペットが敷いてある部分に腰を下ろし、学校指定のカバンを脇に置いた。

筆ヶ崎さんはというと、勉強机の上に置いてある紙の束を手に取り、部屋中央にあるテーブルの上に置く。

これは、一昨日まとめた文化祭の資料だ。

僕や筆ヶ崎さんの走り書きした文字がある。

「さて……津久江くん」

「はい」

「まず、私に言わなければいけないことがあるわよね？」

「……は、はい」

言わなければならないこと。

なるほど……あれのことだな。

昨日の朝、筆ヶ崎さんの下着を見てしまったことに対しての謝罪だよな。

「昨日は、下着を見てしまってごめんなさい……あれは事故で、風が吹いてしまったことによる偶然で――」

「そ、その話じゃない！」

筆ヶ崎さんは、やや頬を赤らめて怒鳴った。

あぁ、こういう筆ヶ崎さんも可愛らしいなぁ、と思っている僕の今の顔は、きっとにやけているのかもしれない。

それはそうと、下着の話でないとすると、一体なんのことだろうか。

「昨日、具合悪いって言って、帰ったじゃない。その後、“体調は

どうだったのか”ということについて、言ってよってこと！」
「あ、え、えと……市販の風邪薬を飲んだら、良くなりました、はい」
筆ヶ崎さんの勢いに負け、思わず敬語で喋ってしまったが、どうやら、筆ヶ崎さんは僕のことを心配してくれていたらしい。
具合悪いとか、夏風邪というのは、ただあの時、混乱していて準備どころではなく、早く帰りたいための口実――嘘だったというのに、筆ヶ崎さんは本気で僕のことを心配してくれた。
これは、本当に申し訳ないことをした気がする。
親友の透が、筆ヶ崎さんのことを好きという事実にショックを受けて、切なさで心がいっぱいになって。
筆ヶ崎さんが透のほうへ行ってしまう気がして、僕は気が気でなかった。

でも、こうして筆ヶ崎さんが、少なからず僕のことを想ってくれているというのは、透よりも僕がリードしている証拠じゃないだろうか。
今後、透がどんなアプローチを筆ヶ崎さんに仕かけてくるかは分からないが、僕と筆ヶ崎さんは、“クラスメイト”で“最叫（さいきょう）のお化け屋敷を作る”と決めた“実行委員”なのだから、あいつにだけは負けるわけにはいかない。
何が何でも、告白して――。

「……くん！　津久江くん！」
「……あ」
「なに、ぼぉーっとしてるの？　やっぱり、具合悪い？　リビングにソファあるから、横になっていけば？」
「あ、あぁ、大丈夫だよ」

つい、いろいろと考えていたせいで、ぼぉーっとしてしまった。
今日は、昨日の遅れを取り戻す勢いで、筆ヶ崎さんの家に来たというのに、ぼぉーっとしていては時間を無駄にするだけだ。

「よし、早速やろうよ、筆ヶ崎さん。今日は何を決めるんだっけ？」
「驚かすアイデアや仕掛けなどは決めたから、今日は使用材料についてと、役割分担よ」

『一応、ある程度必要になりそうな材料の値段は、私が控えておいたから』と筆ヶ崎さんは言うと、一枚のメモ用紙を差し出した。
そこには、画用紙やガムテープ、ベニヤ板、釘など、あらゆるものの名称と、値段が書いてあった。
きっと、昨日、一人でホームセンターに行き、調査して来てくれたのだろう。

「やっぱり、すごいな、筆ヶ崎さんは」
「ほ、褒めたってなにも出ないわよ」

頬を赤らめ、ぷいっと横を向いた筆ヶ崎さん。
その様子を見て、僕は微笑む。

「さ、さっさと始めるわよ」
「そうだね、まずは役割分担か」

僕は、筆ヶ崎さんがパソコンを使って作ったという役割分担表を受け取り、必要な役柄とクラス名簿を見る。
女幽霊役、受付、間仕切り役――結構、いろいろな役割があるようだ。
ちなみに、僕と筆ヶ崎さんの名前は既に書かれていた、『現場監督役』という欄に。

「え、これ……現場監督って、工事現場じゃないんだから」
「別に名称なんていいでしょ。要は、何すればいいか分かればいいんだから」

まぁ、確かにそうだよな。
でも、現場監督って、ただ人が驚いているのを見ていればいいのだろうか？
以前二人で行ったお化け屋敷で、僕の反応を楽しんでいたところを見ると、やはり、そういうS気質な部分も筆ヶ崎さんにはあるのかもしれない。

約一時間が経ち、時刻は午後五時半。
僕たちはクラス全員分の役割を決めた。
あとは、これを皆に公表して、各々が快く引き受けてくれればいいんだけど。

「……ん？」

ここで僕は、ふと、筆ヶ崎さんに聞いていなかったあることを思い出した。

「あの、筆ヶ崎さん……」
「なに？」
「僕が渡した、生徒会に提出する催し物の申請書……あれ、提出したよね？」
「……」

筆ヶ崎さんの返事がない。
どこか遠くを見つめて、何か考えているようだ。
「筆ヶ崎さん、“私が出しておくから”って言って、僕から受け取ったよね？」
「……あ、提出してない」
「え……」
「学校にあるのは確かなんだけど……どこにしまったかしら……」
おっと？
文化祭の準備で忙しくて、忘れてしまっていたのだろうか。
というか、そもそも、僕がもう少し、筆ヶ崎さんの負担を軽くしてあげられていれば、忘れることもなかったのかもしれない。
「確か……締め切りって今日の六時までじゃなかった？」
「ど、どうしよう……」
「六時締め切りだから、きっとそれまで学校は開いているだろうし」
「ほ、ほんと？」
焦って、弱々しい姿を見せる筆ヶ崎さん。
また、珍しい一面を見れた気がする――――って、喜んでいる場合じゃない。
このまま、締め切りまでに出せなければ、お化け屋敷は実現しない。
今までの努力が水の泡だ。
「筆ヶ崎さん、今から学校へ戻ろう！」
「え、で、でも……」
「もう外も暗くなってきたから、僕もついて行くよ」

「……れないでよ」

え？

よく聞き取れなかった。

「は、離れないでよ」

「大丈夫だよ」

いやいや玄関に向かう筆ヶ崎さん。

僕は、自分の荷物を持って、筆ヶ崎さんの後についていく。

外に出ると、ほぼ日が沈んでおり、夜は近かった。

キィーキィーとコウモリが不気味な声を出していたり、カァーカァーとカラスが鳴きながら飛んでいたり、何だか気味が悪かったが、そんなことは気にせず、僕と筆ヶ崎さんは、学校へ急ぐのだった。

13話「優しさと忘れ物」（後書き）

どうでしたでしょうか。

ぜひ、この作品に関わっている方の作品も、

ご覧になってみてください。

１４話「新たな決意」（前書き）

この作品は、以下の４名の作者によるリレー小説です。

水馬、ｙａｓｕ１９８０、チョコメロン、姫井星光

１４話の執筆者：ｙａｓｕ１９８０

（敬称略）

１４話「新たな決意」

僕たちはまるで体育祭の徒競争よろしく学校まで走った。日は暮れかけており、運動部の部員たちも、帰り支度をしている。とにかく、教室に向かわねば。

と、あれ？　さっきまでぴったりと体を寄せていた筆ヶ崎さんがいない？

「筆ヶ崎さん！！」

「……」

筆ヶ崎さんは校門に体を寄りかけている。

「申請書を探さなきゃ！！　間に合わなくなるよ！！」

「…走りつかれたのよ。ここで待っているから探してきて」

「えっ！？　一緒に探してくれないの…いいけど、筆ヶ崎さんの机、勝手に漁っちゃったら…」

「それは駄目！！」怒っているのだが、どことなく覇気がない。なにかに怖がっているように察せられる。

「じゃあ、早く行こうよ」

「…わかったわよ」そう言ってトントンと僕の隣に駆け寄ってくる。なんだか小動物みたいだなあ。でも、やっぱりなにかに怖がっているように思えるな。

「なにボーっとしてるのよ。早く行くんでしょ？」すると、筆ヶ崎さんはなんと！？　僕の手を取り握ってきた。

「ほら、教室へ急ぐわよ」自体は一刻を争うというのに、声にはやっぱり覇気がない。

そう思っている僕も申請用紙のことより、手のひらに神経が集中してしまう。なので、握られている手の温もりを感じ、

「…あったかい」なんて、うっかり馬鹿なことをもらした。

「ここは廊下でしょっ！　あるわけないじゃない」

「そ、そうだね、ははは」呆れた表情で僕を見る。言葉の意味を取

り違えてくれたおかげで、なんとか笑ってごまかせた。

教室に着くと、筆ヶ崎さんは握っていた手を離し、自分の机を探し始めた。手の温もりは余韻を残して消えていく。

「申請書あった？」

「探してる！」机の中のノートやらなにやらを床にポンポンと投げている。

僕も自分の机を探してみた。絶対無いのは分かっていたけれど何もせず突っ立っているわけにもいかない。ガチャガチャと机を調べながらさっきまでつながれていた手をみつめる。

男女が手をつなぐという行為は、ふつう好意を寄せあう恋人同士や夫婦同士が、例えば、商店街やら公園やらを歩く時行われるものだよなぁ。それ以外もあるだろうけれど…例えば…穴に落っこちたのを救出する時…これはそう滅多にないな。例えば…不安を和らげるとき…？

そういえばこの間僕は“筆ヶ崎さんは放課後の学校が怖い”なんて憶測を巡らせていたな。それが当たっていたとしたなら“好意の結果として手をつないだ”わけじゃないということか。でも、だ。まったく好意がない人間に自ら手を握らせるであろうか？

いや、握らせるも何も緊急の時、好きだ嫌いだなんて考えないであろう。となると結論“彼女が緊急に、不安を感じた時、たまたま近くにいたのが僕であった。そしておもわず手を握っていた”だけだということになる。

はぁ。やばい、ネガティブシンキングがわさわさと湧いてくる。ふと、もよおしたらしい。トイレ、トイレっと。筆ヶ崎さんを見てみる。ないなぁ、ないなぁと口にしているところ、そうとう焦っているようだが、僕は教室を出てトイレに行こうと…。

「ちょっと！！　どういうつもり！！」突然ものすごい剣幕でどなられた。
「いや、どういうつもりもなにも、トイレだけど」
「みつかるまでガマンしなさいよ」
「そんな無茶な…」
「…仕方ないわね。三十秒で戻ってくるのよ、『時は金なり』だからね」
僕はそう言われるとダッシュした。なにせ三十秒だ。

用を足してドアを開けると、そこには人影があった。僕は思わず大きな声をあげてしまう。するとその人影も、
「きやぁぁぁっ！！」と叫び声をあげてその場にうずくまった。これは…筆ヶ崎さん？？？だよな。
「……」
「筆ヶ崎さん？」何も言わない。
「いやあ。びっくりしたね。でも…」
「…わざとでしょ」えっ、何がどういうこと？
「えっ、なにが？」
「『なにが？』じゃないわよ。全部わかっててイジワルしてるのね！」
「私が“放課後の学校”が怖いことなんて察しがつくようなものでしょ！！」
そりゃ、ついていたけれども…。
「それは…そうかなとは思っていたけれど、イジワルってどういうこと？　トイレの前で待ち伏せしていたのは筆ヶ崎さんのほうじゃないか」口に出した言葉は若干角のたつものだった。
「待ち伏せなんてしてないわ！いきなり走りだしていくんだもの、怖くなるにきまってるでしょ！！」

「だってそれは、筆ヶ崎さんが三十秒とかいうから…」そう言いながらも、確かに僕はあまりにも配慮がなかったと思う。僕の手を握ったのも、怖くて、不安だったからに決まっているじゃないか。それをただ馬鹿みたいに喜んでいた。察しだってついていたのに、頭の中でああだ、こうだと考えていただけで、具体的に筆ヶ崎さんの恐怖をやわらげる努力なんて何ひとつしなかったじゃないか。

「その…キミを怖がらせてしまったのは悪かったよ…ゴメン」

しばらくの間、沈黙がつづいた。

「“筆ヶ崎さん”なんて呼ばないでよ…」さっきまでの雷のような口調が変わる。

「瑞香でいいよ。私、上の名前あんまり好きじゃないから…」

おそらくたった数秒だとは思うが、僕は筆ヶ崎さんの照れたような表情に見入ってしまった。そしてこの胸が締め付けられるような感覚は、ここ何年も味わっていないものだ。

「教室にもどろうか？」僕は手を差し伸べた。

「“時と場合”によっては、つないであげる」筆ヶ崎さん――いや、瑞香（こんな呼び方、馴れ馴れしすぎる。やっぱり筆ヶ崎さん筆ヶ崎さんはだろう）は僕の手を取った。

教室に戻ると筆ヶ崎さんは僕の手を離した。どうやら“時と場合”の条件が無効になったようだ。机の周囲にひろげられた、いろいろなものを眺めて「やっぱりないわ」と、ため息をついた。僕は教室の掛け時計を見る。針は六時三十分を指していた。

「あの…。どうやらとっくに時間切れだったみたい」

「えっ！？　今何時？」筆ヶ崎さんは腕時計で時刻を確かめてから、どうしよう、となんとも悲痛につぶやいた。

「お化け屋敷どころか、なんの催し物もできなくなっちゃう」何か

言うべきだろうか？
「大丈夫だよ」何が大丈夫なのか自分で言っておいてわからない。
筆ヶ崎さんは僕の適当な発言を聞き流す。
「あーあ。クラスのみんなにどう言えばいいかしら」
「ぼ、僕が申請し忘れたことにすればいいよ。筆ヶ崎さんを悪者にはさせないよ」
「…まさか、いいトコロ見せようなんて思ってる？　生憎、そんな卑怯ものになるつもりはないわよ」鋭く睨まれた。
「でも…ありがとう。その気持ちだけは受け取ることにしておく」
筆ヶ崎さんは微笑んだ。
「それに、ちゃんと下の名前で呼んでよね」
「あ、う、うひゅん」変にひきつってしまった僕の声がツボにハマったのか、筆ヶ崎さんは大きな声で笑っている。
「…ハハハ…もう冗談はやめてよね…フハハハ」そう言ってまた笑いだした。ひとしきり笑い終えてから、今度はひどくまじめな声で言う。
「皆には正直に謝るわ。あぁー、でもホント残念だわ。ほとんど完璧と言っていいほどの傑作お化け屋敷に仕上げる自信があったのよ」
「わかっているよ。パソコンに書きだしていたお化け屋敷の図面、凄かったし」
「一緒に作業していたから知っているかとは思うけど、武道場を借りきる予定だったの。そこいっぱいに使って、仕掛けも山ほど仕込んでね」
「うん、読んでるだけでかなり怖いトラップもあった」
「でしょー。それに…」と、筆ヶ崎さんが話を切った。そして僕の体にその身を寄せる。何者かが近づいてくるその足音が、コツコツと不気味に響いてきたからだ。
密に体を寄せ合っているため、筆ヶ崎さんの鼓動が直に伝わってきた。そして…。

「おーっと、見てない、見てない。先生はなーんもみとらんぞ。もう高校二年、十七だ。間違いが起きても何らおかしくはないからなあ。先生はねぇ愛こそ全てだと思っているんだよ。愛は地球を救うって言うだろう。ぜひその愛の力で地球どころか銀河系ぐらいまで救うんだ若人よ。ではさらば、見回りを続けなくてはな」
やってきたのは見慣れたジャージ姿の教師だった。まったく何を言っているのだ、この人は。

「御手洗先生！！　何一人で意味不明なこと言ってるんですか！！」
僕は声を荒らげた。
「先生。私たち文化祭実行委員の仕事で残っていたんです！」筆ヶ崎さんも僕につづいた。
「ああ。そういえば、お前ら二人そうだったなぁ。いや、でも距離が近かったような…」
「違います！！」僕と筆ヶ崎さんは異口同音に声をあげた。
「わかった、わかった。ああ耳が痛い。で、なにをこんな時間まで作業していたんだ？」
「それが…実は…」筆ヶ崎さんは御手洗先生に事情を打ち明けはじめた。

「文化祭の担当顧問教師は黒板先生だから、俺がどうにかできることじゃないんだよなぁ。でも、うーん、期限すこしぐらい過ぎても大丈夫だろうよ。とにかく、職員室に行こう、まだ黒板先生いたはずだ」
そういうと、御手洗先生は歩き出した。
「なんとかなるかもしれないよ」僕がそう言うと筆ヶ崎さんは小さ

く頷いた。

「規則は規則だからねぇ」白髪の老教師はめんどうくさそうに言う。説教くさいということであまり人気のない古文教師だ。
「しかし黒板先生、話を聞けば、もうあとは実行するだけの段階にあるんですよ！中途半端にやりたがっているわけではないんですから…我が教え子たちの青春の一ページを台無しにはさせたくありません。私からもぜひ、彼らにやらせてやってください！！お願いします！」御手洗先生は深々と頭を下げた。僕たちもつづけて頭を下げる。
「いや、やめてくださいよぉ。駄目とは言ってないじゃないですか。あぁ、御手洗先生はもうよろしいですよ」
そう言われると御手洗先生はお辞儀をし、黒板に聞こえないように「俺も黒板先生苦手なんだよな、まあたっぷり説教喰らえ、ドンマイ」と言って職員室を出ていった。

「ほれ君たち、いいですかぁ。まぁですねぇ、これを機に規則をまもる心がけをですねぇ…」
黒板は説教モードに入った。話が進んだのは待つこと十数分ほど経ってからだった。
「と、いうわけですよ。わかりましたかぁ？まぁ。今回だけは特別許可してあげましょう」
「ありがとうございます」僕たちは頭を下げる。ああ、この十数分でいったい何回頭を下げただろうか。
「黒板先生。私たち武道場を使いたいんですけれど、もう先約があるでしょうか」
「ああ、あそこは全クラス共用の物置ですねぇ。いまからじゃ変えられませんよ」

筆ヶ崎さんは、どうしよう、と小さく呟いた。
「では…特別教室…美術室は空いていますか？」
黒板は引き出しからプリントを取り出すと、
「えぇ、そこは空いていますねぇ…」
「ではそこを使わせてください」
「わかりました。そもそも、もっと早くに提出しておけば…うーん、もう遅いですから次にしておきますけど。兎に角、明日中に、これに詳細を書いて渡してくださいよ」筆ヶ崎さんは申請用紙を受け取るとお辞儀をした。
「では、気をつけて帰るのですよ」わかりました、と言って僕たちはやっと職員室を出た。

「黒板の説教はホント刑罰ものだよね」
「ごめんなさいね。もとはと言えば私が無くしてしまった所為だから…」
しょんぼりと言う筆ヶ崎さんに僕は「なんてことないよ」と元気に笑って返した。

昇降口から外に出ると、もうすっかり日が暮れていた。
「その、怖くない」
「馬鹿にしないでよ」そう言ってはいるが、決して怒っている口調ではなかった。
「私がキライなのはリアルホラーなの。暗い夜道くらい大丈夫」
「お墓は？」
「うーん、大丈夫かな…」そう言うとスタスタと歩きだした。どんどん先に行く筆ヶ崎さんを追いかけながら、また質問した。
「森の中は？」
「平気かな。とくに謂われがなきゃ。て、いうよりか、謂われがあるところ以外は特に怖いと思わないわ。言ってるでしょ、リアルホ

ラーがキライだって」
「うーん。でも、じゃあ、どうして学校はダメなの？」
筆ヶ崎さんはこめかみを押さえて考えている。
「それは…七不思議とかあるじゃない」
「ウチの高校の七不思議って何？　聞いたことないけど」
「私も詳しくはわからないけど、絶対あるから！！」
「そんなむきにならないでも。…じゃあ、判明したら教えてよ。僕が確かめてみるからさ」
「自分で調べなさいよ」そう言って、いたずらっぽく笑う。
「でも、わからないなぁ。リアルホラーがダメなのに、怖い物好きだなんて、ちょっと矛盾してないかな？」
「私が理由なしに怖い物好きになったと思う？」今までのおどけた雰囲気ではなくなった。
「どういうこと？」
「敵を知っておくことで耐性をつけようとしたのよ。こんな現状を打破したいから。おかげで耐性はついたけど…」筆ヶ崎さんは歩みをとめた。
「…所詮作られた恐怖しか越えられない。このあいだドリームランドに行った帰り、トンネルに入ったでしょ？　ドリームランドのクリエーターが死に物狂いで考えたお化け屋敷を鼻で笑っておいて、たかだかトンネルに入っただけで気が動転するってどういうことよ！！」
「……」何も言えない。だけど、何か言うべきだと思った。
「何か、ことの元凶みたいな体験をしたとか？」
「そんなの知らないわよ。とにかく、小さいころからダメなものはダメだったし…」
「そっか…」好きな女の子が困っている。それをどうすることもできない歯がゆさに唇を噛んだ。
互いに会話を切りだすこともなく、しばらく黙って歩いていた。沈黙を破ったのは筆ヶ崎さんのほうだった。

「もちろん私の家まで送ってくれるんでしょ？」
「もちろんだよ。お化けより痴漢のほうが許せないからね」僕はファイティングポーズをとってみせる。
「なによそれ。でもうれしいわ」筆ヶ崎さんはそう言って微笑んだ。

「ちょっと遅いけど家に寄って行かない？今日は迷惑かけちゃったから、お茶とお茶菓子ぐらい頂いてもらわないと」
嬉しい誘いを断る理由はなかった。共働きの両親の帰宅は遅いので、今くらいの時間なら気兼ねすることはないそうだ。

今日は二度筆ヶ崎さんの部屋にお邪魔する形となったな。少しエアコンが効いてきたころ、筆ヶ崎さんがグラスとお盆を持って部屋に入ってきた。
「はいどうぞ。冷えてるわよ…私さっそく申請用紙埋めちゃうから…それと、おかわり欲しかったら言ってね」筆ヶ崎さんはそう言って、机に向かう。

しかし、感慨深いものがある。筆ヶ崎さんを好きになったのは、断言できるが、二年になった最初の日のことである。年度初めのホームルームが終わり、帰り際、喉が渇いた僕はジュースでも飲もう思ったのだ。駐輪所脇の自動販売機のまえで、機械にお金は放り込んだものの、何を飲もうか考えていた。すると、誰かの指が僕の目の前のボタンを押した。「津久江日月くんイコール優柔不断っと」
「誰っ？　それにジュース！！」
「誰とは失礼ねクラスメイトじゃない。はい、百二十円。じゃあね、また明日会いましょう」
何のことはない出来事。だけど強烈な印象。まず、この中肉中背のさえない男、津久江日月に女子が絡んできたこと自体が信じ難かったのだが、その彼女が、整った顔立ち、黒のストレートでセミロン

グヘア、スラッとした抜群のスタイルときた日には、一目惚れでもしないほうがおかしいものだ。でも、その後何か進展があるかといったら何もなく、外見で満足し、内面を想像するだけの空き缶のようにカラカラした実のない日々を送っていたのだ。それが、文化祭実行委員になって数日で、二人の関係はこのメゾン・ド・ペンシルまでウナギ登りをしたのだから、こんな人生ある意味インチキだとも思えてくる。ただ挙手をしただけだといわれればその通りなのだから。

お化け屋敷を成功させるだけでは、ダメなような気がしてならない。筆ヶ崎さんの弱点を知る者はこの世にたくさんはいない。限られた数人しか知らないとして、その中で、それを打ち負かすために行動を起こそうとする人間は、はたして何人いるだろうか？

「僕がやらずに誰がやるんだ」おもわず口に出していた。でも、なにを？　どうやって？

方法がまったくもって分からない。リアルホラーがダメだということは分かっている。でも、具体的にどう戦えというのだろうか？

ふと、筆ヶ崎さんを見ると、机に伏していた。小さく寝息もきこえる。僕は音をたてないようにして玄関へ向かった。

ノブを回そうとしたら、急にドアが開いた。そこには背の高い男がいて僕を指差して言う。

「うーん。津久江くんだろう」

「えっ。そうですけど、あなたは？」

「そりゃあ瑞香の彼氏に決まってるだろ」

僕は固まってしまった。一体どういうことだ。

「ってのは悪い冗談で、瑞香の兄貴をやらせてもらっている筆ヶ崎墨也というものです。どうぞよろしく。墨也って呼んでくれ」
「どうして僕の名前を…」
「最近瑞香がよく話に出しているから、なんとなく勘でね、言ってみただけだけど当たっちゃったみたいだね」
「それはそうと静かにしてください瑞香さん寝ているんで」
「あらっ。もう下の名前で呼んでるんだね」
「いや、そういうわけではなくて、お兄さんにつられて」
「へえ。お兄さんかぁ。いいね、将来の弟よ」
「勘弁してくださいよ。それに大きな声出すと筆ヶ崎さん起きちゃいます」
「そうか。しかし、腹減ったなあ。じゃあ飯でも食いに行こうか弟よ」
「いや、おかまいなく。僕は家に帰りますから」
「まあ、付き合えよ。おごるからさぁ。ファミレスおひとり様っていうのも寂しいもんだからなぁ」
「大事な話もしたいんだ」いままでのふざけた口調ではなかった。
「今日じゃなきゃだめですか」
「うーん。俺のバイト、シフト制でねぇ、タイミング悪いとなかなかこの時間には会えないからなぁ」
「わかりました」大事な話と言うのがとにかく気になった。

このファミレスはメゾン・ド・ペンシルからそう遠くないところにあった。八時半を回ったところで、客も多くだいぶにぎやかだ。僕は道すがらケータイで家に連絡を入れたのだが姉ちゃんはいないようだ。もしかしたら、お酒を飲んで酔い潰れているのかも。
ところで、目の前の墨也さんはピザをつまんでいる。
「で、いつになったら“大事な話”をするんです？」さっきから、

バイト先での珍事件や変わった友達の奇行の話や人生の愚痴など、ろくな話をしていない。

「わーかったって。じゃあ、本題にまいりますか？」
「どうぞ」ホントいい加減にしてもらいたい。
「もう知ってんだろう？」低い声で言った。
「何をですか？」
「あいつの怖がりなところだよ」
「リアルホラーのことですか？」それしかないだろう。
「うん、まあそうなんだが…」墨也さんは頭を抱えた。
「あれはほんのイタズラだったんだよ」唸るように言う。
「今のマンションに入る前、俺ら家族は一戸建てを借りて住んでいたんだ」
「そうだったんですか」
「ああ。それでな、その家の近くに今にも崩れそうな廃屋があってな。ガキだった俺はよく友達と忍び込んでは遊んでたんだよ」ゆっくりアイスコーヒーをひとすすりして、またつづける。
「“危険・近寄るな”なんて看板もあったなぁ。そこでだよ…」ため息をつく。
「…誰かが言ったんだ。瑞香をつれてきてビビらせてやろうって」
「とんでもないですね」僕は呆れたが、いかにも子供がやりそうなことではある。
「俺の友達がその廃屋の二階に待機していてな、瑞香が来たら床をドンドンぶったたく計画だったんだ」
「どうなったんですか？」
「ああ。俺が瑞香を連れてきて玄関に入れた、あんまり怖がる様子もなくて少し拍子抜けするくらいだったんだ…そして計画通り床をぶったたき始めた」
「さぞ怖がったでしょうね」
「ああ。大成功だ。悲鳴が聞こえてきたから、連れて帰ろうとした

んだよ、だがな、玄関のドアが開かなかったんだ」
「そんな」
「俺たちも玄関にこだわらず他の窓から助けに行けば良かったんだけど、焦ってしまってな…しばらくして玄関をこじ開けたんだが、とにかく泣き声とも悲鳴ともいえない声をあげていたよ」
「怪我とかは無かったんですか？」
「かすり傷ひとつなかったよ…でも、あれがトラウマになったのは間違いないんだ。俺はとんでもないことをしてしまった」うっすら涙を浮かべている。
「その話は筆ヶ崎さんにも話したんですよね？」
「ああ、何度も言って聞かせたさ、でもあいつは“そんな記憶ない”“ウソつかないでよ”って言うんだ。そのうち、あの廃屋で“残忍な殺人事件が起きた”なんていうデマがわいてきて、そのころにはあいつの心霊恐怖症も本格化して…連れて行って思い出させようとしたけど、行くのを嫌がって、もうそれっきりなんだ」
「どうしてそんな嫌なところに連れて行って、思い出させようなんてしたんですか？」
「過去の嫌な体験をきちんと本人に認識させ、それはもう終わったことだと分からせればトラウマはなくなるっていう心理療法があるんだ」
「筆ヶ崎さんの中ではまだ、廃屋での体験が終わっていないというのですか？」
「そうだ。いまなお絶賛進行中なんだよ。だから、あの廃屋に似た環境に行くと記憶が混乱して、まさにあの廃屋での体験が再現されるんだ。これをフラッシュバックって言うみたいだけどね」
「おおまかな話はわかりました。でもなんでそんなことを僕に話すんですか？」
「えっ！　君は瑞香の彼氏だろ？」何を言っているんだこの人は。
「違いますよ。ただの…ボーイフレンドですよ」実際はボーイフレンドかどうかもわからない。

「なんだぁ。ただの友達なのか。はぁ。彼氏だったら愛の力で瑞香をあの廃屋につれていってくれるだろうに」
「まだあるんですか！！　その廃屋！！」店内に響くぐらいに叫んでいた。
「びっくりしたな。ああ、あるよ」
「取り壊されないうちになんとかしなきゃ！」
「そーなんだよ、焦ってるんだよ」
「僕が、できることは、今はあまりないですけれども…きっとなんとかしてみます」言ってしまった。
「実は、僕は筆ヶ崎さんとある約束をしたんです」
「へえ、どんな」
“もし、お化け屋敷が成功したら、一つだけ聞いてほしいことがある”と、言いました。その時は、告白をしようと思ったんです」
「おお。おとこだねぇ」しかし、この人はホントに悪いと思っているのだろうか？
「でも告白は正直自信がありません。その代わり、その廃屋での出来事をもう一度僕の口から言ってみます。こう言うと失礼かもしれませんけれど、墨也さんの口振りはなんとなく軽いんですよ。ホントに真剣に筆ヶ崎さんに言い聞かせたんですか？」
「いやぁ、そう言われると自信ないね…でも確かに、君が真剣に言ったら聞く耳を持つだろう。期待してるぞ…よし、それじゃあ…連絡先の交換だ。ケータイ持ってるだろ？　廃屋の住所とか写真とか送るよ。それに瑞香の寝顔もなあ」
「冗談やめてくださいよ」とは言ったものの最後のやつはかなり欲しい。

「じゃあな」筆ヶ崎さんの兄さんとわかれ、しばらく夜道を歩いていると、何か湧きあがるようなものを感じた。ほんの数時間前、彼

女の力になりたいと思っていてもその方法が分からなかった。でも今は、糸口が見つかった。
「打倒はいおくーっ！！」僕は叫んだ。でもその前にお化け屋敷を大成功させなければならない。ひとまずの目標は、あまりやる気のないウチのクラスの士気を高めることだろうか？
いずれにしても、後戻りはできない。戦に出る前の侍は今の僕のような高揚感を覚えたのかもしれない。なんとなくそんな気がした。

１４話「新たな決意」（後書き）

どうでしたでしょうか。

ぜひ、この作品に関わっている方の作品も、

ご覧になってみてください。

１５話「近づく本番。近づく本番。」（前書き）

この作品は、以下の４名の作者によるリレー小説です。

水馬、ｙａｓｕ１９８０、チョコメロン、姫井星光

１５話の執筆者：チョコメロン

（敬称略）

15話「近づく本番。近づく本番。」

家に帰る途中何を思ったかは分からないが、僕はいつもと違う道を歩いていた。
「お客さん大丈夫？　飲みすぎじゃない？」
小さい屋台から声が聞こえてくる。どうやら客が酔いつぶれているらしい。店長さんはどうやら結構心配してるようだ。声からしてもそのお客さんが結構酔ってるのが分かる。
「らぁいじょうふ、らいじょうふ。いらとなったら弟呼ぶんだぁぁん」
弟君ドンマイだね、僕も迷惑な姉を持ってるからよく分かるよ、君の気持。今ならシンクロ率二百パーセント越えも夢じゃないかもしれない。
「しかしお客さん、今日は飲むね～。何かあったのかい？」
「うるひゃい！　からひにふられてなぁんきゃ、にゃいんだぁろぉ」
ん？　意外と僕の姉ちゃんと一緒だな。確か姉ちゃんも彼氏に振られたとか何とかで昨日は、ある意味変だった。まぁ世界は広いし僕と同じような事が起きていることだってありえるけど、まさかこの町にも同じような人がいるとは思わなかった。
「これで十杯目だよ。お客さん若いからって無理は禁物だよ、そろそろ切り上げたらどうだい？」
「ん～目の前がギュルギュルだぁぁ」
「こりゃだめだ。お客さん弟さんの電話番号は？」
「よぉとまてら」
ある程度予想はついてくる。そうここで鳴るのは僕の携帯だ。
「おや、近くから音が聞こえるねぇ」
一応携帯に出る。
「もしもし？　姉ちゃん何やってんの」
「むきゃぁあー」

もはや日本語にすらなってない。これはもう行った方がいいであろう。これ以上店の人に迷惑かけるのは悪いし、津久江家の名を汚すのもごめんだ。もう汚れてると言われれば反論はできないけど。

「こんばんはー。姉ちゃん飲み過ぎでしょ」

「坊ちゃんが弟さん？」「えぇ、本当にすいませんうちの姉が迷惑をかけまして」

最近姉ちゃんはよく泥酔して帰ってくる。最近と言ってもここ二日間だけど、今までにこんなに荒れ果てた姉ちゃんを見たことはない。もう成人になり親の手を借りなくても十分生きていけるようになり、自分で何もかも決められる年齢になったと言えばなった。責任もほとんど自分が取らないといけないようにもなるけど、僕が姉と接してきたこの十七年間。正直いつでも家を出て行くことは可能だった、親は親で盛り上がっているみたいだし、おそらく姉ちゃんが二十歳を過ぎてもこの家に残っているのは僕の事が心配だからだろう。姉としての品格や社会の厳しさその他もろもろのプレッシャーに押しつぶされたとも考えにくい。

「いやぁあんたの姉さん。最近どっと変わったね」

「最近ってことは結構前から、よくここに来ていたんですか？」

「結構というかほぼ毎日だね。バイトかな？　その上司の愚痴や友人関係家族のこととかね、悪いけど結構聞かしてもらった。あぁ大丈夫信用してくれ、おっさんはそう簡単に他人の家の事情とかを他には話さないから」

「最近っていつ頃なんですか？」

「そうだね、ここ一週間…いやもうちょっと前からだったかな？前まではちょこっと話して、終わっていたんだけどね、話す量が増えてきたり、異様にお酒を飲んでたり。最初は特に気にしなかったよ、よくあることだからね。人を見てるとそれは分かる。だけどこれだけは分かる、あんたの姉ちゃんここ一週間で何かが変わったね」

ここ一週間？　二日間じゃないのか？

「弟さんだから話すけど、あんたの姉さん結構努力しているんだよ。

大学通いながら、三つのバイトを掛け持ちしているとかって言ってたけどね、実際はもっとしてるんだよ。ただの屋台のおっさんの勘だけどね。前に言ってたなぁ。家は私が責任を持つんだって、弟がちゃぁんとしっかり一人立ちするまでは苦労の無い生活を送らせるって。ホントしっかりしてるよ、あんたの姉さんは、縁の下の力持ちだねぇ。しっかし最近はどうしたんだろうね。それはおっさんには分からないなぁ」

姉ちゃんがそんなことを…バイトは自分のためとか言いながら家族のために、僕達のために…それなのに全然気づかなかった僕はどうなんだろう。一番とはいえないけど、姉ちゃんと接する時間は多かった。だけどつらそうな姿は一切見せず明るく笑ってるイメージが強かった。それは自分の心情を抑え、そして相手の事を最優先させる姉ちゃんの姿だったのだろうか、本当の自分は人の何倍も努力し苦労して今まで生きてきたんだろうか。

「姉ちゃん・・・」

ただ、僕は姉ちゃんではない。だから本当の姉ちゃんなんて大体しか分からないし、いつどこで無理をしてるかなんてさらに分かるわけがない。

「そう言えば弟君の学校ってもうすぐ文化祭なんだって？」

「はい、どうしてそれを？」

「酔い潰れが言ってたよ。何をするかは知らないけど弟は頑張ってるっていってたね。恋愛のほうもなんとかかんとか、姉ちゃんはひねくれたこと言ってるけど実は一番応援してるんだよ。こんなに酔い潰れてるけど、姉ちゃんを嫌いにはならないでほしいなぁ」

屋台のおじさんは、お皿などを片づけながら姉ちゃんの事を話してくる。姉ちゃんはぶつぶついってるけど実は心配性だとか、大雑把に見えて実は几帳面だとか。

「さぁて、店のしまいも済んだことだし。帰るとするかね弟君」

「あ、お金のほうは？」

「いやいやいや。前払いしてもらってるから安心して帰りな、おっ

と姉ちゃんを落とすなよ」
「それは分かってますよ。本当にすいませんでした」
屋台のおじさんは笑いながら、気をつけてなー、と言葉を残し僕とは反対方向に歩いていった。
姉ちゃんを担ぎながら、ひと気のない道路を歩く。時間帯が時間帯だから道は暗くて、月の光が地面をぼんやりと照らしてる。重いとか考えるよりまえに、また頭がむしゃくしゃしてきた。透が告白してきたときと同じような感じで、いろいろと考えた。そう簡単に答えが出ないのは分かっていたけど、家に着くまで頭の中は何とも表現しにくいものでいっぱいだった。
「姉ちゃん家に着いたよ」
「うぉーんー」
今気づいたけど、息酒クサッ！！
そして肩のところに化粧ついてるし！
「起きろって。起きなさいってば」
「うーんうーん」
とりあえずリビングのソファに姉ちゃんを下ろして、化粧を落とす。さすがに風呂に入らせるのは、いくら姉弟だからといっても禁忌なので部屋に運ぶことにした。
「階段キッツ」
流石に階段はきつかった、手すりがなかったら確実に後ろに転落してた。バリアフリーありがたやー。
「よっこいしょっと」
ベットに姉を下ろし布団をかける、気持ちいいのか薄らと笑顔になり、寝返りをうつ。安心したのかどうなのか分からないが、自分もどっと疲れた。学校に走っていき、筆ヶ崎さんの家に行き、その後姉ちゃんを運び脚はガクガクである。お風呂に入り、簡単な晩御飯を済ませ僕も寝るとしよう。

「うをぉぉぉぉぉぉ」
「！？」
朝の目覚めは姉の叫び声だった。何とも最悪な目覚めである。
「姉ちゃんどうした？」
ドアを開けると枕が飛んできて、顔面直撃。
「神聖なる乙女の部屋に確認もなしに入るな！　ウッ」
口元を押さえ一階に走る。おそらく二日酔いの効果が来ているのだろう。
「大丈夫か？」
「この顔を見て大丈夫と言えるお前の神経が欲しいよ」
頭を押さえながら顔は青くなっている。しかし残念ながら今日も大学はあるし、いつも通りバイトもあるらしい。
「はい、これ薬」
「おー流石弟、そういう気遣いは女の子に高評価だ。これからこころがげろろろろ」
「吐くなよ！」
「すまん。昨日は飲みすぎた…いかん記憶がない…犯されたかも」
「朝っぱらから元気だな」
二日酔いでもほとんど変態さは変わらない姉であった。
「あんまり無理して食うと、またリバースするぞ」
「承知の上だ」
「承知してんのかよ」
ご飯と味噌汁、サケと漬物というヘルシーチョイスで朝ごはんを済ませた姉は、そのまま風呂に入るらしい。覗くなよと忠告を残し下着を持って風呂場に向かう。

自分はというと後片付けをして、学校に出発する準備を整える。今日は珍しく姉ちゃんよりも早く家を出る。
「姉ちゃん、行ってきまーす」
「その大声は二日酔いに対するイジメか。訴えるぞ。いってらっしゃい」
なんだかんだでしっかり挨拶を交わし、僕は学校に向かう。少し早く家を出過ぎたかもしれない、なんというかこんなに朝早く家を出るのは久しぶりのような気がする。
「あ、ふ、筆ヶ崎さん」
僕の目線の先には筆ヶ崎さんの姿が。どうやら筆ヶ崎さんも僕のことに気付いたみたいでにっこりと笑ってきた、その笑顔が今日の生きる活力になります。ありがとうございます。
「あら早いわね」
「ちょっとね」
朝から筆ヶ崎さんに出会い、テンションが上がりだした僕だった。
「そう、昨日はホントごめんなさい、お兄ちゃんから聞いたんだけど私って勝手に寝てたみたいで」
「昨日は忙しかったからね、仕方ないと思うよ。それで申請用紙は？」
「しっかりと持ってきてるわ」鞄の一番前の部分にそれは入っていた。なんとまぁ、しわが見当たらないぐらい丁寧にそこにあった。おそらく筆ヶ崎さんの事だから、書きもらしはないと思うけど一つ心残りなのがある。
「あとは、クラスのみんながまとまってくれるといいんだけど」
筆ヶ崎さんも僕と同じ悩みを持っているようだ。僕達実行委員は確かにやる気はある、おそらく誰よりもある。しかしそれは僕達、たった二人の話であり、クラス全体の話ではないのだ。僕らを除いた三十八名のみんながやる気はないとは言えないけど、それでも半分ぐらいの人はやる気がないのではないだろうか。
「そうだね。やる気の問題は結構重要だし」

「私達が突っ走りすぎるのも、あまり得策とは言えないわ。かといってやる気のない人に歩幅を合わせると、話は進まないし」
しかも追い打ちをかけるようなことを言うと、今回の文化祭の出し物である『お化け屋敷』はみんなと話し合って決めたものではない。みんなからしてみれば勝手に決めて、じゃあこれやって。という何ともやる気の出ない決め方だったのではないだろうか。
実際みんなの前で話すと、多少の反論が出たわけで……
学校に到着するまでの間、二人して文化祭のことで頭を悩ませていた。
学校に到着するなり筆ヶ崎さんは職員室に走っていく。申請用紙を渡しに行ったのだろう。
「本当にどうすればいいのかな」
午前中の授業は何とも手につかなかった、というより完全に違うことを考えていて頭にすら入らなかった。

そして昼休み、僕に話しかけてくる人がいた。
「おい実行委員さん。俺達はホントにお化け屋敷やるのか？」
声をかけてきたのは当番（あたばん）。クラスのリーダー的な存在で、みんなからも信頼は厚い。こんなにみんなを指揮する力があるなら、どうして学級委員とかにならないのだろう。事実、彼は現学級委員よりもみんなを引き連れる力を持っている。
「そのつもりだけど」
「準備とかはしなくてもいいのか？　お前達が俺達に言ったのは一回だけだし、しかも、お化け屋敷やりますとしか言ってなかったから、俺としても少し不安になってね。いや、そこらへんしっかりしてるならいいんだけど」
文化祭の本格的準備は、文化祭当日の二日前から始まる。今から数えて二週間後、時間にしてはまだまだあるけど、時の流れは早い。

そろそろみんなに詳細を発表しないと、駄目な気もしてきた。
当くんに指摘されて気づいた。
「今日の放課後にでもみんなに報告するよ」
「あぁ、期待してるぞ」
当くんは笑顔で僕から離れて行った。その後、僕は筆ヶ崎さんと昼休みを丸々使ってみんなに伝えることにした。
そして放課後――――。

「みんなちょっと話を聞いてくれないかな」
教壇に上り、みんなに話しかける。クラスのみんなはざわめきながら自分の席に着く。できるだけ手短に話さないとみんなも部活とかで忙しいだろうし。
「いよ！　実行委員！　待ってました」
さすが当くん。クラスのみんなの視線を正面に向ける。
「僕たち実行委員はいろいろと話し合った結果、前にも言ったけど、催し物はお化け屋敷になりました」
そこで筆ヶ崎さんがプリントを配る。
「そのプリントには、お化け屋敷のことがほとんど書いてます。皆さんには悪いですけど、勝手に役割を決めさせてもらいました。もちろんお化け役が嫌だとか、準備役が嫌だとかそういうのがあれば申し出てもらって構いません。材料費はおそらく大丈夫です」
クラス全体にプリントがいきわたり、各々隣の人と騒ぎはじめる。
（私準備役だってー）（ちょっ、俺お化けじゃん）（俺は銅像役か・・・）
クラスが騒ぎ始めると、ある意味収集がつかなくなる。
「みなさん。できれは三日以内に、どうしても役割を変更したい人がいれば、言ってもらっていただきたいと思います」
そういうものの、中にはまだまだ反対派がちらほら見受けられる。

小さく愚痴を言う者、話を聞かず寝ている者、こういう人たちは手伝ってくれるのだろうか。
「以上実行委員からのお知らせでした」
するとみんなは部活に行ったり、その場で話しあったりなどし始める。
「結構決まっているんだな、流石実行委員というものか」
報告が終わると、当くんが話しかけてきた。
「ほとんど筆ヶ崎さんが決めてくれたんだけどね」
「まぁ実行委員が決めたことには変わらないだろ、じゃ俺はかんばって殺人鬼役をするとしよう」
そう言ってバックを持って部活に走っていく彼であった。

そして、みんなとくに役割変更を申し出る者もなく、文化祭まで残り一週間を切ったということもあり、やる気が出てきている。
当くんの根回しもあり、クラス全体は結構いい方向に向かっている。
絵がうまい人は室内の絵を書いて分かりやすくしたり、服を作る人達はアンケートを取ったり中間報告などを欠かさず、改良をどんどん加えて、さらにお化けの服装っぽくなってきたりした。
「銅像って立ってるだけだろ？　なんて簡単な役を受けてんだよ」
「銅像っだって結構大変なんだぞ、このずっと同じポーズを取るのがどれだけ大変か。それに、追いかける仕事もあるしさ」
準備役の人達は、本格的に動くわけにはいかないので、みんなと和気藹藹、話したりして場の空気を盛り上げている。
「意外とみんな乗り気になってくれたわね」
「そうだね。みんな楽しそうだし、これなら大成功も間違いなしだね」

その後も筆ヶ崎さんの家に何度かお邪魔したりして、さらに良くなるように案を練ったりして改良を加えて行った。

「ヒツよ。文化祭のほうは進んでるのか？」
「あぁ、順調だ」
「何か手伝ってやろうか？」
「いらん」
家に帰ると姉ちゃんが時々そんな話をしてくる。完全に文化祭に来る気満々らしい。どう反抗しても、逆に行きたくなるようになるだけだし。
「姉ちゃん。結構前から気になってたんだけど」
「おう、何だ？」
「姉ちゃんの起こした津久江旋風って何なの？」
「お前実の弟でありながら、姉の伝説を知らないのか！　こりゃだめだな」
箸を僕のほうに向け、話を続ける。
「例えばだな。文化祭を課題研究発表会から今のように何でもアリにした事とか、修学旅行を外国も選択できようにしたりだな。他にも部費を前年度の二倍にしたりｅｔｃ……」
何をどうすれば、そんなことが可能なんですか？
さすが姉というべきか、これをたった二年でやり遂げるのは、やっぱり流石だ。
「へ、へぇ～。すごいね」
「なに若干引いてるんだ、なぜ引く！」
あまりのすごさに、若干引いてしまった。

とりあえず、自分の姉はすごいことが改めて分かった。

「おはよう筆ヶ崎さん」
「おはよう」
「今日は早いね」
「人をいつも遅く登校してるように言わないで。だって今日は一日文化祭準備でしょ、実行委員が遅れてどうするのよ」
僕も同じである。今日は文化祭まであと二日ということで、本格的に準備段階に入る。どうやら文化祭当日の二日前から本格的準備期間を設けたのは姉だとか何とか。今日一日でどこまで進むのだろうか、一応、大体は学校にあるもので代用は利くみたいだし。これといって問題も起こりそうにない。
「津久江くん、早く行きましょう」
やはりテンションも上がるのだろうか、筆ヶ崎さんの足取りも少しばかり速くなっている。
学校に着くと僕たちよりも早く何人かのクラスメイトが準備を始めていた。先生も含め。
「おぉ津久江か、ここの設計図がよく分からんのだが」
「ここはそうだね、ここがこれぐらいだから…半分ぐらいかな？」
木材などはすでに運ばれており、切ったり組み立てたりしなければならない。おそらく今日一日はそんなことで終わりそうな気がしてくる。
部屋の約半分が木材や道具などで埋まっており、少々みんな窮屈そうだ。なにはともあれ準備のほうは順調に進んでいる。どういうわけか準備をするときは愚痴を言う人はいなくなり、興味なさそうな人はおそらく一人もいない。これが当くんの力なのだろうか。

みんなの力を借りながら、何事もなく進んでいく……。

15話「近づく本番。近づく本番。」（後書き）

どうでしたでしょうか。

ぜひ、この作品に関わっている方の作品も、

ご覧になってみてください。

１６話「文化祭の朝」（前書き）

この作品は、以下の４名の作者によるリレー小説です。

水馬、ｙａｓｕ１９８０、チョコメロン、姫井星光

１６話の執筆者：姫井星光

（敬称略）

16話「文化祭の朝」

文化祭当日の朝は、やっぱり文化祭当日の朝なわけで、それ以上でも以下でもなかった。
要は、いつにもまして慌ただしく、いつにもまして数分数秒の時間の価値が高騰するのである。

「こら銅像っ！　驚かすタイミングが早いっ！」
「え、あ、すまん……」

鬼監督のごとく、銅像役の石田君……じゃなかった。ええと、椅田（すだ）君に叱咤をかます筆ヶ崎（ふでがさき）さん。

「客が通り過た後、間を取りなさい。間を。分かった？」
「わ、わかっ……はい。分かりました」

椅田君は素直に、それはもう素直に筆ヶ崎さんに頷く。

「分かれば宜しい。……んで、次、ＢＧＭ！！　ＢＧＭの係は！？」

もう筆ヶ崎さんは次なる獲物を捉え、その矛先をキラリと光らせた。
そんな彼女とは裏腹に、僕はゴクリと生唾を呑んで……、腹を括った。

「あ、あの筆ヶ崎さん。ごめん……。ＢＧＭ、僕です」

ごめんなさい。筆ヶ崎さん。本当に、ごめんなさい。
本当に本当にごめんなさい。

「津久江君っ！　何で、ジェイソン出現時のＢＧＭが陽気な洋楽になってんのよ！」

本番を見据えたデモンストレーションでも、やはり緊張はするもので、誤ってラジカセの中身を違えることもあり得ることであって、その、あの……

「ごめん。ミスった。本番は絶対こんなことにはならないから」

いわゆる見苦しい言い訳が喉から出かかったのだけれど、僕はそれを喉の奥に押し込んで、ただただ、謝った。腰を九〇度くらい折った、それはもう見事なお辞儀が完成していた。

「ったく……。もう二時間なのよ。二時間！　最後の調整で、これはないわ」

「皆、緊張してるんだよ。でも、きっと大丈夫だって。上手くいくさ」

「……何が大丈夫なのよ？　津久江君。本番でこんな醜態、絶対許されないのよ？」

うわぁ。

筆ヶ崎さんアレだな。多分、本番に弱いタイプだ。極度に緊張してしまうと、いつにもましてツンケンしちゃったり、怒りっぽくなっちゃったりするのだろう。

「もう少し肩の力抜いた方が良いって。らしくないよ？　筆ヶ崎さん」

「う、うっさいわね！　そんなこと言われなくたって……私はいつも通りよっ！」

フン、と鼻を鳴らしてそっぽを向く筆ヶ崎さん。

「ともかく。二時間きちんと調整するのよ。特に、驚かす役の人達。全てはあなた達にかかっているんだから」

彼女はそう吐き捨てて、ムードが良い感じに出るように装飾された美術室を後にした。

「……ふ、筆ヶ崎さん？」

そそくさと、美術室から逃げるように出ていく筆ヶ崎さん。どことなく、その足取りにはおぼつきがない。

「あ～あ。ありゃ、かなり上がってるな」

「うん……」

僕の肩に手を置いたのは、アイスホッケーの面を被ったままの当君である。赤いラインと、みすぼらしさを施されたその面は、中々本格的にとある日の金曜日を演出している。

「俺が練習まとめあげるからさ、ちょっと行ってこいよ」

そう言って当君は顎をしゃくった。無論、彼の視線の先は筆ヶ崎さんが出ていった方向だ。

「それじゃあ、頼むよ」

「おお。行ってこい」

「どこに行ったかと思ったら、ここにいたんだ」
ストレートに自教室に帰ってみれば、そこには筆ヶ崎さんの姿があった。
「津久江君……」
僕らの元の教室は取りあえずは控室兼荷物置き場ということになっている。皆は美術室や美術準備室に詰めているため、教室には筆ヶ崎さん以外には誰の姿もなかった。
「大丈夫だって。必ず、成功するよ。何も心配することはないさ」
「……もし、お客さんにつまらない思いをさせて失望させてしまったときのことを考えると、私……」
細い溜息を吐いてから、筆ヶ崎さんは窓の方へと身体を向けた。僕もそちらの方へ視線をやる。
窓から見下ろせるグラウンドは、文化祭ということもあって臨時の大駐車場と姿を変えている。まだ文化祭スタートまで二時間あまりも時間があるので、まだ車は全然止まっていない。
そんな、ほとんどまっさらなグラウンドを見て僕がホッとしてしまったのは、僕自身も筆ヶ崎さんみたく緊張しているからだろう。
緊張感を持てている自分に、安心してしまう。
「つまらないわけないじゃないか。だって、ホラー大好きの筆ヶ崎さんが考えたんだ。全国の……あ、いや、全校の……、いいや、違うな、ええっと、ともかく！　今日ここを訪れるホラー好きの心を

鷲掴みに出来るはずさ！」

これだけははっきりと言える。

「……でも、それだっておかしな話よね。ホラー大好き少女が、リアルホラー現象に超臆病だなんて」

「いや、でもそれは仕方ない話じゃんか。僕聞いたよ。廃屋でのこと」

「え？」

「え、あ、いや……」

そうだ。筆ヶ崎さんは廃屋での一件について、全く覚えていないのだった。

「何のことって？」

「いや、誰にだって苦手なものはあるじゃないか。だから、そう気負うことはないって、……そう言いたかっただけだよ」

「……そういう風には聞こえなかったけれど。まあ、そうね。いつまでも気負っててもしかたないわよね……」

どうやら、何とか誤魔化せたらしい。

でも、筆ヶ崎さんが自信の心霊恐怖症についての真実を知らないということは、あまりよろしいことではない。克服と同時に、全てを知るべきなのだ。

「筆ヶ崎さん。きっと、全部大丈夫だよ」

「え？」

「筆ヶ崎さんの心霊恐怖症も、今日の文化祭も、全部――大丈夫。何とかなる。ていうか、何とかする。僕が、何とかしてみせる」

「……」

僕のそんな臭いセリフに、きょとんと首を傾げる筆ヶ崎さん。僕は恥ずかしくも、何とか目を逸らさないで筆ヶ崎さんの視線に、視線で答える。

僕がついているじゃないか、筆ヶ崎さん――

そして、彼女はしばらく僕を見つめた後、

「分かってる」

と、とても小さな――強風の中であったならば溶けてしまいそうなくらい小さな声で言った。

「さ、美術室にもどりましょうか。悪かったわ、手間かけさせて」

「いや、気にしなくて……いいよ」

呆然と立ち尽くす僕を傍目に、筆ヶ崎さんは颯爽（さっそう）と教室の出入り戸へ歩いた。

「ほら、何ぼさっとしているの？　置いて、行くわよ」

こちらを振り返って、強かな表情を見せる筆ヶ崎さん。

「……あ、ああ。うん。行こう」

今の彼女の一言は、一体――

僕はその意味を呑みこめないまま、頷いて彼女の背中につく。

でも、確信した。

今から二時間後――いや、明日の「文化祭終了」の校内アナウンスのとき、筆ヶ崎さんの顔は、きっと――

きっと、あの奥条（おくじょう）さんに負けず劣らないくらいに眩しい笑顔のはずだ、と。

１６話「文化祭の朝」（後書き）

どうでしたでしょうか。

ぜひ、この作品に関わっている方の作品も、

ご覧になってみてください。

１７話「僕らのお化け屋敷」（前書き）

この作品は、以下の４名の作者によるリレー小説です。

水馬、ｙａｓｕ１９８０、チョコメロン、姫井星光

１７話の執筆者：水馬

（敬称略）

17話「僕らのお化け屋敷」

『これより、鉛筆ヶ浜高校文化祭、一日目を開始します』

文化祭開始を宣言する校内放送が流れた。

隣の教室からは歓喜の声が上がっていたが、美術室前に待機しているみんなは誰一人喋らず、受付の前に立っている僕と筆ヶ崎さんをじっと見ていた。

「実行委員！　景気付けになにか言ってくれよ」

僕と筆ヶ崎さんを煽てる当くん。

僕は筆ヶ崎さんとアイコンタクトをとり、僕が先に言うことになった。

「えぇと……ここまで、やるだけのことはしてきたし、あとは、みんな緊張せずに楽しんでやっていきましょう！」

「みんな、拍手！　次は筆ヶ崎だ」

御手洗先生の拍手に乗るようにして、みんながぱちぱちぱちと拍手をしてくれ。

個人的にはもう少し、士気の上がるような言葉を言えれば良かったんだけど――。

「失敗したら許さないわよ」

「……え」

筆ヶ崎さんの言葉に、みんな驚いたらしく、一瞬だけ廊下が静寂

に包まれた。
もう今の言葉、明らかに“脅し”にしか聞こえなかった。
それでも、みんなは拍手をし、ついに二年三組の催し物“お化け屋敷”が始まることとなった。

文化祭開始時刻の十時から二時間経ち、お化け屋敷にもそれなりに人が訪れていた。
それに、出口から出てきた人たちは、口々に『最後はヤバかった』とか『ジェイソン、リアルすぎた』などの感想を述べており、結構好評なのかもしれない。
いや、好評でなければならない。
僕と筆ヶ崎さん、そして、クラスみんなで作り上げたお化け屋敷だ。
怖い物好きの人には楽しんでもらい、苦手な人にはとても怖がっていただきたい。

「こちらがパンフレットです。注意事項は守ってください。それでは、どうぞ、お入りください」

受付を担当しているクラスの女子は、丁寧な対応で客を教室へ進ませた。
ちなみに、僕と筆ヶ崎さんはただ傍観している暇な人というわけではない。
出口から出てくる人たちが、口々に言う感想を（盗み）聞き、それをすぐに活かせるようにするため。
そして、トラブルを解決するために、会場前の廊下で待機しているのだ。

「筆ヶ崎さん、悲鳴とか叫び声、結構聞こえてくるし、いい感じだね」
「そうね、まずまずかしら。あとは、大行列が出来るほど人気が出てくれれば問題なしね」

今のところ、お化け屋敷へはほとんど待たずに入ることが出来る。
まぁ、開始二時間であり、初日ということもあり、賑わいを見せるのは午後か、明日だろうと思われる。

「十二時半で、午前班と午後班の人たちは交替だよね？」
「うん、あと二十分で交替よ」

どことなく嬉しそうな筆ヶ崎さん。
きっと、お化け屋敷を実現することが出来て、内心、喜んでいるのだろう。
こうやって、微笑んでいる筆ヶ崎さんを見ていられる僕は、なんて幸せ者なのだろうか。
僕の他に、筆ヶ崎さんのことが好きな人から見たら、それはとても悔しいはずだ。

「そろそろお昼か。どうりでお腹が減って――――」
「よぉ、日月」
「あ、透（とおる）」

僕と筆ヶ崎さんの会話に割って入るようにして現れたのは、透だった。
透も、僕と同じで、筆ヶ崎さんのことが好きだ。
僕と透は、親友だけど恋の敵だ。

「日月、昼ご飯ってもう食べたのか？」
「いや、まだだけど――――」
「じゃあ、これ食えよ」

僕の言葉を遮って、透は厚紙の容器に入った唐揚を差し出した。
受け取ると、容器はまだ熱く、きっと揚げたての唐揚なのだろう。

「貰っていいのか？」
「あぁ、気にしないで食べてくれ。お金だって払わなくていいからな、親友なんだしさ」
「おぉ、ありがとう、透！　それじゃ、いただきます」

僕は、唐揚に刺さった爪楊枝（つまようじ）を指先で掴み、熱々の唐揚を口の中に放りいれる。
揚げ立てで柔らかい鶏肉。
溢れだす肉汁が口の中いっぱいに広がっていく。

「う～ん、美味しいなぁ……ん？」

僕は、ふと隣に目をやると、

「筆ヶ崎、ちょっとでいいから、俺と一緒に文化祭まわらない？」
「それって、デートの誘い？」
「いやいや、ただ、筆ヶ崎もお昼ご飯食べていないだろうからさ。よければ、一緒にどうかなぁ、と思って誘っているんだけど」
「私も、暇人みたいにここに突っ立っているわけじゃないから……そうね、私たちのクラスの催し物“お化け屋敷”に入って、叫び声一つ上げずに出られたら、付き合ってもいいわ」

え！？

ちょっと、何事？
僕が、美味しい唐揚を食べている合間に、透が筆ヶ崎さんにデートの誘い！？

「……はっ！？」

そうか……この唐揚は、僕を筆ヶ崎さんから引き離すための、透の作戦だったのか！
くっ、まんまと、してやられたというわけか。

「お、お化け屋敷か。いいよ、入ろうよ、筆ヶ崎」
「えぇ、いいわよ」

ちょうど、時間帯がお昼時ということもあり、人の並んでいた列はなく、二人はすぐにお化け屋敷へ入っていった。

「ど、どうしよう……」

透が叫び声をあげれば、筆ヶ崎さんとデート。
叫ばなければ、無事に筆ヶ崎さんは僕の隣へ戻ってくる。

「追うか……？」

独り言をぶつぶつ呟いている僕は、傍から見れば、ちょっと危ない人かもしれない。
しかし、独り言を呟くほど、透の作戦が僕に与えた動揺は大きいというわけだ。

「ちょっと、入るよ」

僕は、考えるより先に動き、受付の女子に話しかけていた。

「いいよ。そうだ、津久江くん。試しにお客さんとして入ってみない？」

「え、客として……？」

「うん、あたしも後で友達と入る予定だけど、自分たちが作ったものが、どれだけ怖いのか見てみたいでしょ？」

あぁ、確かにそれは見てみたい気もする。

二年三組全員は作り手側だから、客としての感覚がない。

そのため、どれだけ怖いのかを体験をしていないのだ。

準備段階で、お化け役の演技は見ていたが、本番ともなれば、みんな本気以上で脅かしてくるだろうし。

そうなると、これは一度入ってみる価値はある。

「それじゃ、客として入るよ」

「一名様、っと」

入場者数をメモする用紙の“正”の字に一画書き加えた受付女子。

そのあと、パンフレットを一枚、僕に渡してきた。

「少し待ってね。筆ヶ崎さんと男子が入っていったからさ」

僕は、パンフレットを見ながら、合図があるのを待つ。

この合図というのは、先に入った客が一定のポイントを通過したときに、教室内にいる生徒からトランシーバーでくる連絡のことだ。

これにより、感覚を空けて客を入れ、中でごった返すことがないようにしている。

「あ、合図来たから入っていいわよ」

「うん」

僕は、大きく深呼吸をし、廊下の美術室周りに施された装飾を見る。

黒のベニヤ板に『最叫(さいきょう)の？お化け屋敷』という文字が血――――ではなく、赤いペンキで書かれており、周囲にはコウモリや幽霊など、リアルな絵が描かれている。

名前を『最叫の“？”』にした理由は、元々考えていた武道場を使ったお化け屋敷が最叫だったのだが、今の美術室になってしまい、少々怖さが軽減してしまったために、“？”を付け加えたのだ。

ガラッ。

僕は、そんな名前の由来を思い出しつつ、小窓の部分を暗幕で塞がれた戸を開けた。

窓ガラスは全て、暗幕で覆われ、左手側にはダンボールやベニヤ板の壁。

足元には何も置かず、足場を悪くしないようにしている。

上には作り物のカラスやコウモリが天井から吊り下げられている。

教室内は完全な闇ではなく、薄暗い程度。

例えを挙げるなら、家で灯りの段階を下げ、豆電球だけの状態にした感じ。

使用している豆電球の数は忘れてしまったが、これは理科室で使っていなかった豆電球をこちらにまわしてもらった。

「えっと、この先は銅像……椅田(いすだ)くんだな」

入口から真っ直ぐある道を進み、僕は不気味な像の前で止まった。

道にややはみ出るようにして置かれている不気味像。

東大寺にある金剛力士の像のような鬼のような形相をし、胴体部

分は人体模型のような内臓剥き出しという、とても不気味すぎる像だ。
ちなみに、頭部を作ったのは美術部員に所属するクラスメイト。
胴体部分は模型作りが得意という僕の旧友の力を借りた。

「……」

ここで、『椅田くん、もうすぐ交替だから頑張れ』なんて言葉をかけたりしたら、きっと彼のやる気を削いでしまうだろうから、僕はそのまま客を装って通り過ぎることに――――。

「ウオォォオっ！！」
「うおあ！」

僕は思わず叫び声を上げてしまった。
デモンストレーションでは、筆ヶ崎さんから『間を取りなさい』と言われていたのに、いくらなんでも、今のは早すぎないか？
ほとんど、目の前で驚かされたぞ。

「お、よく見てみれば、津久江じゃないか」
「椅田くん、僕のこと見えるの？」
「そりゃ、ここに結構長くいるからね。だいぶ、暗闇にも慣れたよ」

不気味像と会話する僕。きっと、とても変な画に見えるんだろうな。

「今の、早すぎない？」
「そう？　オレ、かなりアレンジしているんだけどな。驚かすタイミングを個々に変えたりしてさ」
「ほぉ、それはやるねぇ」

「例えば、今の津久江みたいにじっと見てきたら、すぐに驚かすとかね」

なるほど。

ただ、同じことをして驚かすだけではなく、アレンジを加えながらやっていくというのは、結構いいことかもしれない。

「それじゃ、僕、先に進むよ」

「あぁ、ごゆっくり～」

椅田くんはそう言うと、ぴたりと動かなくなった。

これを初めて見た人は、きっと本当にただの像だと思うだろう。

そんなことを考えつつ、僕は先へ進む。

パンフレットには地図や注意事項などが書かれており、僕は、入口から真っ直ぐ進んだ道の突き当りで止まった。

すると、パッ！と、僕の立っている部分だけ、真上からスポットライトのように灯りで照らされた。

「うん、これはさすがに驚かないな」

ライトの点灯と同時に、僕が目の前に現れた――――わけはなく、僕が姿見に映っていただけだ。

怖さレベルを勝手につけるとすれば、これは1だろう。

ちなみに、先程の不気味像は2ぐらいかな。

怖さよりも不気味さの方が勝っているといる気がする。

「えぇと……次は」

僕は、真っ直ぐな道の突き当りを左に曲がって、再び真っ直ぐな

道を進む。
先程よりも広い道。
ここは、反対側から歩いてくる女幽霊とすれ違うところだ。
僕は、ここもあまり驚かないだろうと思い、歩いていく。

「あ、来たな……」

物陰から姿を現した女幽霊。
ぼろぼろで、ところどころに血（赤ペンキ）が付いた布を纏い、乱れた髪に、雪のような色白の肌。
肌の色や口紅など、死者のような雰囲気を出すために化粧を施している。ちなみに、本人曰く髪の乱れは寝癖らしい。

「……」

すれ違う僕と女幽霊。
そのとき――――。

「……シネバイイノニ」

高音で抑揚のない小さな声。
それが、すれ違いざまに僕の耳へ入ってきた。
すれ違いざまに女幽霊が何かを呟くということは知っていたのだが、まさかここまでとは……。
今の僕は、全身鳥肌が立っており、不気味像の怖さとは一味違う怖さだ。
不気味像が洋モノホラーだとすると、こっちは和モノホラーだろう。
そんなことを思っていると、ドリームランドのお化け屋敷へ、筆ヶ崎さんと二人で行った思い出が、ふつふつと蘇ってくる。

すれ違い女幽霊、じわじわくる怖さレベル3くらいだろう。

「う、うおわぁっ！！」

突然、誰かの叫び声が聞こえた。

男の声だとは思うが、まさか、透！？

とすると、筆ヶ崎さんと透のデートはなし？

「よし……」

僕は、小さくガッツポーズをし、先へ行く。

この高まってきたテンションで、一気にお化け屋敷を駆け抜けてやる！

今の僕には、お化け屋敷なんて怖くない。

「……えっと、次は『腕どばぁっ！』か」

腕どばぁっ！とは、両脇の壁に開いた穴から、腕が数本出てくるというだけのイベント――だった、デモンストレーションでは。

なんと、腕が動いているだけではなく、壁の向こうから呻(うめ)き声が聞こえると言うサービス？まで、仕掛け役の人はやってくれていた。

先程の女幽霊や不気味像など、みんな、それぞれが同じことを繰り返すのではなく、驚かし方をアレンジしているようだ。

これは、朝の筆ヶ崎さんの一言による効果なのか、それとも、各々が自然にやっていることなのかは分からないが、どちらにせよ、お化け屋敷が面白いものになっているのは間違いない。

「この道を抜けると、分かれ道か……」

腕どばぁっ！の道を進み終え、左に曲がると、前に進む道か、左へ行く分かれ道となっている。
ちなみに、左へ進むのがゴールへの正しい道。
真っ直ぐ進んだ先には、幽霊がいるので、通れずに引き返すことになる。
僕は、前の道の先に立っている幽霊に向かって、大きく手を振ってみた。

「……」

しかし、手を振り返してはくれない。
もしかしたら幽霊という役に徹しているのか、それとも、この薄暗い中で僕が見えていないのかもしれない。
僕は気にせず、正規の道を選択し、進んでいく。

正規の道も真っ直ぐ続いている。
先程から真っ直ぐな道が多く続いているが、武道場であれ、美術室であれ、どちらを使う場合でも、このような単純な通路構成になっている。

「突き当りには、当(あたり)くんのジェイソンか……」

薄暗さに慣れ始めた僕の目は進むにつれて、巨体を、チェンソーを、アイスホッケーのマスクを次第に見分けていった。
そこまで行くと、ブィィィン！というチェンソー音とＢＧＭが流れた。
これは、チェンソー男役の当(あたり)くんの奥に、死角で見えない小スペースがある。
その部分には、掃除機とラジカセを操作する役割の人がおり、掃除機の電源のオン、オフを繰り返すことによって、チェンソーの音

を再現しようというわけだ。
ちなみに、当くんが持っているのは、本物ではなく作り物のチェンソー。
近くで見ても良く出来ている作りだ。

僕は当くんを尻目に、近くにある脇道へ入っていく。
すると、ブィィィン！　ブィィィン！！という音が連続で鳴り、当くんが僕に迫ってきた。
速く歩いて接近してくる。
さすがに、これは圧迫感、威圧感のようなものを感じる。
“作り物”だと分かっているが、悠々と歩いていては真剣にやっている当くんに申し訳ないので、僕は小走りで逃げるようにして先へ進んでいく。

「よし……最後か」

最後はやや広めの道。
しかし、足元で蠢（うごめ）いたり、よろめきながら近づいてくる幽霊やゾンビが十人ほどいる。
抱きついてきたり、足にしがみつくことはしないが、気を緩めばその数に圧倒されかねない。
僕は、当くんの追跡を逃れながら、立ちはだかる幽霊やゾンビの群れを回避しつつ、出口を目指す。

ガラッ！

「う、眩しい……」

廊下のガラス窓から差し込む太陽の光が、暗闇の中にいた僕の目を眩（くら）ませる。

「あ、津久江くん。いないと思ったら中に入っていたのね」
「う、うん。せっかくだから、みんなで作ったお化け屋敷を体験しようと思ってさ」
「どうだった？」
「うん、怖かった。怖くて、楽しかったよ」

『それは私が考えたお化け屋敷だもの』と、嬉しそうに微笑みながら筆ヶ崎さんは言った。
そういえば、筆ヶ崎さんと透のデートの件はどうなったのだろうか。
聞いてみても問題ないとは思うので、聞くことにする。

「筆ヶ崎さん、透から何か誘われていたみたいだけど……」
「あぁ、あれね。彼が叫び声を上げたから、あれはナシよ」
「そうなんだぁ。ちなみに、どの辺で叫んだの？」
「最後のエリアで、私がのっぺらぼうのお面被って、驚かしてあげたわ」

あ、そういうのもありなんだ、と僕が言うと、筆ヶ崎さんは『私たちのクラスの催し物“お化け屋敷”に入って叫び声一つ上げずに出られたら、って言ったでしょ。誰も、お化け屋敷の仕掛けでとは言っていないわ』と、誇らしげに言った。
それにしても、よくのっぺらぼうのお面なんて持っていたよな、筆ヶ崎さん。
この日のために、何か用意してきたのだろうか。
まさか、客に扮して他の客を驚かす、なんて真似はしないだろうな？

「……しそうだ」

「ん、何？」
「い、いや、何でもないよ、ははは」
僕が照れ笑いでなんとか誤魔化していると、腕時計を見ていた筆ヶ崎さんは『交替の時間ね』と呟いた。
そういえば、もう十二時半を過ぎている。
そろそろ、午前班と午後班の入れ替えとなり、衣装の交換や午後の準備が始まる。
お化け屋敷の入口には“準備中”と書かれたダンボール製の看板が置いてあった。

「それじゃ、津久江くん。私、食べ物買ってくるから、みんなに指示しておいて」
「え、お昼ご飯なら僕が代わりに買ってくるよ」
「遠慮しないでいいわよ。さっきの唐揚だけじゃ足りないでしょ？私が美味しいもの買ってきてあげるから、待ってなさい」
「わ、分かったよ」

僕は仕方なく、筆ヶ崎さんを行かせた。
僕が行こうとしたのは、みんなに指示が出来ないとかではなく、頑張っている筆ヶ崎さんのために、なにか美味しいものを買ってきてあげようと思っただけなのだが。

筆ヶ崎さんが戻ってきたのは、三十分後のことだった。
午前班と午後班の交替は無事に出来、お化け屋敷午後の部も無事に始まっていた。

「結構時間かかったね」
「そうかしら」

戻ってきた筆ヶ崎さんは少々息が切れていた。
両手に持っていたクレープのうち、右手の方を『はい、これ食べて』と言って、僕に渡してきた。

「ありがとう、筆ヶ崎さん」
「そういえば、交替は無事に出来たみたいね」

僕は、うんと頷き、クレープを頬張る。
そして、もしこれが筆ヶ崎さんの手作りだったら、さらに美味しいんだろうなぁ、と思っていた。

「それ、私がトッピングしたの」
「……！？」

思わず、口の中いっぱいのクレープを吹き出してしまうところだった。
筆ヶ崎さんは構わず続ける。

「フルーツとか、クリームの種類・量とか、いろいろ選べたわ。津久江くんが甘党かは分からなかったから、適量にして、フルーツも全種類入れて貰ったわ」
「あ、ありがとう、そこまでしてもらって」
「気にしないで。津久江くんには本当に感謝しているんだから」
「え……どういうこと？」
「この話は、時間があるときにするわ。それより今は、文化祭を楽しむわよ」

そ、そうだな。
今は文化祭を楽しもう。
美術室前の廊下に、クレープを食べながら椅子に座っている僕と筆ヶ崎さん。
僕にとっては、こうして筆ヶ崎さんと一緒にいられるだけで幸せだが、文化祭が終われば、もしかしたらこの実行委員という関係も終わってしまう。
しかし、実行委員ではなく恋人という関係を始めることは可能だ。
それには告白をして、僕の想いを伝えるしか方法はない。
これは、僕史上最大のイベントだろう。
今まで生きてきて、他人に好きですと告白することなんて、一度もなかった。
いや、告白にまで至らなかったんだ、好きという想い、気持ちが。
でも、今は違う。
僕は筆ヶ崎さんのことが好きなんだ。
必ず告白する。
でも、今は告白するタイミングが分からないし、それに、好きという想いを言うべきときにしっかりと言えなければならない。
そう考えると、ちょっと不安な気持ちになってくる。

こうして、午後の部も終わり、文化祭一日目は無事に終了した。
お化け屋敷への今日の来場者数は、百人を超え、僕も筆ヶ崎さんも、クラス全員が喜んでいた。
人数は午後になってからが多く集まってきたため、午後班はくたくたに疲れていた。
僕や筆ヶ崎さんは、ときどきお化けや受付の仕事を手伝いつつ午後の部を過ごした。

今日は、みんなすぐに帰宅し、僕と筆ヶ崎さんも居残ることはせず、二日目のために早く帰った。

17話「僕らのお化け屋敷」（後書き）

どうでしたでしょうか。

ぜひ、この作品に関わっている方の作品も、

ご覧になってみてください。

１８話「キミとの文化祭」（前書き）

この作品は、以下の４名の作者によるリレー小説です。

水馬、ｙａｓｕ１９８０、チョコメロン、姫井星光

１８話の執筆者：水馬

（敬称略）

18話「キミとの文化祭」

翌日、『鉛筆ヶ浜高校文化祭、二日目を開始します！』という放送が九時になったのと同時に流れた。

二日目は準備が済んでいるため、一日目よりも早い時間でのスタートとなっている。

午前班は慣れた様子で持ち場に着き、僕と筆ヶ崎さんも昨日と同じように、廊下に置かれた椅子に座った。

すると、出口の方の戸が開き、当（あたり）くんが頭を出し、僕に向かって手招きをしてきた。

「……？」

僕が首を傾げても、手招きを続けるので、僕は当くんのもとへ寄っていった。

「なぁ、津久江。お前、昨日はロクに文化祭楽しんでないだろ？」

「ん～、ずっとここにいたからお店とか行ってないけど、でも楽しんでるよ」

「もっと楽しめって。筆ヶ崎もずっとあそこで現場監督やっているんだろ？　だったら、筆ヶ崎も誘って、実行委員二人で行ってこいよ」

当くんは筆ヶ崎さんに聞こえないように小声で、そんなことを言ってきた。

僕は思わず、

「ふ、二人で！？」

「しーっ。筆ヶ崎って案外お堅いところあるし、俺が言ったら、た

ぶんあの場所から動かないぜ？　それに比べたら、実行委員のお前からの誘いになら、乗ってくると思うんだ」
「で、でも……」
「あんまり無理すんなって。ずっと準備してきて、頑張ったんだから、今日ぐらい目いっぱい楽しめ。俺らは、もうやり方も分かったし、大丈夫だからさ」

ん～、ここまで、当くんに強く言われたら、筆ヶ崎さんを誘ってみようか。
僕個人としては、筆ヶ崎さんと一緒にデートできるのであれば、嬉しいことこの上ないんだけど。
果たして、筆ヶ崎さんが僕の誘いを受けてくれるだろうか。
『私は最後までここに居座るわ！』とか『一人で行ってくれれば？』みたいに軽くあしらわれたら――。
「え、文化祭を一緒にまわらないか、って？　べ、別に構わないけど……」

あれ、快く誘いに乗ってくれた？
え、ということは、これってデート……になるのか？

「それじゃ、行くわよ」
「う、うおぉっ！」

なんと、筆ヶ崎さんは僕の手を握り、引っ張るようにずんずん廊下を進んでいく。
これって、やっぱりデート、だよな？
デートなんだろ！？

「うちの高校の吹奏楽部、演奏上手いのねぇ」

「確か、大会で優勝しているみたいだからなぁ」
体育館で、吹奏楽部のクラシックメドレーを聴きながら、綿飴を食べる僕と筆ヶ崎さん。
ていうか、これはもう、デートでしょ？
頼むから誰か、デートだと言ってくれ。

「お二方の恋模様は……」

ごくり、と唾を飲み込む僕。
筆ヶ崎さんも、真面目な表情で水晶玉を覗き込んでいる。
やはり、女子は占いには興味があるのかもしれない。
二人で占いの館に来て、恋愛の運勢を占ってもらっている今なら分かる。
これは間違いなくデートだ。
デート以外の何ものでもないと思う。

「うん、この紅茶、美味しいわね」
「こっちのコーヒーも意外とイケるよ」

まったりと喫茶店を催している教室でくつろぐ僕と筆ヶ崎さん。
教室内には、心地よい音楽が流れており、緑をメインとした飾り付けが、準備で疲れた心を癒してくれている。

「ねぇ、津久江くん……」
「ん、なに？」

唐突に話しかけてきた筆ヶ崎さん。
一体なんだろう？

「私たち、なんだかデートしているみたいよね」
「っ！？」

筆ヶ崎さんの発言に、僕は口に含んでいたコーヒーを筆ヶ崎さんに吹きかけてしまうところだった。
危ない、危ない……。
どうにか堪(こら)えた僕は、ごくん、とコーヒーを飲み込み、一度小さく息を吐き、

「は、傍から見たら恋人同士に見えちゃうかもねぇ、ははははは～」

笑いながら動揺を隠してみたが、気持ちとしては、デートきたぜぇぇぇぇ！と叫びたい気持ちでいっぱいだった。

「さて、そろそろ違う教室行ってみるわよ」
「次はどこへ行こうか」

教室を出ていく筆ヶ崎さんに続くように、僕が教室を出ると――。

「あ……」
「やぁ、ヒツ」

十秒くらい僕の思考が停止した。
まさか……。
いや、嘘だろ？
幻覚だよね？
い、いや、もしこれが幻覚なら、筆ヶ崎さんとのデートも夢、幻に……。

じゃあ、これは現実？

「おい、どうした、弟よ」

「はぁ……っ、ついに姉の幻覚が見えるようになってしまった……」

「いやいや、姉はここにいるぞ。幻じゃないぞー」

「って、姉ちゃん！？」

「気が付くのが遅い……」

すっかり、姉ちゃんのことを忘れていた。

昨日は、くたくたに疲れて帰宅したから、姉ちゃんが文化祭に来るのではないか、という考えを、すっかりどこかに置いてきてしまっていた。

くそぅ、どうする、この破天荒な姉の対処を。

って、今、この場には――――。

「……もしかして、筆ヶ崎さん？」

「はい、筆ヶ崎ですけど」

「あぁ、いつもうちの弟がお世話になっています。姉の津久江（つくえ）真奈妃（まなひ）です」

「あ、筆ヶ崎瑞香です。津久江くんのお姉さんですか、お綺麗で」

「あははは、お世辞なんか言っても、なにも出ないわよぉ！　はい、唐揚あげる！」

右手に持っていた厚紙の容器を差し出した我が姉。

なにも出ないわよ、って唐揚出しているし……。

「はぁ……」

僕は小さく溜息を吐き、この姉の対処法に頭を悩ます。

それに、最近彼氏と別れた姉ちゃんのことだから、嫉妬して僕と

筆ヶ崎さんの仲を引き裂く可能性も無きにしも非ず……。

「お姉さん、ですか……」

「ヒツの……な子か……」

じっと見つめ合う姉ちゃんと筆ヶ崎さん。

見つめ合う？

いや、睨みあっているのかもしれない、よくは分からないけど。

どちらにしろ、教室の入り口の前に立ち続けるのはやめてくれ……他の人に迷惑だから……。

「弟から話は聞いているよ、実行委員をやっているって」

「あ、そうなんですか」

チラッ、と少しだけ僕の方を見た筆ヶ崎さん。

今、僕を見たのはどういう意味だろう。

僕が姉ちゃんに筆ヶ崎さんのことを話しているという事実に対して、なにか気になるところでもあったのか。

「姉ちゃん、ちょっとは空気を読めよ」

「文化祭デートはやるねぇ、弟よ」

「いや、僕が誘ったわけじゃねぇし」

僕は姉ちゃんと小声で、ひそひそと話す。

たぶん、筆ヶ崎さんには聞こえていないはず。

「よし、筆ヶ崎さん！　ぜひとも、ウチの弟をよろしく頼みます」

姉ちゃんの勢いに押され、筆ヶ崎さんは戸惑いながら『はい』と答えた。

「それじゃ、お幸せに〜」

筆ヶ崎さんにとっては意味不明であるだろう言葉を残し、姉ちゃんは人混みに紛れて、見えなくなってしまった。

まるで、嵐が通り過ぎたかのように、僕の心身はぼろぼろで、どっと疲れが出た気がする。

「面白いお姉さんね」

「そ、そうかなぁ……案外、遣り取りがめんどくさいよ……」

「それに、津久江くんいつもと違った喋り方をするのね」

「あ、まぁ……姉ちゃんとは、いつもあんな感じだよ……」

あまり他人には見せない自分を見せてしまった気がして、なんだか恥ずかしい。

姉ちゃんと話すときと、筆ヶ崎さんと話すときとでは、やはり言葉遣いは多少なりとも違いはある。

それにしても、姉ちゃん……『弟をよろしく頼みます』とか『お幸せに』って……。

筆ヶ崎さんは頭いいから、こういう言葉で連想して、もしも、僕が筆ヶ崎さんに告白しようとしているのがバレてしまったら、どうしよう。

告白する手間が省けるといえば、それで終わってしまうが、やはり、そういう大事なことは直接自分の口から言うべきであり、他人が言うことではないはずだ。

だから、筆ヶ崎さん、今起きたことは忘れてくれ！

「あそこよ、昨日のクレープ」

「ホントだ、トッピング自由って書いてある」

筆ヶ崎さんが指差したクレープ屋は三年生の催し物で、やはりレベルが違うのか、行列が続いていた。

「それじゃ、私、また食べたくなったから、並んでくるけど、津久江くんは待っていて。あと、トッピングは私に任せておいてね」

「あ、僕も――――」

『僕も並ぶよ』と言おうとしたが、筆ヶ崎さんはさっさと行列の最後尾へ向かって行ってしまった。

あとを追おうとしたが、待っていてと言われてしまった以上、ついていくわけにはいかない。

なので、しばらく、廊下の脇で待っているとしよう。

「あ、津久江くん」

「えと……どちら様？」

廊下の壁に寄りかかっている僕に声をかけてきたのは、クマだった。

正確には、クマの着ぐるみだ。

「よいしょ……あたしだよ、津久江くん」

「あ、先輩！」

クマは頭の部分を脱ぐと、奥条先輩の顔が現れた。

頭にはタオルを巻いており、汗をかいているところを見ると、十月とはいえ着ぐるみの中は暑いぐらい保温性がいいようだ。

「一人でどうしたの？」

「あ、筆ヶ崎さんと文化祭をまわっていて。今、筆ヶ崎さんはクレ

ープ屋の行列に並んでます」
「へぇ、瑞香ちゃんとデートか。津久江くん、やるねぇ」

へへへ、と照れ笑いする僕。
もしかして、筆ヶ崎さんって、案外僕のことが好きだったりして。
その“好き”は、恋か好意か、ラブかライクかは分からないけど、どちらにしろ、好かれているのであれば悪い気はしないし、むしろ嬉しい限りだ。
こうして、僕の誘うに乗ってくれたのだから、嫌いなはずはない。
それに、以前、奥条先輩が言っていた、
『津久江君。本当に好きな人はすぐ近くにいるのに、その人と分かりあえずに終わってしまう、ってすっごく辛いものなんだよ――』
という言葉。
なんだか、ずっと頭の中に残っていて、気になっていた。
もしかすると、これって筆ヶ崎さんのことなんだろうか……？
奥条先輩と筆ヶ崎さんは、昔からの友達みたいだから、お互いの考えていることは意外と分かるものなのかもしれない。

「あ、そろそろ体育館行かないといけないや」
「先輩のクラスって、何やっているんですか？」
「ん、演劇。あ、寸劇かも……いや、喜劇？　悲劇？」

『まぁ、面白いから時間あったら、二人で一緒に観に来てよ』と、そう付け足して、奥条先輩は廊下の角を曲がっていった。
と、奥条先輩と入れ替わるように、今度は透がやってきて、僕の傍に寄ってきた。

「よぉ、日月、一人でどうした？」
「あぁ、実は今、筆ヶ崎さんとデートしていてな」
「な、なにっ！？」

「ふっふっふ、透を出し抜いてやったよ」
「くっ……昨日、あそこで叫び声を上げなければ……」

落胆する透。
しかし、励ましてはいけない。
僕と透は同じ人を好きになった恋敵同士だ。
普段の何げない遣り取りは問題ないが、筆ヶ崎さん絡みとなれば、敵同士だ。

「なぁ、日月」
「ん、なんだ？」
「ここでこんなことを言うのは男としていけないのかもしれないけど、何だか、筆ヶ崎はお前といる方が楽しそうな気がするんだ……」
「え……？」

透、僕と筆ヶ崎さんが美術室前の廊下で話しているのを見ていたのか。
それとも、準備期間中か。
僕は筆ヶ崎さんといて楽しいし、幸せで、嬉しいけど、筆ヶ崎さんからしたらどうなんだろう。
実行委員の仕事は一緒にやることが当たり前な感覚になっていたから、あまりこういうことは考えたことなかったな。

「日月と筆ヶ崎は、実行委員なんだろ？　明らかに俺の方が不利だよな、アピールもなかなか出来ないしさ……」
「と、透……そんな弱音吐くなんて、お前らしくないぞ」
「いや、弱音とかじゃなくてさ……筆ヶ崎の気持ちを考えたら、やっぱり、お前が相応しいのかもしれない、と思ってさ」

僕のほうが相応しい？

筆ヶ崎さんの気持ち？
もしかして、透も奥条先輩のように筆ヶ崎さんの想っていることに気が付いているのかもしれない。
僕は、こういうのに疎い傾向があるから、誰かに言われるまでなかなか気が付かないんだけど。
となると、本当に筆ヶ崎さんは僕のことが好きなのか……？

「なんか、変だな、俺。急にこんな話、始めちゃってさ。ＴＰＯをわきまえないとな」

はっはっは、と高らかに笑う透。
でも、なんだか今の透は、無理をして笑っているような気がする。
きっと、筆ヶ崎さんのことが本当に好きな気持ちと、親友であり恋敵の僕に対する申し訳なさの気持ちがぶつかり合って、透自身、混乱しているんじゃないだろうか。

「ま、まぁ、そういうわけだ。どちらかが告白して、付き合うまでは恋敵同士だからな！　もし、俺が先に奪っても文句言うなよ」
「あぁ、勿論さ。透に負けるもんか」

僕と透は、がちっと固い握手を交わし、人混みの中へ入っていく透を見送った。

「ただいま」
「うおわっ！」

急に声をかけられ、思わず大きな声を上げてしまった。
筆ヶ崎さんは、両手にクレープを持っており、こちらをジト目で見つめている。

「なに驚いているのよ。なにか、怪しいことでもしていたわけ？」
「べ、別に、そんなんじゃないよ！」
「そう、ならいいけど。はい、これ、津久江くんのぶん」
「ありがとう、筆ヶ崎さん」

僕は勢いよく、クレープを口に入れ――――。

「か、辛ぁっ！　うおぉぉ、な、涙が止まらない！！」
「あはははは、唐辛子よ、それ」
「な、クレープになぜ唐辛子……う、舌が焼ける……」

悶え苦しむ僕の姿を見て、笑っている筆ヶ崎さん。
しかし、

「はい、お水」

水の入ったペットボトルを差し出してくれた筆ヶ崎さん。
あぁ、やっぱり、優しいなぁ……、とそんなことを思いながら、水を一気に飲む。

「はぁ……はぁ……死ぬかと思った」
「あはははは、やっぱり、津久江くんといると楽しいわね」
「はは、そ、それはどうも……うぅ、まだ口の中が……」

まさか、今の筆ヶ崎さんの言葉で、口の中の辛さが吹き飛んでしまうとは……。
恋のパワー、恐るべし！
『津久江くんといると楽しいわね』という言葉、今も脳内でリピートされている。

「あ、もうこんな時間」
「そろそろ文化祭も終わりか……」

時刻はまもなく、文化祭終了となる四時になろうとしていた。

「それじゃ、教室戻りましょ」
「今日は、何人くらい来ているかな？」
「七百人は来ていて欲しいわね。昨日と合わせれば千人突破よ」

そんな他愛のない会話をしながら、僕と筆ヶ崎さんはお化け屋敷の会場である美術室に戻ると――。

「はーい、もっと近づいてー。じゃあ、撮りますよー」

廊下には、チェンソー男役の当くんや、不気味像役の椅田くんが、お客さんと仲良く記念撮影をしていた。
一体、これはなにごとだ？

「椅田くん、これ、何事？」
「あ、戻ってきたのか、津久江。実は、番（ばん）が満員御礼で記念撮影やろうって言い始めてさ。そしたら、大行列で、この有様よ」

なるほど、この混雑している廊下はそういうことだったのか。
僕が、うんうん、と頷いて納得していると、筆ヶ崎さんが紙を持ってやってきた。

「これ見て」
「ん……え？　１０１７人！？」
「ばか、それは今日の日付、十月十七日よ。来場者数はこっち」
「さ、三百！？」

その用紙には、三百二十人と書かれていた。
僕は、何度か目を擦ったり、頬をつねってみたが、夢、幻ではなく、本当に三百二十人だった。

「筆ヶ崎さん……」
「なに？」
「これって、大成功だよね？」
「そうね、大成功以外の何ものでもないでしょ、これは」

筆ヶ崎さんは平静を装っているようだが、微笑んでいる表情で、内心はとても喜んでいるんだろうということが分かる。
あぁ、可愛らしいなぁ。嬉しいなぁ。幸せだなぁ。
僕の顔はややにやけ、内心は筆ヶ崎さん以上にいろいろな気持ちで溢れている気がする。

放課後。

『全校生徒の皆さん、文化祭二日間お疲れ様でした。これより、各クラスは使用教室の片付けを――――』

校内放送は依然流れているのだが、僕は美術室のスピーカーのスイッチを切った。
そして、筆ヶ崎さんの横に並んだ。
その横には、御手洗先生もいる。

「みんな、二日間お疲れ様！　やっぱり、楽しかっただろ、文化祭

は！」

いつも通り、ジャージ姿の御手洗先生。

大きな声でそう言った。

「まぁ、その楽しい文化祭に出来たのは、やっぱり、筆ヶ崎と津久江のおかげだと先生は思っている」

クラスメイトの中でも、頷いている人たちが見受けられる。

「まだ片付けは残っているが、とりあえず、二人を祝おう！　みんな、胴上げだ！」

先生のその言葉を皮切りに、クラス全員は僕たちのもとへ駆けてきた。

筆ヶ崎さんはさっと回避し、ノリのいいクラスメイトは僕や御手洗先生を標的とした。

「う、うわっ、あ、危ないって！」

初めての胴上げ。

実行委員としてやり遂げた僕を、みんなが認めてくれたということなのかもしれない。

それにしても、結構怖い……。

これが、ギャクとかでよくあるように落とされでもしたら、さすがに上手い着地は出来ないだろうなぁ。

僕の隣では、なぜか先生が胴上げされている。

一分くらい胴上げされた後、落とされることなく安全に降ろしてもらった。
僕も先生も安全だ。ケガはない。
「さて、さっさと片付けして、明日は打ち上げだー！」
何だかんだで、先生が一番やる気があって、ノリがよくて、文化祭を楽しんでいる気がするのは、きっと、僕だけではないはずだ。
まぁ、そんな感じでも、先生は先生。
今の一言で、みんなはすぐに片付け作業に入った。

「筆ヶ崎さん」
「なに？」
「ちょっと、明日、話したいことがあるんだけど……」
「今日じゃダメなの？」
「今日話してもいいんだけど、行くところもあるから、明日の明るい時間帯の方が都合いいし」
「それって、お化け屋敷が成功したら聞いてほしいお願い、かしら？」
うん、と僕は頷いた。
それを見て、筆ヶ崎さんは『分かったわ』とだけ言うと、クラスメイトの片付けを手伝いに行ってしまった。
「さて……」
自ら、頬を軽く叩き、気合を入れ直し、僕も片付け作業に取り組むのであった。

18話「キミとの文化祭」（後書き）

どうでしたでしょうか。

ぜひ、この作品に関わっている方の作品も、

ご覧になってみてください。

最終話「二人の想いは紅葉色」（前書き）

この作品は、以下の４名の作者によるリレー小説です。

水馬、ｙａｓｕ１９８０、チョコメロン、姫井星光

最終話の執筆者：水馬

（敬称略）

最終話「二人の想いは紅葉色」

「かんぱーい！」

御手洗先生は高らかにビールの入ったジョッキを頭上に上げている。

みんなも、ガラスのコップを近くの人と付き合わせ、乾杯をした。

「先生、昼からビールって……」

「ほら、津久江！　いっぱい食べないと大きくなれないぞぉ～。それに、バイキングなんだから、遠慮するな！」

すでに酔いが回っているらしく、先生の顔は真っ赤だ。

そんな先生が僕の前に唐揚山盛りのお皿を置いた。

一体、どこから出してきたのだろうか。

まぁ、そんなことはどうでもいい。

今は、この打ち上げを精一杯楽しむことにしよう。

「ねぇ、津久江くん」

「あ、筆ヶ崎さん」

女子の席にいた筆ヶ崎さんが、いちごのショートケーキの乗った皿を持ち、僕の隣の椅子に腰掛けた。

そして、赤く熟れたいちごをぱくりと食べ、皿をテーブルに置いた。

「一昨日、時間があるときに話しをするって私が言ったの、覚えている？」

「うん、覚えている。筆ヶ崎さんの方こそ、お化け屋敷が成功した

ら一つだけ聞いてほしいことがある、って僕が言ったの、覚えているよね？」
「忘れてないわよ」
「なら良かった。それじゃあ、打ち上げが終わったら……いいかな？」

こくりと小さく頷いた筆ヶ崎さん。
ケーキの乗った皿を持って、女子の席へと戻っていった。

そして、一抹の寂しさを残しつつ、この打ち上げを以って、文化祭に関係するものは全て終わった。
先生は、二次会をすると言って、カラオケへ行くかどうか生徒に聞いて回っている。
本当にあの人は、教師として大丈夫なんだろうか。
今日、明日と文化祭の代休で休みだけれど、休み明けに登校して、先生がいなかったら笑いごとでは済まないだろう。まぁ、不安ではあるが。

僕は二次会へは行くつもりはない。おばけ屋敷は大成功だった。
少し勇気がいることだったが、クラスの友達となにか話している筆ヶ崎さんを見つけ、呼びとめた。

「筆ヶ崎さん、ひとつだけ聞いてほしいことがあるって、前に約束したよね？」
「えっ？　何よ、突然……たしかにそんなこともあったわね」
「聞いてくれるかな？」
「そうね、おばけ屋敷は大成功だったし、いいわよ」

「それじゃ、頼みごと、聞いてくれるかなぁ」
コクリと小さく頷く筆ヶ崎さん。
「じゃ、言うけど、一緒に来てほしいところがあるんだ」
「……約束だからね、分かったわ。でも、どこへ行くの？」

僕たちは消え入るように打ち上げ会場を後にした。
実は打ち上げ中、墨也さんとメールで連絡を取り合い、筆ヶ崎さんのリアルホラー嫌いの根源である廃屋の場所を教えてもらっていた。
さらに、そのメールには筆ヶ崎さんの寝顔画像が添付されていたのだが、なんだか良心が咎めて、消すことにした。
やや、後悔はしたものの、『あれでよかったんだ……』と必死に自分に言い聞かせている。

「もう、すっかり秋ね」
「今年は、紅葉が早いよなぁ」

僕と筆ヶ崎さんは、軽い傾斜の山道を歩いている。
打ち上げを行なったバイキング店は、すっかり見えなくなっていた。
十分くらい歩き続けると、生活するために必要な最低限のスペースで作られたような、小さめの一軒家を発見した。
その周囲には、木々が育っているだけであり、ひと気も、人が住んでいる気配もない。
パッと見のイメージでは、戦後くらいに立てられたような家に見えなくもないが、詳しいことはこの際どうでもいい。

ここでやるべきことやればいいんだ。

「着いたよ」
「ここ……気味悪いわね……こんなところに連れてきて、一体どうしようって言うの」

筆ヶ崎さんの声のトーンが、少し落ちているのが分かった。
辺りをきょろきょろ見渡し、警戒し始めている。
これは、早めに事実を話すべきなのだろうか。

「ちょっと入ってみよう」
「え……つ、津久江くん、私がリアルホラー苦手なのは知っているでしょ？」

声が震えている筆ヶ崎さん。
やはり、心霊スポットと言わずとも、そういう雰囲気の時点で嫌な気分になるのかもしれない。

「……その苦手になった理由がここにはあるんだ」
「その場所に来たということは、津久江くん……私にリアルホラーを克服して欲しいの？」
「放課後の学校に残れないとなると、将来、残業とか出来ないかもしれないなぁ、と思ってさ。克服したほうが、いいと思うんだ」
「……た、確かにそれはそうだけど……でも」

今にも、泣いてしまいそうな筆ヶ崎さん。
これほどまでに弱々しい筆ヶ崎さんを見るのは初めてだ。
やっぱり、それだけ、ここでのことがトラウマで、心に大きな傷をつけているのだろう。

「大丈夫……僕がついているから」
「……よく分からないけど怖い……何が怖いのか分からないけど怖いのよ」
「……僕が、助けてみせるよ」

僕は筆ヶ崎さんの右手を左手で強く握り、一歩、一歩とゆっくり廃屋へ近づいていく。
筆ヶ崎さんも、本当にゆっくりではあるが、少しずつ廃屋へ歩みを進める。

「開けるよ……？」
「……ま、待って！」

筆ヶ崎さんは目を瞑り、大きく深呼吸をした。
そして、震える唇を噛みしめながら、自ら戸を開けた。

ガラッ。

古い家ということもあり、きっと戸は開きにくいのだろうと思っていた。
しかし、案外、すんなりと開いてしまった戸。
埃まみれの床や、木の葉の落ちている土間。
薄暗い奥の部屋はとても気味が悪い。
僕たちは一歩ずつ中へ踏み入れた。

「……筆ヶ崎さん、ここでの思い出、覚えている？」
「……お、思い出……分からないわ」

筆ヶ崎さんは左手で頭を抑えている。
今の筆ヶ崎さんは、とても辛くて、苦しいのだろう。

それが、足や唇の震えから十分伝わってくる。

「じゃあ、真実を話すよ……辛いかもしれないけど、聞いて」

「……えぇ、聞くわ」

「実は、筆ヶ崎さんは昔――」

僕は話した。

ファミレスで、墨也さんから聞いた話を。

墨也さん自身も筆ヶ崎さんに話していたと言っていたが、再度話しておけば、嘘ではないことを信じて貰えるかもしれないと思い、きちんと話すことにしたのだ。

「……それ、お兄ちゃんも言っていた話……やっぱり、本当なの？」

「お兄さん曰く、真実で……その体験が筆ヶ崎さんの心に傷をつけてしまって……」

「私の中では、今も恐怖体験は続いている……」

「もう、十年も前にそれは終わったんだよ、筆ヶ崎さん……」

僕は、少しだけ声を大きくして言った。

筆ヶ崎さんが驚かないようにするための配慮でもある。

「だから、なにも恐れることはないんだよ。あれはお兄さんたちの仕業で――」

「い、いやっ！！」

筆ヶ崎さんは僕が握っていた手を振りほどき、廃屋を飛び出し、近くの木の下まで駆けていく。

勿論、僕もそのあとを追う。

木の下でしゃがみ、両手で肩を押えている筆ヶ崎さん。

その小さく、華奢な身体は小刻みに震えている。

「やっぱりだめ……大丈夫と思っていても……身体が拒絶する……」

今にも消えてしまいそうな、そんな小さな声で、筆ヶ崎さんは言った。

こういうとき、僕はどうすればいいんだろう。

クラスメイトとして、慰めの言葉でも言えばいいのか。

それとも、一人の男として、女である筆ヶ崎さんを優しく抱いてあげるべきなのか。

僕には、なにをしていいのか分からない。

「でも、すごいよ、筆ヶ崎さん！　廃屋に入ることが出来たんだから、時間をかけてやっていけば、絶対に克服できるよ」

でも、分からないから、僕は、ただ筆ヶ崎さんの隣に座って、手を握ってやり、励ましの言葉をかけてやることしかできなかった。

「そうかもしれないわね……でも、今日はもう無理……気が滅入ってしまうわ」

「うん、無理はダメだ。しばらく、ここで休もう」

昼下がり。

太陽の強い日差しは、僕たちが寄り添っている木の葉っぱによって和らぎ、木漏れ日となっている。

周囲は静寂に包まれず、川の流れる音や、動物の鳴き声が聞こえてくる。

「少しずつでいいから克服していこうよ。僕に出来ることがあれば、なんだってするよ」

「ねぇ、津久江くん」

「ん、なに？」
「私、津久江くんにはとても感謝しているわ、わたしのことこんな親身になって思ってくれているから」
僕は、木の枝で落ち葉をいじることで、照れを隠した。
本当はにやけ顔、もしくは満面の笑みをしたいとろなんだけど、ここは平静を保って、微笑み程度を浮かべる。
「それに、たぶん、実行委員が津久江くんじゃなかったら、お化け屋敷も成功しなかったと思う」
「え、僕ってそこまで重要な役柄だった？」
「うん、私にとって津久江くんはとても重要――いや、大事な、大切な人なのよ」
ん、大事、大切な人？
これって……もしかして……。
今なら告白できるかも。
いや、今だろう。
今、このときが、きっと告白するべきタイミングなんだ。
そうだ、文化祭実行委員を決めたときも、勇気を持って踏み出した一歩が、ここまで道を作ってくれたんだ。
だから、今、僕は筆ヶ崎さんに想いを伝える！
「筆ヶ崎さん…その…」
僕は立ち上がる。
「津久江くん、なに？」
筆ヶ崎さんも立ち上がる。

「私に“ひとつだけ聞いてほしいこと”はもう済んだはずよ？」
「うん、実はもうひとつあるんだ、筆ヶ崎さんに聞いてもらいたいこと――――僕の想いを」

そよ風が優しく頬を撫で、落ち葉が舞い、木漏れ日が射しこむ。
どくん、どくん、と僕の心臓は大きく高鳴り、今までに感じたことのない、不思議な緊張と恐怖に襲われた。
告白って、緊張するだけじゃなくて怖いものでもあるんだな。
僕は、深呼吸をして呼吸を整え、筆ヶ崎さんの目を見た。
黒くて澄んだ美しい瞳もこちらを見つめている。

僕は、筆ヶ崎瑞香さんが好きだ。
一見、クールで、常に冷静沈着そうに見えるが、素の筆ヶ崎さんはとても可愛らしい。
笑っているとき、弱々しいとき、楽しそうなとき、怒っているとき、ツンのとき、デレのとき。
どの表情も全部筆ヶ崎さんで、とても好きだ。
そして、優しくて、ツンデレで、強気のときもあれば弱気のときもあって、ちょっとS気質があるけど、そんな内面もかなり好きだ。
外面も、内面も、全てひっくるめて――――。

「僕は筆ヶ崎さんのことが好きだ」

い、言ったぞ。

言ってやった。
夏休み終了とともに決心した“筆ヶ崎さんに告白”するという目的。
僕は無事に果たした。
結果はどうであれ、やり遂げたぞ、僕は。

「津久江くん……」

筆ヶ崎さんの顔はやや赤らんでおり、恥ずかしそうな表情で僕と目線を合わせている。

「私も好きよ」

え……。
それって、友達として？　それとも、異性として？

「も、もちろん、異性として好きってことよ」
「それじゃ……お付き合いは……？」
「津久江くんが問題ないなら、そ、その、つ、付き合ってあげてもいいわよ」

ぷいっ、と横を向いてしまった筆ヶ崎さんだが、すぐに前を向き直し、僕を見つめる。
筆ヶ崎さんの穿いている赤と黒のチェック柄スカートが、紅葉を始めている周囲の木々の色合いといい具合にマッチし、今の筆ヶ崎さんはとても綺麗で、可愛い。

「筆ヶ崎さん……好きです」
「わ、私も津久江くんのことが好きよ」

僕と筆ヶ崎さんの距離が近づく。
三十センチ、二十センチ、十センチ……五センチ……。
「異性に抱かれるのって、お父さん以来かも……」
「僕なんて、異性を抱いたのは初めてだよ……」
僕は、両腕で筆ヶ崎さんの、華奢で細身な身体を優しく抱き寄せる。
それに合わせて、筆ヶ崎さんも僕の身体に抱きついている。
僕と筆ヶ崎さんの身長はあまり、大きな差はなく、僕が１６８くらいだとすると、筆ヶ崎さんは１６５くらいだろうか。
だから、筆ヶ崎さんの頭は僕の胸に少し当たる程度。
「ねぇ、これからどうするの？」
「もう少し、このままでいない？」
「うん……いいわよ」
お互いの、どくん、どくん、という心臓の高鳴りがシンクロしているように感じる。
僕は、筆ヶ崎さんの黒くて艶のある髪を優しく撫でた。
「ねぇ、来年はなにしようかしら」
「え、もう来年の文化祭の話？」
「来年こそは、最叫（さいきょう）のお化け屋敷を作るわよ」
「ははは、そうだね。でも、クラス替えあるよ？」
「別に違うクラスでもいいじゃない」
「それって、僕は違うクラスの催し物を手伝うってことでしょ？」
「その通りよ」
クラス替えで必ずしも筆ヶ崎さんと違うクラスになるとは限らな

い。
　というか、他のクラスの催し物を手伝わせるって、筆ヶ崎さんらしいなぁ。
「早速する構想を練ろうかしら。もちろん、津久江くんも参加よ」
「えぇ～」
　ははは、という僕と筆ヶ崎さんの朗(ほが)らかな笑い声が野山に木霊した。
　そして、僕たちは再び抱き合い、互いが好きという気持ちを確認し合う。
紅葉は、まるで、僕たちの心情、好きという気持ちを表しているかのごとく、赤みがかっている。
そんな散りゆく紅葉は、想いを告白し合った僕たちを祝福するかのように、華麗に、綺麗に、美しく舞っているのだった。

最終話「二人の想いは紅葉色」（後書き）

どうでしたでしょうか。

今回の話で、このリレー小説は終わりです。

文化祭から最後までは、私、水馬が書かせていただきました。

ここまで、読んでくださった方、ありがとうございます。

ぜひ、この作品に関わっている方の作品、活動報告など、

ご覧になってみてください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7066k/

リレー小説「キミとの文化祭」

2010年10月9日03時03分発行